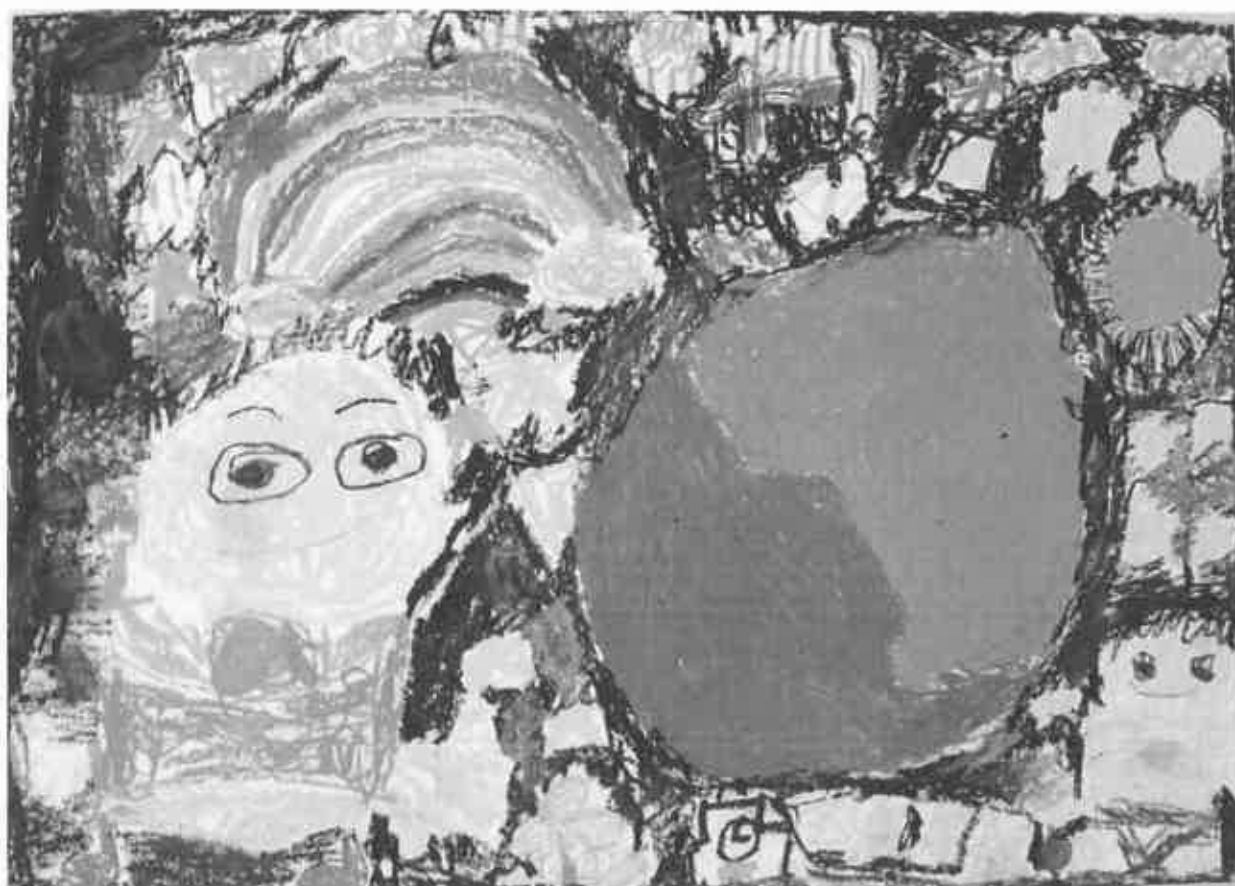


平成28年度
研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

挨拶

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

平成28年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究の18校及び指定学校研究の9校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

社会の変化が加速度を増し、改めて教育への期待が高まる中、教員一人一人が「その職は高度に専門的なものであり、社会の活力を作り出す重要な職である」との誇りを持ちつつ、高い志で自ら研鑽することが求められております。

川越市と川越市教育委員会では、第二次教育振興基本計画の基本理念を「生きる力と学びを育む川越市の教育」として、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、様々な取組を推進しております。また、各学校においては、これを具現化するための教育活動、特色ある学校づくりに取り組んでいただいているところです。

こうした中、研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、教員の意識改革や指導方法の工夫、校内の学習環境の整備等、教育活動をより深化・充実させるために実践を重ねてこられました。

それぞれの学校の研究成果は、仲間との交流や関わりを深めていく児童生徒の姿、体験を通して探究する力を身に付けていく児童生徒の様子、運動に親しみ、その技能を高めていく児童生徒の増加、主体的・対話的で深い学びを目指す児童生徒の取組など、子どもたちのよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の8校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、本集録にまとめられた研究内容や成果を、個々の学校の状況に応じて教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができるような子どもを育成するために、その取組を一層推進していただきたいと思っております。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。挨拶といたします。

研究主題

「仲間との交流を深め、進んで表現する仙波っ子の育成」

～言語活動を通して表現力を高める指導の研究（書く活動を中心として）～

川越市立仙波小学校

研究のポイント

- 表現力の形成を意識した取組を全校で行う。
- 「書くこと」に関わる言語活動の充実に指導の重点を置く。
- 目指す児童像をキャッチフレーズにして共通理解を進める。
→キャッチフレーズ・「いきいきと」「じっくりと」「にっこりと」

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の教育目標「心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を図るため、以下のねらいで学校研究に取り組んだ。

- ①国語科の授業実践を通して、児童の思考力・判断力・表現力を身に付けるための指導方法の工夫・改善を図る。
- ②各種学力調査やアンケート等を分析・活用して、本校児童の実態にあった指導計画の改善・指導法の工夫や学習環境の整備充実を図る。
- ③単元を貫く言語活動を位置付けることで育成すべき国語の能力の向上を図る。

(2) 研究主題設定の理由

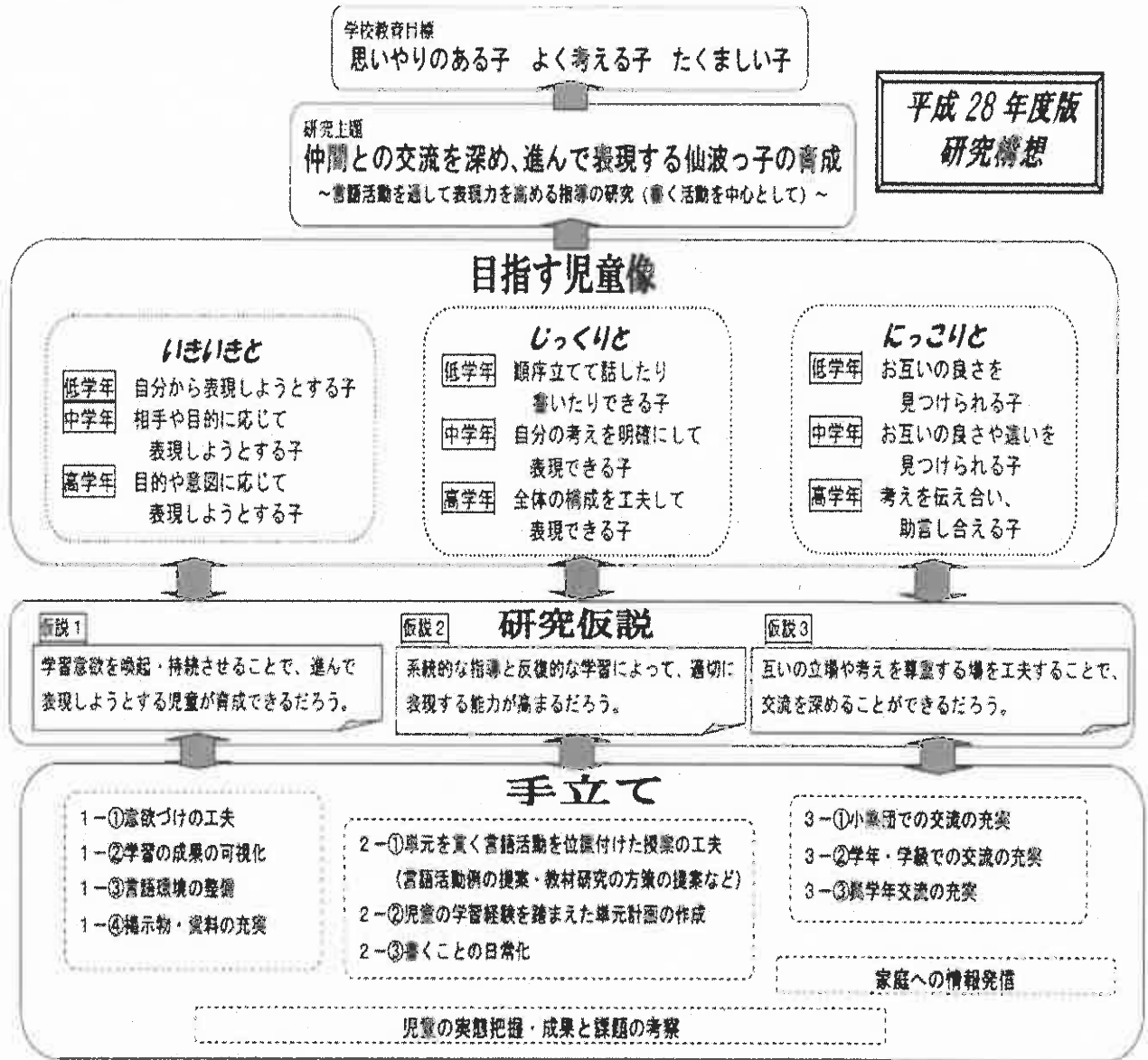
研究主題は「仲間との交流を深め、進んで表現する仙波っ子の育成」である。

研究初年度の研究結果から、言語に関する能力の育成を図ることが重要であることが明確となった。これを受けて、①表現力の形成を意識した取組を全校で行うこと②「書くこと」に関わる言語活動の充実に指導の重点を置くこと、の2点を研究の重点に設定した。研究主題を「仲間との交流を深め、進んで表現する仙波っ子の育成」とし、平成27年度より本年度の2年間国語科指導法の実践研究に取り組んだ。以下の具体的な方策で研究を進めている。

(3) 研究組織



研究構想図



2 研究の内容 (初年度より3年間の研究内容について)

平成26年度は研究領域を「書くこと」に絞り、「課題設定→構成→記述→推敲→交流」の各段階における指導の充実を図った。本研究により、何を学ぶべきかがはっきりしていたために見通しを持って学習に取り組めたこと、視写課題への取組により記述の速度が上がったこと、実態に応じた原稿用紙やワークシートを活用したことで書くことへの抵抗を減らすことができたなどの成果がみられた。平成27年度は更に研究を推進するため、全校で共通した取組、仮説に対する具体的な手立てと実践、言語活動の工夫と検証に焦点をあて、国語科指導法の実践研究に取り組んだ。28年度は、児童同士が良さを認め合ったり、アドバイスをし合ったりする活動がより充実するよう、仲間との交流を軸にした教材研究に取り組んだ。

3 実践事例 (第4学年の実践)

- (1) 単元名・教材名 「なるほどブック」を作って、和と洋の良さを伝えよう
「くらしの中の和と洋」

(2) 単元構想について

第一次	第二次	第三次
<ul style="list-style-type: none"> ・今までの説明文の学習を振り返る。 ・学習計画を立てる。 ・教師自作の「なるほどブック」を見て、学習の見通しを立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材文の文章構成や、対比の構造を読み取る。 ・教材文の具体例について、叙述に即して体験し、語句への理解を深める。 ・引用や要約の方法を知る。 ・教材文の内容について「なるほどブック」にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の調べたい和と洋について「なるほどブック」にまとめる。 ・ブックを完成させてお互いに読み合う。


並行読書

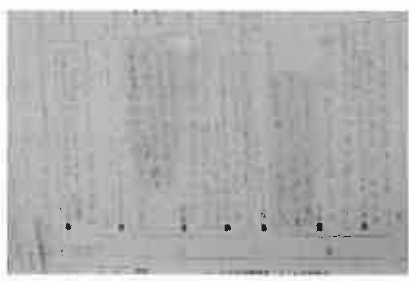
指導のポイント

○教師の作例を見せて、言語活動のイメージがもてるようにする。
 ○同じテーマの児童同士で協力して調べさせる。言語活動に繋がる調べになるよう適切な助言を行う。

○言語活動の過程で悩んだことや迷っていることなども伝え合い、交流によってよい作品が生まれるようにする。
 ○教材文の読み取りの段階で、引用で用いる言葉「～によると」や要約に用いる言葉「つまり」などが適切に使えるよう指導する。
 ○内容や表現についての感想を伝え合うようにする。

(3) 本時の展開

学習活動	時間	○教師の働きかけ・児童の意識の流れ	●指導の工夫（手立て）と評価
1 前時の学習を振り返る。	2	○調べるテーマについての和と洋の引用、良さを付箋に書きましたね。 ・ぼく達は「○○と△△」について調べるよ。 ・早く「なるほどブック」を書きたいなあ。	●前時の学習の成果を確認し、頑張りを認める。 ●自分の使う資料（本・インターネット・実物・写真）などを用意させる。
2 本時の学習課題をつかむ。	1	調べたことをもとにして、「なるほどブック」の文章を書こう。	
3 文章の構成を考える。	7	○付箋の中から、「なるほどブック」の文章に使えるものを選んで構成表に貼りましょう。	●各自で用意した付箋から取捨選択し、構成表にまとめる。 ●興味を持って交流できるように異なるテーマで3人組をつくる。 ●言語活動の過程で悩んだことや迷っていることなども伝え合い、交流によってよい作品が生まれるようにする。
4 構成表をもとに交流をする。	9	○引用や要約、自分の考えの書き方について、3人組で交流しましょう。 ・その引用でよいと思うよ。 ・その引用ではわかりにくいよ。もう少し増やしたほうがいいよ。 ・どう書いたらよいかなあ。 ・一緒に考えよう。	



5 引用するときの書き方を確認する。	5 ○引用するときのポイントには、どんなものがありましたか。 ・「～によると」を使います。 ・もとの文章のまま書きました。 ・必要な部分だけ書きました。 ・本の題名と載っていたページを書きました。 ・「つまり」を使ってまとめと自分の考えを書きました。	●和については黄緑色、洋については水色の用紙を使用する。
6 自分で選んだテーマの文章を書く。	15 ○構成表をもとにして、文章を書きましょう。	●言語活動に取り組むときに使われる言葉を掲示して、書くことが苦手な児童への支援をする。

<評価場面>

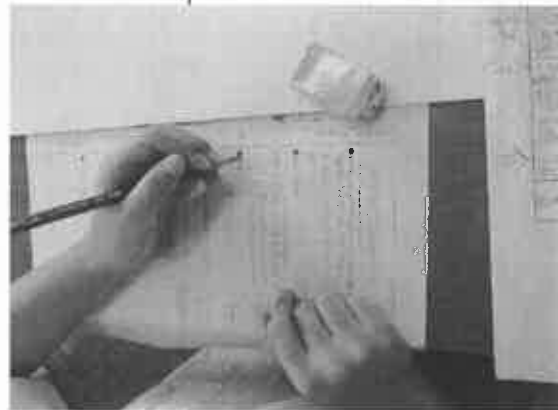
【学習活動に即した評価基準】

引用と自分の考えを関連付けて、「～によると」や「つまり」「～に対して」などの言葉を使いながら整理して書いている。

〈評価方法〉「なるほどブック」の記述の考察

〈手立て〉

- ・十分に書くことができる児童は、複数の引用をして自分の考えと関連付けて書くよう助言する。
- ・「それに対して」「つまり」などの言葉を適切に使うことのできない児童には、キーワードを入れたワークシートを活用させて、整理して書くよう指導する。



7 学習の振り返りをする。	6 ○友達の手いた文章を読んでみましょう。 ○「～によると」「つまり」などを使って書くことができたか、振り返りカードに記入しましょう。	●児童の手いた文章をスクリーンに映し出し、学習の成果を確かめる。 ●意欲的に取り組んでいた児童を称賛する。 ●次時への意欲を持たせる。
---------------	---	---

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・どの学年でも、学習の見通しを持つこと、言語活動に十分な時間をとること、学習の成果を可視化することなどの共通理解を図ってから教材研究に臨むことができた。
- ・仲間との交流を学習過程に位置づけ、友だちのよいところを見つける活動に多く取り組ませ、よりよい人間関係づくりにつながった。

(2) 課題

- ・より適切な言語活動の設定及び並行読書を行うための図書の精選については、年間指導計画への位置付けも見通して、今後も研修を継続していく。
- ・言語に関する知識を増やすための具体的な手立てについて、引き続き日頃の授業の中で実践していく。

研究主題

「心豊かで、温かい関わりを深める南古谷っ子の育成」
～自ら問題意識をもち、生き方を考える道徳教育の創造～

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- 「特別の教科 道徳」を見据えた道徳の時間の創造
- 自ら問題意識をもち、道徳の時間の指導方法の工夫
- 話し合い活動を取り入れ、考えを深める言語活動の充実
- 児童の規範意識と豊かな心を育むための取組
- 道徳的実践力を高める教育環境、地域・保護者との連携

1 研究の概要

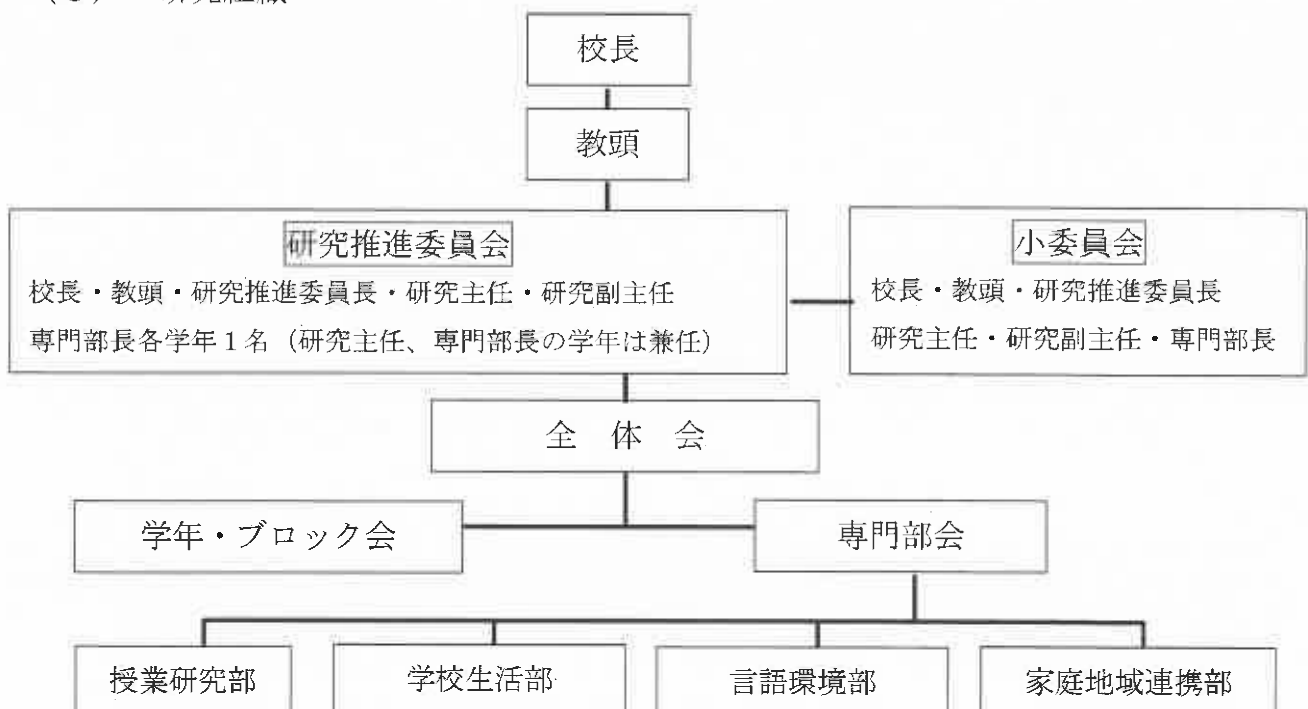
(1) 研究のねらい

児童が様々な出来事に直面し、そこで起こりうる様々な問題に対して、自分の考えをもち、周りの人々や環境を考えながら自分なりの生き方を考えることができる児童を育成することを目指した。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童の課題は、生活規律に個人差があり規範意識が低いこと、コミュニケーションの力が足りないこと、思考力、表現力が低く、自分の考えを伝えられる子が少ないことなどである。そこで、子供たち一人一人がこれから直面する様々な出来事に対して、それをしっかりと見つめ、判断し、実行していく必要がある。他人事ではなく「自分ならどうするか。」ということを受容し、考えて実践できる児童を目指していきたいと考え、「心豊かで温かい関わりを深める南古谷っ子の育成」を主題とし、～自ら問題意識をもち、生き方を考える道徳教育の創造～という副題のもと道徳教育を中心に研究を進めることにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- ・豊かな心や規範意識など道德教育全般に関する研究
- ・自ら問題意識をもつ道德の時間の指導方法に関する研究
- ・子供たちの考えを深める話合いに関する言語活動の研究
- ・保護者・地域社会との効果的な連携の在り方に関する研究

(1) 目指す児童像

- 豊かな心、豊かな関わりがもてる子
- 自他を理解し、他者とともによりよく生きる子
- 様々な出来事を見つめ、判断する子
- 「自分ならどうするか。」を考え、実践する子

(2) 研究の仮説

仮説1『心に響く道德の時間の指導の工夫を行うことで、自己の生き方について考えを深められるであろう』

検証 授業研究部

仮説2『自分の思いを伝え合う力を高めることで、互いに認め合えるであろう』

検証 言語環境部

仮説3『規範意識を高め、豊かな心を育み、学校・家庭・地域よさを実感させれば、よりよく生きようとする児童が育つであろう』

検証 学校生活部・家庭地域連携部



4つの専門部と主な活動

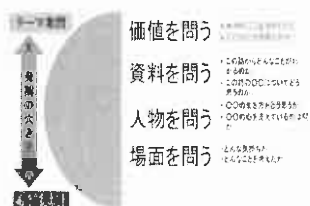
3 実践事例

① 授業研究部 ～7つの指導方法の工夫～

「教材提示」「発問」「話合い」「書く」「表現活動」「板書」「説話」について学年毎に工夫を行い、実践を重ねてきた。



紙芝居



発問の工夫



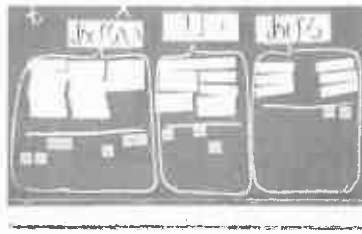
話合いグループの工夫



ふき出し入り
ワークシート



動作化の工夫



ネームプレートの活用



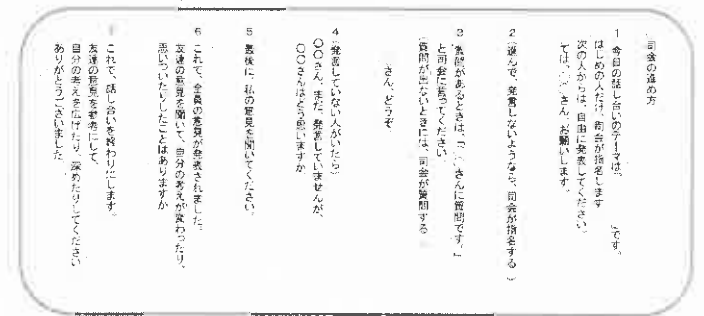
ゲストティーチャーによる説話

② 言語環境部～話し合いのモデル動画と司会のすすめ方の作成～

教師が実際に話し合っている様子のモデル動画と話し合いの際の司会のすすめ方を作成した。



モデル動画の話し合いの様子



司会のすすめ方

③ 学校生活部 ～規範意識と豊かな心の育成～

特別活動と生徒指導を中心に、規範意識と豊かな心を育む環境を整えた。



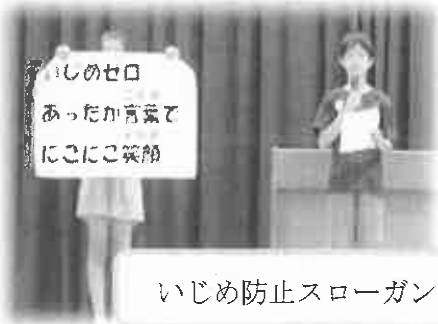
靴そろえ

生徒指導掲示の設置



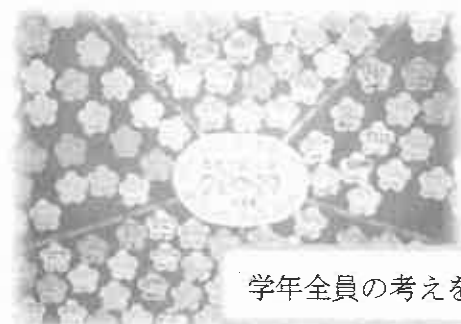
おしゃべり0掃除

小中連携の取組



いじめ防止スローガン

いじめ防止キャンペーン



学年全員の考えを掲示

道徳コーナーの設置

④ 家庭地域連携部 ～家庭・地域への情報発信と家庭への啓発～

家庭への啓発活動と地域との連携を目的として、学校での道徳の取組や地域行事の報告、家庭向け道徳通信「はあと通信」の発行と家庭読書の取組を行った。



「はあと通信」(A4版両面印刷)



「はあと文庫」

各学級で本を回覧し、家庭で読み聞かせを行った。

(1～3年 親が子に読み聞かせ
4～6年 子が親に読み聞かせ)



← 毎月第1日曜日を親子読書の日とし、取組に対する保護者からの感想を集めた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 年間指導計画を見直し、月ごとのテーマを決めて全校で取り組むことができた。
- 指導方法についての理解が広く深くなり、工夫できるようになった。話合いの仕方が定着してきたことや、表現活動が深められたことで、児童の考えを多面的、多角的に引き出すことができてきた。
- 教師が話合いの仕方を示範したことで、児童が話し合いの進め方を理解することができた。話合いの中で、友達の考えを聞き合うことや、質問することで自分の考えをもてるようになってきた。
- 「私たちの道徳」の持ち帰り、親子読書などを家庭で取り組むことができた。豊かな心を育む手立てとして捉えることができ、よりよく生きる心が育ってきた。

(2) 課題

- 道徳の教科化に向けて、さらに指導方法や評価についての研究を深め、今後道徳教育を活性化していく必要がある。
- 道徳教育の要として道徳の時間を一層充実させるとともに、挨拶、おしゃべりゼロ掃除など、実生活を意識し、結び付けながら道徳性を高める取組を行っていく必要がある。

研究主題

「豊かな体験を通して、探究する力を育む授業づくり」 ～理科・生活科の授業を通して～

川越市立大東西小学校

【研究のポイント】

- 全職員が1年間に1回以上の理科・生活科の公開授業を行うことで、職員の授業力向上を図る。
- 職員向けの研修機会を充実させることで、職員の教材に対する理解を高めた。
- 問題解決型の授業展開や学習過程に沿った板書の仕方を統一したり、考察の文、例を提示したりすることで、理科・生活科の授業の質の向上を図る。
- 日常的に理科・生活科に関連する事象に触れる機会を増やすことで、児童の興味・関心を引き出す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

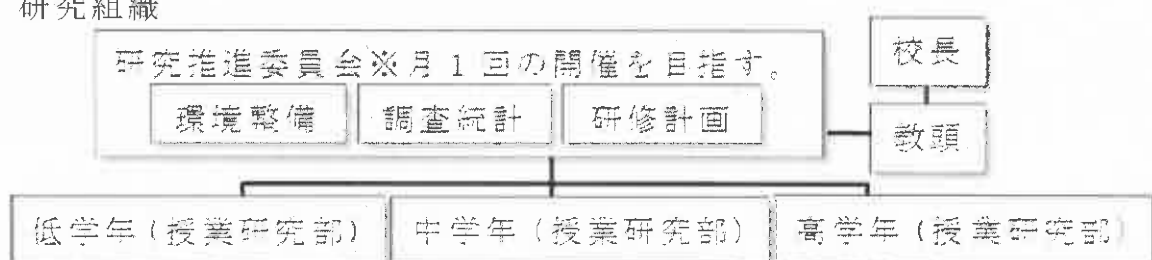
本研究では教材研究や授業展開についての研修と全職員の一人一公開授業の実施を通して、教員の資質向上を目指す。また授業展開や考察の文例等について公開授業を通して検証することで、より質の高い授業の在り方を探っていく。加えて、児童の理科・生活科に資質・能力を育成するために日常的に理科・生活科に関わる機会を設け、豊かな体験を通して探究する力の向上を図っていく。

(2) 研究主題設定の理由

小学校における理科の全国的な課題として児童の理科離れ、科学的な思考力の低下があげられる。本校児童も実験や観察などの体験的な活動は好きだが、結果をもとに論理的に考えることを苦手としているという実態が見られた。また、考えたことを共有し、話し合ったりまとめたりすることも苦手である。さらに平成27年度に行った標準学力検査（NRT）の結果、本校の平均正答率が全国や市内の小学校よりも低いことも明らかとなった。

そこで本校では目指す児童像を「生活科・理科を好きな子」「観察・実験の結果から論理的に考察できる子」「疑問（ギモン）や不思議（フシギ）を探究できる子」と定め、研究主題を「豊かな体験を通して探究する力を育む授業づくり～理科・生活科の授業を通して～」と設定した。

(3) 研究組織



- ①研修計画部…職員のスキルアップを目的とし、研修の企画・運営を行う。
- ②調査統計部…学校研究の進捗状況や達成状況の把握を目的とし、実態調査・アンケート等の情報処理を行う。

- ③環境整備部…児童に理科・生活科の日常化を図ることや教員の授業補助を目的とし、教材教具の整備を行う。
- ④授業研究部…理科・生活科の授業改善を目的とし、教材研究の中心となる。

2 研究の内容

(1) 授業研究部

①一人一授業の実施

全職員が一年間で一回、理科・生活科の授業研究会を行う。授業後に研究協議を実施し、次の授業に生かしていく。

① 考察の定型文・考察例の検討

児童が考察する際の参考となるよう、定型文を検討し共有する。学年の発達段階を追って記述の範囲を広げ、自ら考察できる児童を育てていく。

② 気づきの共有化

活動中の行動・発話や「見つけたよカード」の記述から、児童の気づきに教師が気づき、児童間で共有化を図ることで、気づきの質を高めていく。

③ 板書とノート指導の統一

学習過程に沿って板書が書かれ、ノートもまとめられるよう、基本の形を統一する。

(2) 環境整備部

①給食時の理科・生活科に関わる放送

放送委員会等が理科・生活科に関わるニュース等を紹介する放送を行う。

②理科実験コーナー

渡り廊下に生物標本や天体模型、力学の実験装置等を展示し、自由に体験できるようにする。

③理科質問コーナー

理科や生活科に関わる日常の疑問を投稿できるコーナーを設置した。児童から出された疑問に対して職員が回答し、順次掲示している。

④子ども理科実験教室

理科の発展的内容等について、休み時間に自由参加型の実験教室を開催する。

⑤ ゲストティーチャーの招聘

理科・生活科の興味関心を引くために、ゲストティーチャーを複数招聘する。(埼玉県立川の博物館、JAXA、埼玉大学など)

(3) 研修計画部

①教員向け理科実験教室の実施

月に1・2回程度、放課後に教材研究を中心とする実験教室を開催する。自由参加を基本とし、学習内容の系統性を踏まえた教材研究の機会とする。

②「理科授業づくり研修会」「全国学力・学習状況調査研修会」の実施

理科の問題解決学習での授業づくりや、平成27年全国学力・学習状況調査に見られる理科の「活用する力」について研修を行う。

③生活科の授業づくり研修会

川越市立新宿小学校・宮崎厚校長先生に御指導いただき、「気づきの質を高める学習指導の進め方」について研修を行う。

(4) 調査統計部

①年間2回のアンケート調査の実施

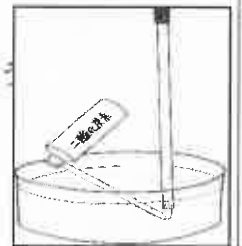
職員と児童に対して理科・生活科の授業に対する意識調査を行う。結果を分析し、実態を把握すると共に、教員の課題意識を高める。

3 実践事例

(1) 6年生「水溶液の性質」(授業者 後藤敦)

①授業の展開

学習活動	主な教師の発問 (T) 児童の反応 (・)
<p>問題 ペットボトルの中で何が起こったのだろうか？</p>	
<p>5 演示実験をする。</p>	<p>T BTB 溶液の入った管の下から二酸化炭素を入れます。溶けたとしたら泡がどうなるか観察しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色が変わっていく！黄色に変わった！
<p>6 演示実験の結果を書き、結果から考えられることをグループで話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・泡が上に行くにつれて小さくなっている！ <p>T 実験の結果をカードに書き入れましょう。色の変化と、泡の大きさについて話し合しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色が変わったということは、酸性に変化した。 ・二酸化炭素が水にとけたから、泡が小さくなった。



②越生町立生越小学校校長 竹田聡先生による指導

理科に問わず、三十年後に生きる力を持つ子どもを育てることが求められている。これからは見方、考え方を育てていきたい。授業の教材研究や実験準備にかけた努力の時間はすばらしい。

(2) 3年生「電気で明かりをつけよう」(授業者 荒井和代)

①授業の展開

学習活動	主な教師の発問 (T) 児童の反応 (・)
<p>1 本時の問題をつかむ。</p>	<p>T スプーンを回路の途中に挟むとなぜ、豆電球がついたりつかなかったりするのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スプーンの種類が違うから。 ・回路がつながっているのといないのがあるから。 ・プラスチックのスプーンは電気を通さないから。
<p>問題 身の回りのもので、どのようなものが電気を通し、明かりをつけることができるだろうか。</p>	




②埼玉大学教育学部附属小学校教諭 杉山直樹先生による指導

多くの意図を感じ取れる授業だった。ものと材質を分けてあげることがとても大切。子どもたちなりの理論から科学的な理論に変えてあげることが理科の本質である。今後、言語活動も大切して行ってほしい。

(3) 2年生「うごくうごくわたしのおもちゃ」(授業者 西宮玲子)

①授業の展開

学習活動	主な教師の支援 (◆)
「トイリンピック」に出すおもちゃをレベルアップさせよう！	
<p>4 グループの中で自分のおもちゃを見せ合い、改良で工夫したことや、気づいたことを伝え合う。</p>	<p>◆自分の改良の工夫や、遊んで気づいたことを紹介しあうことで、自分のおもちゃの課題を解決する糸口を見つけたり、風や空気、ゴムなどを使って遊ぶ楽しさに気づいたりすることができるようにする。</p> 

②川越市立新宿小学校校長 宮崎厚先生による指導

子どもたちが生き生きと活動していてとてもよい授業だった。図画工作など、他教科との関連や合科的関連的指導を展開しているのもよかった。評価規準も学校に合わせて詳しく書くことができている。スタートカリキュラムを学校全体で取り組んでいくとよい。

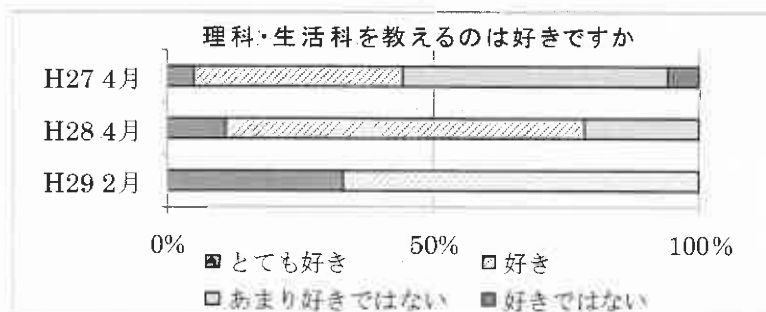
4 研究の成果と課題

(1) 児童の成果

- ①興味・関心は高くなり、少しずつ知識・理解につながってきている。
- ②学習過程をパターン化することで、見通しをもって授業に参加できている。

(2) 教員の成果

- ①理科への興味が高まり、教材研究を深められるようになった。
- ②気づきに気づける教師になり、児童の気づきを授業に生かせるようになった。



(3) 児童の課題

- ①引き続き、様々な分野で興味・関心を高めていく必要がある。
- ②問題を解決するための思考に戸惑うことがある。「どうしたらよいか。なぜそうなるのか。」について事実から論理的に思考する機会を継続して設定する必要がある。

(4) 教員の課題

- ①気づきを共有化し、気づきの質を高めていく手立てについて研修が必要。
- ②児童の考察力を上げる指導方法の構築と習得が必要。

研究主題

「学び合い 高め合う 授業の創造」 ～アクティブ・ラーニングを取り入れた算数学習～

川越市立霞ヶ関小学校

研究のポイント

- 主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から授業を創造することにより、学びに向かう力・人間性の涵養、生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成を図る。
- 学習集団や学習方法、家庭学習・学習環境を整備することにより、学習意欲を喚起し、学習内容の定着を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

算数の授業を通して、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点から授業改善を目指し、「学び合い・高め合う」授業を創造していく。

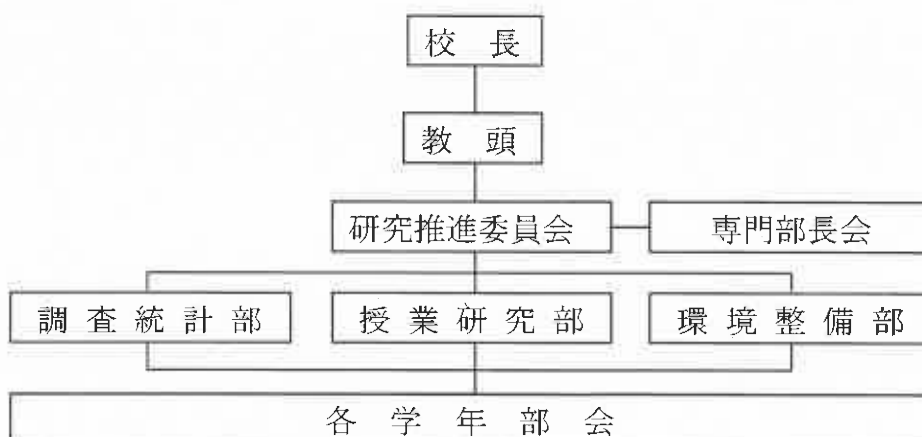
(2) 研究主題設定理由

本校は25・26年度に、研究主題「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら学ぶ子の育成」、副題に「学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して」として、委嘱学校研究に取り組み、研究の過程において、学習したことや自分の考えを表現する（アウトプット）の重要性が浮かび上がった。

また、世の中の動きに目を向ければ、次期学習指導要領の改訂に伴う中央審議会等が開かれ、新しい我が国の教育の方向性が示された。その中で、教育課程の構造化が進められ、授業改善の視点（アクティブ・ラーニングの視点）からの学習過程の改善が重要視された。

そこで、本校では平成27年度から、算数科を通して「主体的・対話的な深い学びの視点」から授業を創造することを柱として研究を進めた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体構想

学校教育目標

かしこい子 すこやかな子 みりよくある子

目指す児童像

課題に対し、主体的に取り組むとともに
自らの考えを表現し、発表・説明でき、
他者の意見を取り入れながら、
自分の考えを見直し、深めることができる児童

Kasumi Style

アクティブ・ラーニングの視点

対話的な学び 深い学び 主体的な学び

- ペアやグループによる話し合い活動
- アウトプットの機会を多くする事による定着

- 実態に即した課題設定
- 視点の明確化
- ふりかえり
- 学習過程の工夫

学習環境の整備

- ★ 児童の算数科における実態把握
- ★ 「家庭学習のすすめ」の配布
- ★ 算数コーナーなどの教室整備
- ★ 計算タイム・算数検定の取組

仮説 アクティブ・ラーニングの視点から授業を創造し、学習環境を整備すれば、子供たちが主体的に取り組む、学習内容を深く理解することができるであろう。

<研究の視点>

- ◆ 問題解決的な学習過程 ◆ 適切な課題設定 ◆ 視点を明確にした対話的活動
- ◆ 豊富なアウトプットの場の設定 ◆ ふりかえりによる学びの手ごたえ
- ◆ 関心や意欲を高め、学習の見通しをもたせる学習環境の整備
- ◆ 基礎基本を養うための家庭学習やスキルタイムの導入
- ◆ 学力調査等をふまえた児童理解

研究主題

学びあい 高めあう 授業の創造
～アクティブ・ラーニングを取り入れた算数学習～

(2) Kasumi Style (本校の算数科における学習過程)

① 課題をつかむ

具体物を提示したり、児童の身近な問題を扱ったりして、児童が自ら課題を見つけられるようにする。

② 見通す

いつでも既習内容を確認できるように算数コーナーを充実させ、児童が課題を解決するための見通しをもてるようにする。

③ 自力解決

児童が既習事項を活用して自力解決できるようにする。見通しをもてない場合には、助言やヒントカード等を示し、解決できるようにする。

④ 集団解決

ホワイトボードを活用し、児童相互の考えの共有や深まりをうながす。また、話し合いの視点を明確にし、児童が目的をもって活動できるようにする。

⑤ まとめ

児童自身の言葉で学習した内容をまとめるよううながす。

⑥ 適用問題

ねらいに沿った適用問題を提示し、児童が自らの力で解決することにより「できた」という感動を得ることができるようにする。

⑦ ふりかえり

児童が実感した学びの手ごたえをとらえ、次時の意欲付けを図る。

さらに、この学習過程は、児童の発達段階や習熟の程度、課題の内容に合わせてフレキシブルに変化させて実践する。以下の表がその変化例である。

Kasumi Style	A ・低学年 ・図形の操作 ・補充コース等	B ・低、中学年 ・基礎コース等	C(パターン1) ・中、高学年 ・基礎コース等	C(パターン2) ・中、高学年 ・基礎コース等	D ・高学年 ・発展コース等
展開の指針	適用問題で自力解決の力をつける	自力解決で自信をもつ			学び合いを充実させる
課題をつかむ	全体	全体	全体	全体	全体
見通す	全体	全体	全体	全体	全体
自力解決	グループや全体で協力して問題を解決	個人	個人	個人	個人
集団解決	全体に発表	グループで発表 練り上げ1	グループで発表 練り上げ1	全体に発表 (練り上げ1)	グループで発表 ↓ 練り上げ ↓ まとめ
	全体で練り上げ2	全体に発表	全体に発表	グループで練り上げ2	全体でまとめの確認
		全体で練り上げ2	グループで練り上げ2		
まとめ	全体	全体	全体	全体	適用問題 個人
適用問題	個人 自力解決	個人	個人	個人	
ふりかえり	個人	個人	個人	個人	個人

この枠は、その授業パターンにおける重要ポイント(力の入れどころ)を示す。

3 実践事例（平成28年11月2日（水）） ※一部抜粋

- (1) 第2学年 単元名 かけ算 (2) 九九をつくろう（東京書籍 2年下）
- (2) 単元の目標 ○乗法の意味について理解を深め、それを用いることができるようにする。
- (3) 単元を通じたアクティブ・ラーニングの視点に立った具体的な手立て

AL-主: 主体的な学びの過程に関する手立て AL-対: 対話的な学びの過程に関する手立て AL-深: 深い学びの過程に関する手立て

AL-主 問題解決的な学習を進め、自力解決の時間を多くとる。

- ・考えが思いつかない児童のために、ヒントコーナーに複数の作戦のヒントを用意し、児童が選んで取り組めるようにする。
- ・T1、T2二人の目で指導を展開することで、児童の考えを広く認め学習意欲を高める。

AL-対 どの時間にもグループでの発表や話し合いの時間を設定する。

- ・話し合いの視点を明確にするために、板書を工夫する。
- ・話型を使い、話し合いの仕方を統一することにより、全員が順番に発表し、効率的に話し合いが進められるようにする。

AL-深 学習したことを振り返り、考えられる場を設定する。

- ・1時間の学習を一人一人が確認するために、まとめにつながる話し合いを全体で丁寧に行い、自分の言葉でまとめを書けるようにする。
- ・毎時間学習の理解を確認するために、適用問題を解き、学習感想を記入する。

(4) 指導の実際（15 / 17）

本時の目標 ものの数の求め方を乗法を用いて解決できるように工夫して考え、図などを使って説明することができる。【数学的な考え方】



【児童の考え】



AL-対・深

- 全体で話し合う
- ◇目指す子供の姿
- ・友達の考えを最後まで聞き、よいところを見つけて発表する。
- ・似ているところを見つけ、発表する。
- 支援
- ・それぞれの考えのよさを確認する。
- ・まとめにつながるポイントには赤で線を引く。

第2学年では、乗法九九の活用を通して、自分の考えをはっきり伝える、相手の考えをしっかりと聞くという「対話的な学び」における基本の姿が見られた。その上で、図と式の関連付けが図られ、式の意味を深く考えることにつながっていた。

4 成果と課題

<成果>

- (1) アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた問題解決的な授業の学習過程を全教師で共通理解し、実践できるようになった。
- (2) 問題提示や課題設定を工夫することによって、児童が学習に主体的に取り組むようになった。
- (3) 少人数での発表や教え合いができたことによって自信がつき、一人一人が意欲的になった。
- (4) 学校研究の取組により、児童の学力の向上が見られた。
（【例】人間学力テスト、平成27年度は人間平均に対してマイナス4.6ポイント→平成28年度はプラス0.5ポイントに向上）

<課題>

- (1) 児童の学力向上のために、さらに継続した取組が必要である。
- (2) Kasumi Style（本校の学習過程）をさらに洗練させ、また、児童にも浸透を図ることによって、見通しをもった学習が進められるような改善が必要である。

「友達とかかわり、技能を高め合う児童の育成」

～わかる・かかわる・できる体育授業をめざして～

川越市立霞ヶ関東小学校

研究のポイント

- 課題となる技の分析を深め、場や教具を工夫することで、技のポイントを意識して試技する「わかる」児童の育成を目指す。
- 仲間とのかかわり合いの姿を明確にし、かかわり合いの視点を指導したり教具や場を工夫したりすることで、絆を深め「かかわる」児童の育成を目指す。
- 効果的な場や教具で技のポイントがわかり、ポイントを視点に仲間と温かくかかわることで、技能を高め「できる」児童の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

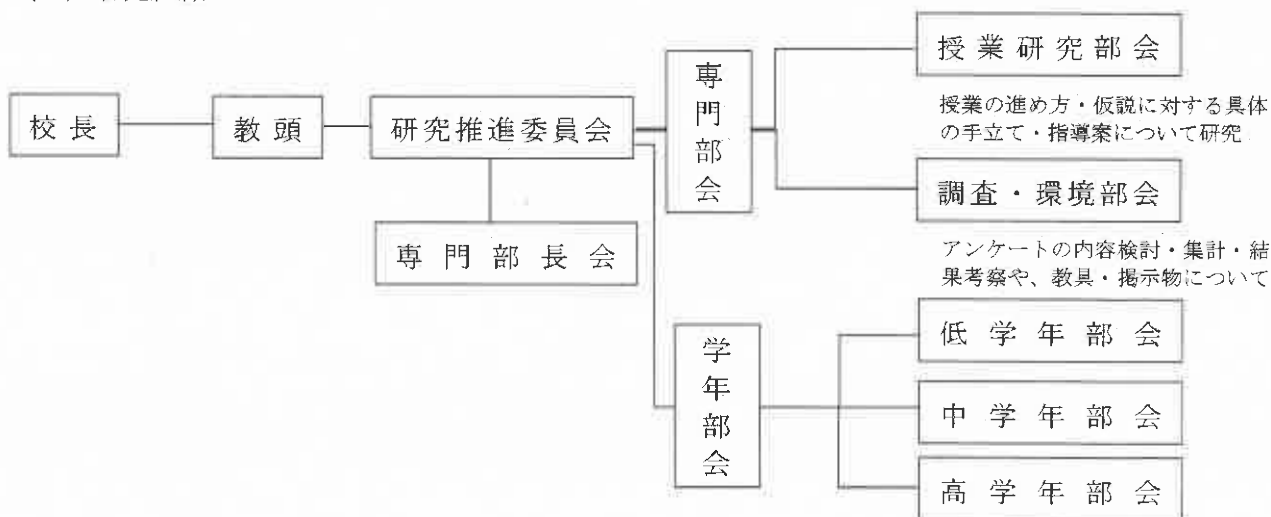
体育科の授業において「技のポイントを理解させる指導の工夫」「友達とかかわり合う指導の工夫」を通して、児童の技能を高め、運動が好きな児童の育成を図る。

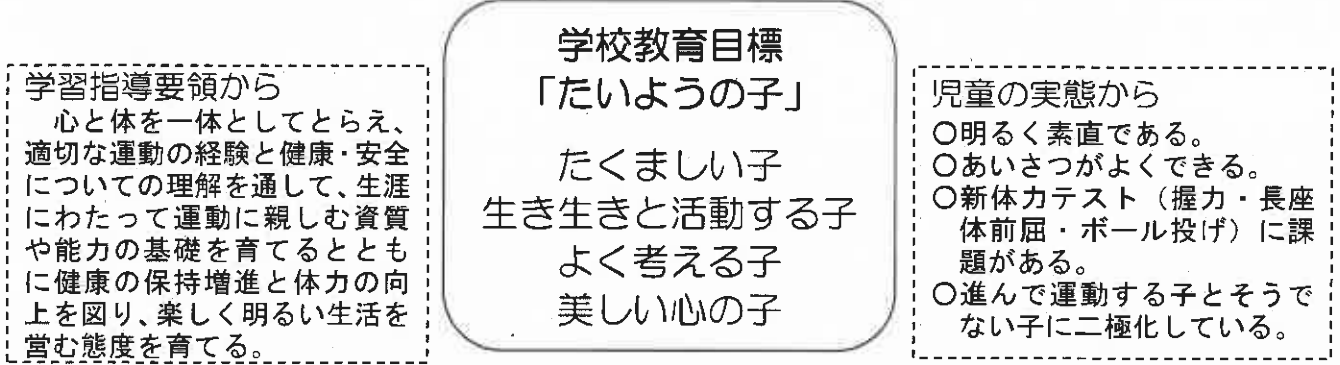
(2) 研究主題設定理由

現在、グローバル化が進む中で、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」の育成はますます重要になっている。本校の児童は明るく素直だが、進んで運動する子とそうでない子に二極化している。また、新体力テストにおいても、握力・長座体前屈・ボール投げに課題が見られる。

心身のバランスのよい児童を育てるため、「友達とのかかわり」を大切にした体育の授業を展開し、「友達と励まし合って、楽しみながら運動する子」「友達と協力し合って、進んで挑戦する子」「友達と教え合い、めあてに向かって努力する子」を目指して、研究を推進した。

(3) 研究組織





《研究主題》

友達とかかわり、技能を高め合う児童の育成

～わかる・かかわる・できる体育授業をめざして～

目指す児童像【友達とかかわり、技能を高め合う児童】

- 友達と励まし合い、楽しみながら運動する子（低学年）
- 友達と協力し合い、進んで挑戦する子（中学年）
- 友達と教え合い、めあてに向かって努力する子（高学年）

仮説（１）

○児童に運動の特性や魅力を味わわせ、技のポイントを理解させることができれば、児童の技能が向上するであろう。

《手立て》

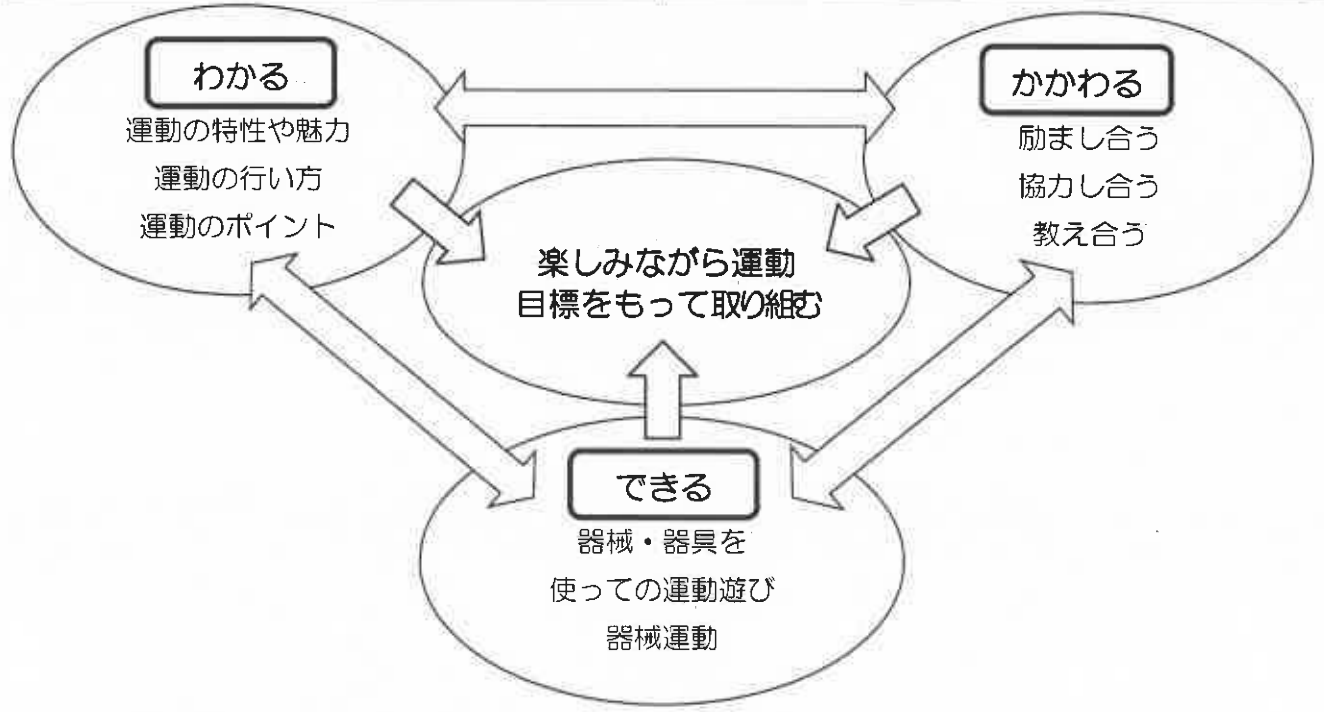
① 技能分析	○技の系統表の作成
	○指導内容と指導ポイントの明確化
	○技のポイントの掲示
	○ステップカードの活用
② 場の工夫	○個に応じた場づくり
	○恐怖心を取り除くための場づくり

仮説（２）

○児童相互のかかわり合いを大切にしていけば、意欲をもって運動に取り組み、互いに技能を高め合うことができるであろう。

《手立て》

① 見る視点の明確化	○掲示物の活用
② 学習形態の工夫	○ペア学習やグループ学習
③ 言葉のかけ合い	○発達段階に応じたかかわり方の指導



3 実践事例

(1) 仮説1「児童に運動の特性や魅力を味わわせ、技のポイントを理解させることができれば、児童の技能が向上するであろう。」に対する実践

① **技の系統表の作成** 技の系統を明らかにし、指導内容を教職員で共通理解した。

マット運動 技の系統表

(※)

跳び箱運動 技の系統表 (※は発展技)

	1年	2年	3年		1・2年生	3・4年生	5・6年生
前転技	腹物に定着 ゆのゆこ 前転がり びさあがりこぼし	大きなゆりこ	前転 大きな前転 膝蹴り技	切り	踏み越し跳び またぎ跳び またぎのり・またぎわり	開脚跳び 大きな開脚跳び(※)	安定した開脚跳び 大きな開脚跳び

② **ステップカードの作成** 技の習得過程をスモールステップにし、「できた」実感を多くもたせることで、児童の意欲を高めた。技のポイントを理解させ、自分の課題を明確にすることでより効果的な運動につなげた。

③ **技のポイントの研究・揭示** 技のポイントを明確にすることで、課題意識をもって練習ができるようにした。

④ **教具の工夫・作成** 技のポイントを身に付けるための教具を作成し児童に使用させることで、課題意識をもって練習ができるようにした。

(2) 仮説2「児童相互のかかわり合いを大切にしていけば、意欲をもって運動に取り組み、互いに技能を高め合うことができるであろう。」に対する実践

① **かかわり方の指導** 発達段階に合ったかかわり方の指導をすることで、児童同士のかかわり合いを促進させた。

発達段階	目指すかかわり合い像	具体の姿
低学年	「友達の動きを見て、ほめることができる」	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が言葉がけの仕方を示し、それを真似て具体的な言葉がけができる。(話型なども示して) ・友達のがんばりをほめることができる。 ・友達と行動することができる。 ・友達の動きを意識することができる。
中学年	「教師が示した技のポイントを視点に、友達の動きを見て技のできばえを伝えることができる」	<ul style="list-style-type: none"> ・技のポイントを伝えることができる。 ・できた、できないを言うことができる。 ・声や動きを合わせることができる。→慣れの運動で声を合わせる。動きを合わせる。 ・始まり、終わりの合図→手を挙げ「はい」
高学年	「技のポイントを視点に友達の動きを見て、アドバイスをすることができる」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題を伝えることができる。 ・課題を意識して友達の演技を見ることが出来る。 ・課題に対する助言を伝えることができる。 ・ステップカードなどの資料を活用し、友達と解決策を考えることができる。

② **技のポイントの研究・揭示** 技のポイントを明確にすることで、見合い・教え合いの視点を明確にした。

③ **かかわり合いのツールの工夫** 低学年は道具の使用が難しいため口頭で褒め合った。中学年はモニター(透明シートに技のできばえ3段階が図に記されているもの)を通して技の可否を伝えた。高学年はタブレットで試技を動画撮影し、その動画を基に助言等を行った。

モニターを通して倒立の垂直具合を視覚的に判定し、できばえを伝えようとする児童の姿



(3) 授業の実際

①低学年「霞ヶ関東城の宝をゲットしよう！（マットを使った運動遊び）」

〈授業の概要〉

- ・ストーリー性（忍者修行）をもたせ、基礎感覚を盛り込んだ運動遊びを取り入れた。
- ・友達のがんばりに対して肯定的な言葉をかけさせ、互いに意欲を向上させた。



忍者マップ



ほめ言葉モデル



教具・敵忍者跳び越して素早く回転

②中学年「めざせ！マット名人（マット運動）」

〈授業の概要〉

- ・基本技を全員に身に付けさせるための場の設定を工夫し、個に応じた場で挑戦させた。
- ・技のポイントを視点に、モニターを用いてできたかどうかを互いに見合わせた。



飛び箱で跳び越しの感覚



棒を弾んで腰角を上げる



モニターで試技のできばえを伝え合う

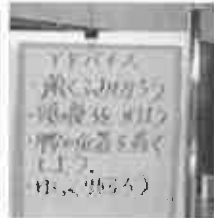
④ 高学年「6-2オリンピック（跳び箱運動）」

〈授業の概要〉

- ・今できる技の質を高めるための場の設定を工夫し、個に応じた場で取り組ませた。
- ・十分満足できる児童には、発展技に触れる機会を設定した。
- ・技のポイントを視点に、タブレットの動画を用いて具体的なアドバイスを互いに行わせた。



腰を高くあげる練習の場



助言のモデル掲示



タブレットで動画を撮り試技の助言を伝え合う

(4) その他の実践

- | | | | | | | |
|-------|------------|----------|-----|-------------------|------|---------|
| 6月2日 | 示範授業及び研究授業 | 2年三冨謙介教諭 | 指導者 | 川越市立泉小学校 | 校長 | 大久根 正先生 |
| 9月28日 | 研究授業 | 4年吉永若葉教諭 | 指導者 | 川越市文化スポーツ部スポーツ振興課 | 指導主事 | 両角 知繁先生 |
| 10月7日 | 研究授業 | 5年後藤諒教諭 | 指導者 | 川越市教育委員会学校教育センター | 主幹 | 鴨下 正彦先生 |
| 1月27日 | 研究授業 | 1年富井直輝教諭 | 指導者 | 川越市教育委員会学校教育指導課 | 指導主事 | 白根 彰人先生 |
| 2月21日 | 研究授業及び講演 | 2年三冨謙介教諭 | 指導者 | 埼玉大学教育学部附属小学校 | | 河野 裕一先生 |

4 成果と課題（○成果 ・課題）

- 掲示物や自作教具を活用し、視点を明確にした効果的なかかわり合いをもたせることで、児童の技能向上につながった。
- 「器械運動技の系統表」を作成・活用することで、指導内容を明確にし、より効果的な指導方法が明らかになり、教師の指導力向上につながった。
- 発達段階に合った学習過程を計画し、課題に応じた場を工夫したことで、児童の技能向上や課題意識を強く持った児童同士のかかわり合い・励まし合いにつながった。
- 体育の授業や休み時間の外遊び、運動名人など、生活全体を通して意図的・効果的な運動の機会を組み入れたことで、運動好きの児童を育成することができた。
 - ・安全面や運動量の確保を考慮した上で、より効果的な学習過程や場の設定についてさらに研究していく。
 - ・児童のかかわり合いを促すための指導方法と評価方法を研究していく。
 - ・指導をさらに充実させるために、実技研修会などを取り入れ、指導力の向上を目指す。

研究主題

「子どもたち一人一人が『わかる・できる』を実感できる授業づくりの工夫」 ～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた算数科指導～

川越市立名細小学校

研究のポイント

- ユニバーサルデザインの視点を取り入れて「すべての児童にとってわかりやすい授業の実施」と「学習環境の整備」を図り、学力と学習意欲の向上を目指す。
- 自ら課題を解決する児童の育成に向けて、ユニバーサルデザインの視点から、指示のしかたや資料の提示のしかたなどを工夫し、授業改善を図る。

1 研究の概要

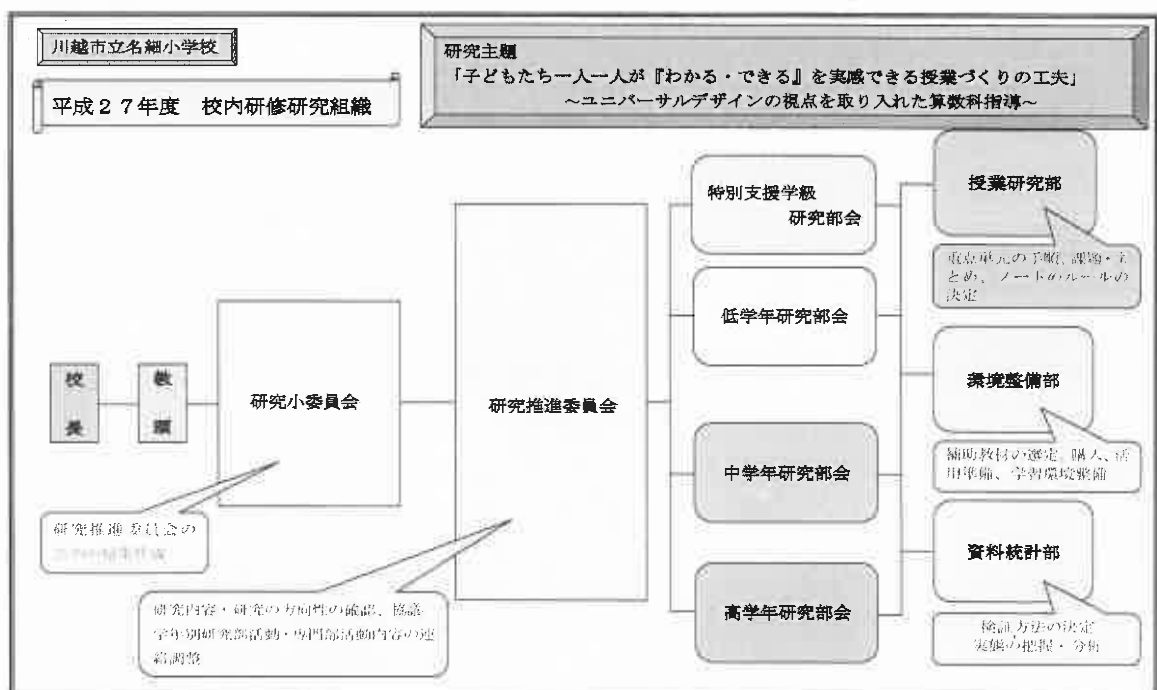
(1) 研究のねらい

配慮を要する児童だけでなく、すべての児童にとっての「わかる・できる」を実感できる授業を目指し、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて理解を深め、授業の工夫改善をする。

(2) 研究主題設定理由

文部科学省の調査（平成24年度）によると、知的発達の遅れはないものの通常の学級における特別な教育的支援を要する児童生徒の割合が約6.5%にのぼるとされている。本校においては、各学級に支援を要する児童が、文部科学省の調査の割合よりも多く在籍する実態がある。学力の二極化も見られる本校の現状では、すべての児童が「わかる・できる」経験を実感できる授業づくりを行い、学習意欲を高めていくとともに基礎的・基本的な内容の定着が必要である。そこで、本研究では、特に算数科において、このような授業づくりの在り方を探り、児童の学力と学習意欲の向上を図っていきたいと考えた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) めざす児童像について

基礎的・基本的な内容を身に付け、自ら課題を解決する児童

(2) 仮説について

【仮説1】

明確で具体的に決めたルールや手順を徹底すれば、基礎的・基本的な内容が身に付くだろう。

【仮説2】

多様なニーズに応じた支援や配慮を行えば、自ら課題を解決する力が付くだろう。

(3) 具体的な手立て

【仮説1に対する手立て1】

授業の見通し、組み立て (『UDの授業づくり12のポイント』⑤⑥)

- ① 課題とまとめを明確にし、「何を学習するのか」、「何を学習したのか」を児童が理解できるようにする。
- ② いつまでに何をすればよいのかが分かるように、授業の始めに1時間の流れを明確に提示する。
- ③ 板書の仕方を構造化し、問題・課題の書き方や、黒板の分け方、色チョークの使い方を統一することで、児童が1時間の授業の流れを理解しやすいようにする。
- ④ 毎回、一定の流れで進む授業のスタイルを意識し、パターン化することにより、どの児童も見通しを持ち、安心して活動できるようにさせる。
(例：スキルアップタイム→問題把握→課題設定→自力解決→話し合い→
練り上げ→まとめ→振り返り)
- ⑤ 作業をする場面と教師の話聞く場面を分ける。
- ⑥ 授業の最後に「何がわかったか」「なにができるようになったか」など、児童が自分の学習を振り返ることができるようにする。

【仮説1に対する手立て2】

ルールの確立「手順や工程」 (『UDの授業づくり12のポイント』③)

- ① 計算の手順(アルゴリズム)や考え方を単純かつ明確に示すことで、安心して作業できるように配慮する。
- ② 学級内のルールを明確に示し、教師の共通理解の下、その内容に合わせた指導をする。
- ③ ルールや約束を守っている児童を称賛することで、望ましい行動を強化していく。

【仮説②に対する手立て3】

参加の促進、個人差への配慮 (『UDの授業づくり12のポイント』⑩⑪)

- ① こまめに肯定的な評価を与え、児童が安心して取り組めるようにする。
- ② ペア学習を取り入れることで、自分の考えへの理解を深め、全体の前で発表する勇気のない児童を含めた学級全員に発表の機会を持たせる。
- ③ 集中力が持続しない児童のために、リズムとテンポのよい授業進行を心がける。

- ④ 直接的に注意をして行動を矯正するのではなく、他の児童を称賛することにより「行動モデル」を示し、望ましい行動を促す。さらに、その行動ができた場合、見逃すことなく称賛することで、自己肯定感をあげつつ望ましい行動の強化を図る。
- ⑤ 集中力が続かない児童や学習意欲の低い児童の学習意欲喚起のために、意図的に活躍の場や称賛の場を設け、興味ややる気を高める。
- ⑥ 作業終了の時間差を埋め、早く終わった児童に空白の時間を与えないように、作業終了後の行動指示を的確に出す。
- ⑦ 短期記憶が苦手な児童や視覚優位の児童のために、板書、掲示、メモなどの視覚情報を利用し学習の助けとする。
- ⑧ 集中力が持続しない児童のために、意図的に身体を動かす活動内容（起立、音読、ノートを教師に提出する等）を取り入れ、心身を安定させる。
- ⑨ 短く端的な説明をし、その後、個別の説明が必要な児童への計画的な机間指導を行い、指示の理解を支援する。

3 実践事例

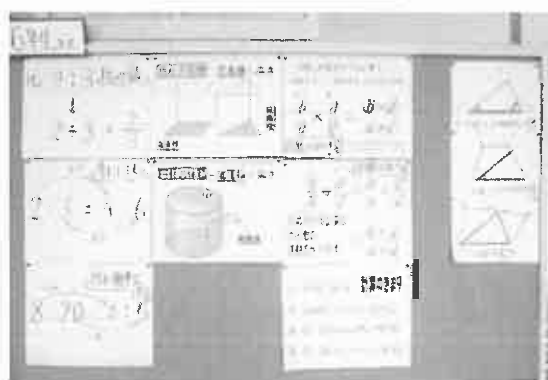
(1) 授業研究部

- ・ 指導案の形式の決定
- ・ 学習過程のパターン化
- ・ 各学年の重点単元の「問題」「課題」「まとめ」の文言の決定
- ・ ノートの書き方の統一指導
- ・ 練り上げシートの作成
- ・ 算数コーナーの設定と充実

スキルアップタイム



算数コーナー

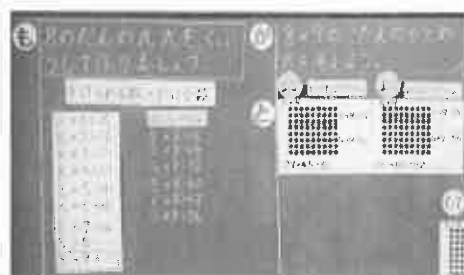


学習過程

スキルアップタイム・・・計算問題に取り組む

問題把握	問題文を理解する。
課題設定	問われている問題の意図を考えさせ、前時までの違いを見つけて課題をつかむ。
自力解決	問題の解き方や自分の考えをノートに書く。 → 話し合い(ペア・グループで) → 練り上げ
まとめ	課題に対してこれからも使えるようにまとめる。
振り返り	その日に学んだことや気づき等の学習感想を書く。

課題を明確にした板書

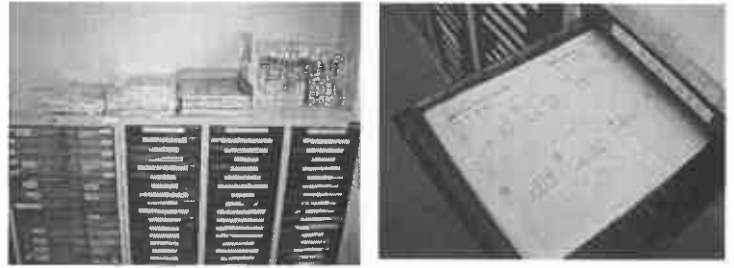


- ・ 「数直線の図」の書き方の統一指導
- ・ 練り上がり、練り下がりの表記の統一指導
- ・ 板書（色の使い方）の統一
- ・ 長さ・重さ・面積・体積等の単位の書き方の統一指導
- ・ 発表時の話型の提示
- ・ 「考え方」「解き方」を書く用紙の活用

(2) 環境整備部

- ・学習過程の明確化
- ・補助教材の選定・活用・購入
- ・プリントの作成
- ・プリント保管用ケースの設置
- ・使用資料の保管・管理
- ・教材室の整備
- ・黒板周りをすっきりさせる工夫
- ・掲示物の作成

プリント保管用ケース



(3) 資料統計部

- ・検証方法の決定
- ・児童への意識調査
- ・意識調査の統計・分析
- ・学力調査結果の課題領域調査
- ・検証結果の統計・分析

教室環境の整備



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・学習過程のパターン化を行うことで、児童は見通しをもって学習に取り組めるようになり、学習内容や学習方法の理解とそれにとまなう意欲の向上が見られた。
- ・習熟度別学習のコースや児童の実態に応じて、スモールステップでの授業展開やヒントカードの提示、全体指導後の小集団指導等の支援や配慮を行ったことで、自力で課題を解決できる児童が増えてきた。
- ・スキルアップタイムを継続し、基礎的・基本的な内容の習熟を図るようにしたことで、正しく問題が解ける児童が増えた。
- ・算数コーナーの充実やノート指導の徹底により、児童が自ら既習の内容を振り返って学習するようになった。
- ・ペア学習により、友達に分かりやすく説明したり、友達の説明を理解したりできる児童が増えた。

(2) 課題

- ・課題やまとめを児童が考えることができるよう、さらに導入や練り上げの仕方を工夫していく。
- ・ユニバーサルデザインの視点として、ペア学習の仕方等の細かい学習方法を統一し、さらに「ルールの確立」を図る。
- ・身に付けさせたい学習内容を焦点化し、基礎的・基本的な内容の定着を図る指導を今後も徹底する必要がある。

「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究」

～思考力・判断力・表現力等の育成～

言語活動の充実を踏まえた「わ・た・しの授業」の実践

川越市立高階西中学校

研究のポイント

- 言語活動の充実を踏まえた授業の展開
- 学習規律を確立させ、落ち着いて生活や学習ができる環境づくり
- 各種調査結果の分析・検討を通じた、生徒一人一人の実態に応じた指導や支援

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

現代の変化の激しい時代にあって、子どもたちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などを育成する教育が期待されている。「わかる授業」「楽しい(たのしい)授業」「主体的(しゅたいてき)な授業」の『わ・た・しの授業』を合い言葉に、生徒が主役となり、教師主導型の授業から、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指した学習活動と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した学習活動をバランスよく関連付け、問題解決的な生徒主体の授業をし、達成感や充実感を味わえる授業の取組と指導法について研究をする。

(2) 研究主題設定理由

『状況に応じて自信を持って適切に表現する』ことが、本校生徒の課題である。また、今日的な課題として、次期学習指導要領の改訂がある。それらの課題解決のためには「わ・た・しの授業」を充実させることが重要であると考え、全教職員で取り組んできた。その充実こそが「一人一人の生徒が生き生きと学ぶこと」につながると考え、本主題を設定した。

(3) 研究組織

校長・教頭・教務主任・各研究部長で『わ・た・しの授業』研究推進委員会を組織した。

研究部として、授業改善研究部、学習環境研究部、情報収集研究部の三部会を設定した。

授業改善研究部では、知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ることを中心とした、授業改善、共通化への取組を行った。

学習環境研究部では、教室環境の共通化と整備を中心に統一事項・掲示物の提案、教室内の整理・整頓の仕方、話し合い活動の持ち方の提案等を行った。

情報収集研究部では、各種調査や生徒を把握するためのアンケートの分析・検討を行った。

◆校内推進体制



2 研究の内容

(1) 研究仮説

『基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指した学習活動と、思考力・判断力・表

現力等の育成を目指した学習活動をバランスよく関連付けると、生徒の学力が向上する。』と定義づけた。

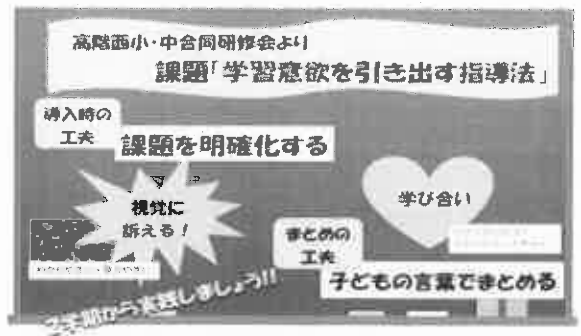
①手立て1

各教科において、言語活動の充実を踏まえた授業を展開すれば、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むことができ、生徒の学力が向上する。

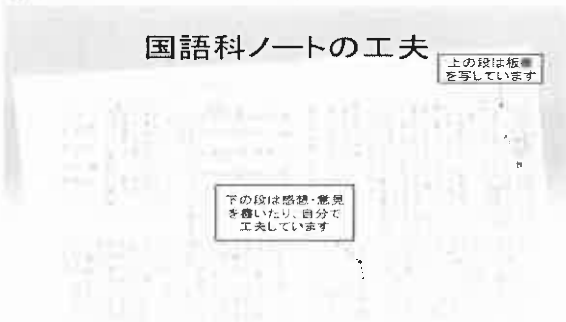
思考力・判断力・表現力等の育成として、

- (ア) 言語活動を充実させる。
- (イ) 基礎・基本を身に付けさせる。
- (ウ) 発問等の工夫をする。
- (エ) 小・中学校の連携を図る。

◆小中連携確認事項



◆国語科ノートの工夫



◆板書の工夫



②手立て2

学習規律を確立し、落ち着いて生活や学習ができる環境を整えれば、生徒がじっくり考え、安心して発表できる授業が展開され、生徒の学力が向上する。

落ち着いて生活や学習ができる環境の考察と整備として、

- (ア) きれいで整った教室環境
 - (イ) ルールや規律の統一と徹底の工夫
 - (ウ) 安心して発言や行動ができるクラス環境
- 学力アップノートの定着と活用として、
- (エ) 「家庭学習ナビ」を活用した指導の徹底
 - (オ) 自己肯定感を持たせる「点検」と「表彰」

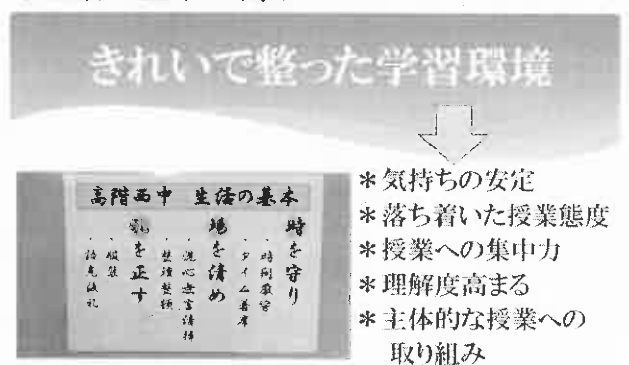
◆学力アップノートと賞状



◆授業規律の掲示



◆生活の基本の掲示



③手立て3

各種調査結果を丁寧に分析し、生徒一人一人の実態に応じた指導や支援を踏まえた授業を展開すれば、生徒の学力が向上する。

各種調査結果を丁寧に分析し生徒の実態を把握するために、

(ア)学力の伸びをみる視点

(イ)「分析支援プログラム」の活用

また、各種調査結果を丁寧に分析し指導法を工夫改善するために、

(ウ)「正答率」にとどまらない分析・検討→解答状況等を踏まえた指導法の工夫改善

◆指導法の工夫改善

各種調査やアンケート結果を丁寧に分析・検討し、指導法を工夫改善する。

「正答率」にとどまらない分析・検討
→解答状況を踏まえた指導法の工夫改善

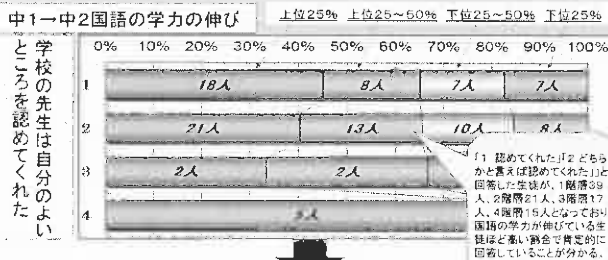
例 授業改善
年間指導計画の見直し
学習指導案の見直し
校内研修会での活用
小・中合同研修会での活用

◆分析例①

目標

各種調査やアンケート結果を丁寧に分析・検討し、生徒の実態を把握する。

埼玉県学力・学習状況調査(分析支援プログラム)から見る生徒の実態
平成28年4月調査実施



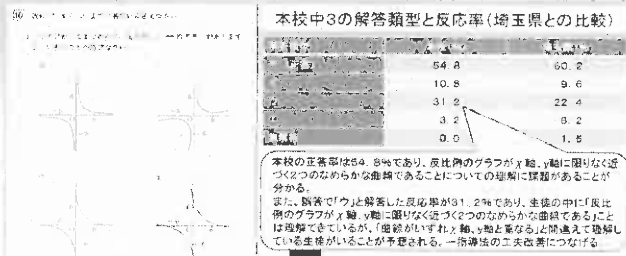
認められ自己肯定感が高まった生徒ほど、学力の伸びが見られる。

◆分析例②

目標

各種調査やアンケート結果を丁寧に分析・検討し、指導法を工夫改善する。

全国学力・学習状況調査(中3)から見る指導法の分析・検討 平成27年4月調査実施
数学A 設問10(1)
出題趣旨「反比例のグラフがx軸、y軸に限りなく近づく2つのなめらかな曲線であることを理解しているか」



指導法を工夫改善すれば、生徒の学力は向上する。

3 実践事例

(1)研究授業の実施

全教員が「わ・た・しの授業」を実践し、年間一回以上指導者を招いて研究授業を実施した。

(2)家庭学習の取組

全校生徒が家庭学習を毎日行い、翌日朝に提出する。毎日忘れずに提出できた生徒、工夫したノートを作成した生徒に賞状を出す。意欲的に家庭学習に取り組ませることで、学力向上を目指した。

(3)教室、校内環境の整備

学習規律・挨拶・発言の仕方など当たり前をやってきたことを明文化し、統一して掲示した。

廊下、階段等の掲示スペースを利用し、生徒の活動写真、生徒に伝えたい言葉等掲示した。

(4)小・中学校の合同研修会

小・中学校の合同研修会を通して、小学校との連携を図る中で、授業の展開や共通の課題への取組が行えた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業を実施しようとする気運の高まり
- ②落ち着いた生活できる環境の整備による生徒の自己肯定感の向上
- ③家庭学習の丁寧な指導と見届けによる生徒の学習意欲の向上
- ④小中連携による課題に対する手立ての実践

(2) 課題

- ①年間指導計画や学習指導案等の不断の見直し
- ②次期学習指導要領の改訂を見据えた「わ・た・しの授業」の実践
- ③学力アップノートの取組の充実（生徒一人一人に応じたきめ細かな指導）
- ④中位層や下位層の生徒を対象とした学力向上策

5 研究発表会を終えて

今回の研究発表会では、全体会の後、分科会を設け、ブース形式で三つの部会をそれぞれ20分間でローテーションすることで、効率よく分科会を進めることができた。又、発表者と参会者の距離が近いいため詳しく丁寧に説明することができた。全体会ではできなかった質問・回答のやりとりや他校の取組等の情報交換ができ、協議の深まりが見られた。発表者、参会者ともにおおむね好評であった。

◆ブース別3部会の発表の様子



◆学習環境研究部



◆授業改善研究部



◆情報収集研究部



研究主題

「豊かな心の育成と自己実現の支援」

～生徒一人一人が主体的に活動し、満足感や充実感を味わえる教育活動を目指して～

川越市立寺尾中学校

研究のポイント

「チーム寺尾の底力」3つのP（誇り、情熱、期待）の向上

- 授業の工夫改善・・・「一人一研究」：特性、実践を活かした研究を行い、発表する。
- アクティブ・ラーニング・・・外部講師を招聘し、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
- 2年間の取組が生徒の主体的活動を促す教育活動に繋がることを目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

これまでに本校で実践してきた教育活動を、研究主題「豊かな心の育成と自己実現の支援」という視点に立ってさらに発展させ、学校教育目標の具現化を図る。

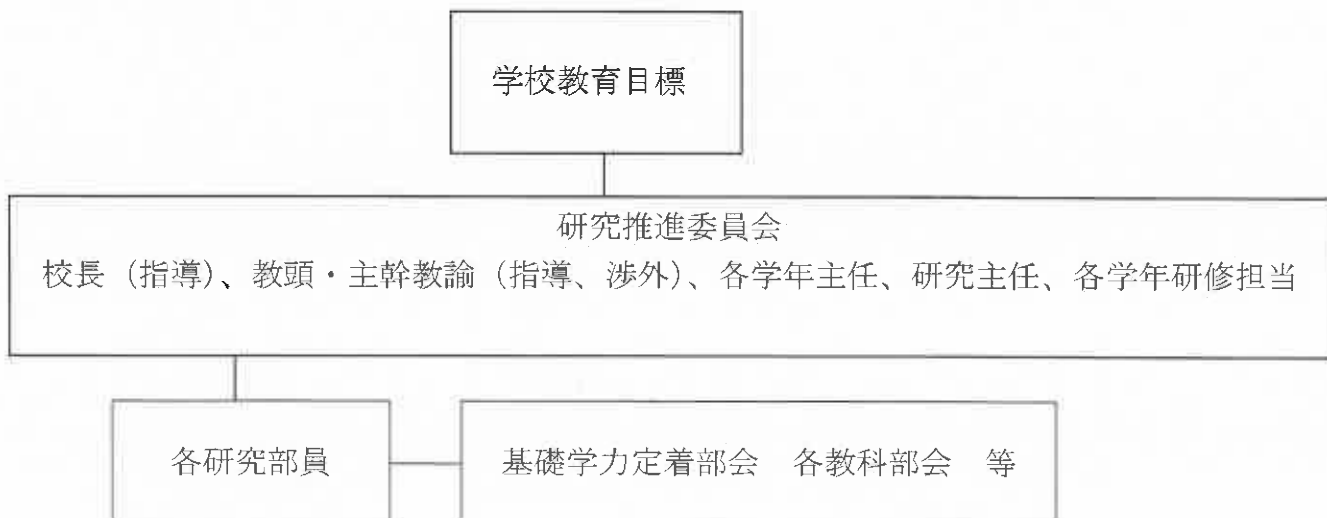
(2) 研究主題設定理由

アクティブ・ラーニングの視点に基づく学びを取り入れることにより、生徒がより主体的に学習に取り組み、学ぶ力を高めることができると考える。また、以下にあげたような手立てを講じることにより、生徒自身が課題を見つけ出し、主体的に取り組み、学習集団の質を高めることができると考える。

具体的な手立て

- ① 生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を行う。
- ② 学級を単位とした集団に、社会性や対人関係能力の育成、自尊感情の醸成に係るトレーニングプログラムを実施し、学習した内容を教室に掲示する。
- ③ ICTを積極的に有効活用する。
- ④ 指導のねらいに合った「本時の目標」の明示、思考力を高める発問の工夫、振り返りによる知識や技能の定着、やる気にさせる評価などの改善を図る。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究テーマの決定

- ① 生徒指導、授業規律、道徳の指導方法および評価、特別支援教育、教育相談
- ② アクティブ・ラーニング
- ③ 自尊感情の育成、生きる力の育成

(2) 研究発表プレ授業 平成28年6月20日(月)

- ① 1学年国語
- ② 2学年社会
- ③ 3学年英語
- ④ 川合 正 先生(学校法人東洋大学 京北幼稚園 園長)による全体指導

(3) アクティブ・ラーニングに関する校内研修 平成28年8月22日(月)

指導者：川合 正 先生

3 実践事例 ～各部会の実践～

(1) 学力向上部会

① 家庭学習ノートの実施

ア 各班の集配係が朝の会で班員のノートを集め、担任に提出する。担任がノートをチェックし、帰りの会までに返却する。

イ 評価Dの生徒および未提出者は、放課後教室で学習する。学級の生徒全員の学習したページ数を集計する。毎学期、各クラスの優秀者を学年集会で表彰する。

② 基礎学力定着テスト(てらりんぴっく)の実施

ア 基礎的・基本的な学力を身に付けさせる。生徒の学力を向上させるため、指導方法の工夫・改善を行うための資料とする。定期テスト、諸調査との相関関係などから検討をしていく。家庭学習へのつながりを強化する。

イ 1学期に漢字テスト、2学期に計算テストを行う。

ウ 金、銀、銅の「取り組み優秀クラス」(平均点)を3クラス決定する。金、銀、銅クラス、満点者の名前を掲示する。学年通信に掲載する。通知票に書く。合格点を80点とし、到達しなかった生徒には再テストを行う。家庭学習でも取り組ませる。

(2) 規律ある態度部会

① 朝の挨拶運動

毎朝、曜日ごとに各専門委員会所属の生徒と担当教員、および保護者が参加して、校門付近に整列し、登校してくる生徒に大きな声であいさつをする。

② 全教員による見回り

生徒指導主任より出された時間(授業時間)で教員が各フロアを巡回する。指定のファイルがあり、何か気になることなどがあれば記入し、職員全体で情報を共有する。気になる教室があれば中に入り、授業の様子を観察する。

③ 生徒主体の朝会

学年朝会・生徒朝会では、学級委員や体育委員長の号令で始まり、整列をする。また、学年朝会・生徒朝会では生徒が考えた取組を発表したり、生徒会が主体と

なって、学校として取り組むことを啓発したりしている。朝会終了時には学級委員の号令のもと、生徒は一言も話をせず、教室へ戻る。

(3) 豊かな心部会

① 読み聞かせ

保護者（および卒業生の保護者）が所属するボランティア団体「まきの木」が中心となり、毎月（朝1回、昼1回）、読み聞かせを行っている。普段読まない本が多く、ほとんどの生徒が聞き入っている。

② 生徒会活動

各専門委員会が主体となり、ユニークな活動を行っている。

③ ボランティア活動

生徒会が中心となり、生徒が拾った空き缶等を回収する「朝ゴミ運動」を展開している他、秋から冬にかけて登校時間中に作業する「落ち葉掃きボランティア」を行っている。

(4) 清掃部会

① 全校清掃ガイダンス

ア 清掃担当から、「洗心無言清掃」の基本について説明をする。

イ 生徒によるデモンストレーションを行う。

- ・清掃を通して成長したことの発表

- ・反省会の実演

ウ 清掃開始と清掃終了の手順

- ・着替えから無言で行い、速やかに清掃場所へ移動する。清掃内容・分担は、事前に確認しておく。移動が早くできた場合は時間より早く始めてもよい。

- ・班長は点検を行い、担当の先生のもとに全員そろって反省会を行う。

② 交流清掃

1年生と3年生が「洗心無言清掃」をともに行うことで、寺尾中学校の「洗心無言清掃」について理解を深めさせ、よき伝統を守り高めさせる。より良い清掃方法について考えさせ、15分間の清掃の具体的な取組の向上を目指す。1年生の時に「洗心無言清掃」に対する意識や清掃の方法を教えていただいたことを後輩に受け継ぐことで、最高学年としての自覚を高めさせ、集大成とさせる。

③ 清掃班長会議

各クラスにて清掃学活「清掃会議」の時間を設け、日々の清掃活動の振り返りの時間の設定を行った。その後、清掃場所の班長による班長会議を行い、各清掃場所の課題と改善策について話し合った。

4 研究の成果と課題 ～全国学力学習状況調査の結果から～

(1) 成果

① 自己肯定感や自己有用感といった、「自尊感情の向上」がみられるのは、規律あ

る態度部会や豊かな心部会、清掃部会が取り組んできた活動の成果といえる。

- ② 家庭学習に関するすべての質問が昨年度と比較して10%以上向上しているのは学習部会で推進した、家庭学習ノートの定着、基礎学力定着テストの実施と関係深いといっても過言ではない。
- ③ 表1の中3対象に実施された川越市学力調査（平成28年9月5日実施）の結果、国語（+2.4）・社会（+2.4）・理科（+0.7）の3教科で、川越市の平均点を上回っている。特に国語においては、「てらりんぴっく」の開催を中心とした、漢字学習および、毎朝全校生徒が実施している朝読書が読解力の向上に役立っていると考えられる。

表1	教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
	市平均点	62.4	54.5	48.4	41.1	45.9	252.3
寺尾中	男女	64.8	56.9	45.7	41.8	45.8	255.0
	男子	60.8	53.1	43.9	39.3	40.0	237.1
	女子	69.9	61.7	47.9	44.9	53.0	277.4

(2) 課題

- ① 「勉強することが楽しい」と実感できるように、「わ・た・しの授業」を一層推進する。
- ② 「人の話を聞き、発表する」、「主体的・対話的活動を通して、自分の考えを深める」など、話し合い活動等を深めるため、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を今後も行っていく。
- ③ 平成28年4月14日に実施した埼玉県学力・学習状況調査（表2）の結果から、将来に対する明確な理由をもって学習に取り組む意識が、学年が進むにつれて低下する傾向が見られる。学年が進むにつれ、学習内容は難しくなるが、あきらめることなく、将来の夢や希望を持ち続けてほしい。また、ひとつの夢や希望にこだわり、それを信じて努力を惜しまないことは素晴らしいことであり、学校・家庭の連携が必要である。今後も引き続き、生徒が自らの力で、納得いく人生を切り拓く力の育成のための教育活動を実施していく。

(表2) 質問内容14 将来の希望や目標を持っていますか。

選択肢 1 持っている 2 どちらかといえば、持っている 3 どちらかといえば、持っていない 4 もっていない

		1学年				2学年				3学年			
		1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
28年度	寺尾中	67.5	19.3	8.8	4.4	47.5	19.2	15.8	17.5	38.2	28.5	15.3	18.1
	川越市	69.7	19.1	6.1	5.0	52.5	23.9	12.3	11.1	41.8	25.9	17.1	15.0
	埼玉県	69.6	17.9	7.1	5.2	53.0	23.3	12.5	11.2	45.0	25.5	15.4	13.9
27年度	寺尾中	69.4	19.4	3.2	8.1	57.1	18.4	8.8	15.0	48.1	26.3	15.0	10.5
	川越市	74.0	15.3	5.5	5.0	52.2	24.9	12.9	9.9	49.5	25.3	13.6	11.5
	埼玉県	74.5	15.0	5.9	4.4	56.0	22.6	11.6	9.6	50.5	24.7	13.8	10.8

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」

～思考力・判断力・表現力を伸ばす算数科のスタンダードを求めて～

川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- ペア・グループ学習にアクティブ・ラーニングの学習観を取り入れ、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす。
- 数多くの授業実践を検証し、改善することで算数科のスタンダードを確立していく。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

日々の授業の中で、自らの経験、体感、既習事項を生かして、新たな考えを作り出す力、また、他者の様々な考えを学び合ったり、考えを作り出すための材料を支援助言してもらったりすることで、多様な見方やよりよい考え方、発想を生み出す力を育みたいと考えている。そのためには、主体的・協働的に学ぶ学習を積極的に取り入れる必要がある。そのような授業実践を通し研究することで、本校独自の算数の学習の仕方（スタンダード）をつくり、教師の授業力を高めていきたいと考える。

(2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標である「四つのだいじ」教育の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「思考力・判断力・表現力を伸ばす算数科のスタンダードを求めて」とした。

平成28年度埼玉県学力学習状況調査結果を見ると本校の平均正答率は県平均よりも高い。しかし、問題形式別に見ると、記述式問題は県平均を下回っており、無回答率も決して低くはない。これは、質問紙調査の「自分の考えを発表すること」に関する設問の結果にも反映しており、「できない」と回答する割合が高かった。また、このことは普段の授業の様子からもうかがえる。本校教職員に授業中の児童の様子をアンケート調査したところ、「発表する児童が固定化している」「できているのに、自信をもてず発表できない」「自力解決できる児童の差が大きい」「わからないとあきらめる児童が少なくない」「多様な考えに広がらない」等の課題が挙げられた。

そこで、主体的・協働的学習を通して、まずは児童が自らの考えを持ち、更に他者との学び合いから新たな考えを作り出したり、深めたりして発信していける姿を目指し、それが本校の指導法の標準となることを志し、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) めざす児童像

- ① 自分の考えをもつ子
- ② 自分の考えを深められる子
- ③ 新たに考えを作り出せる子

(2) 研究の手立て

- ① 基本的授業構成の確立
- ② ・ペア・グループ学習の改善

3 実践事例

(1) ペア・グループ学習の系統性

学年が上がるにつれ達成率が低くなっていく実態から、発達段階に合わせて適切に指導できるよう指導のポイント系統表を作り、6年間を見通して指導していくこととした。

	低学年	中学年	高学年
グループサイズ	2～3人	3～4人	3～4人
めあて	自分の意見を伝え、相手の意見を聞くことができる。 ※同じか違うか	自分の意見を伝え、相手の意見と比較することができる。	自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、意見を収束することができる。
話し合いの方法	ペア学習 伝え合い	ペア・グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣	グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣
一人ひとりのめあて	自分の考えを持てるようにする。 方策： ①小集団指導 ②ヒントカード	自分の考えを持てるようにする。 役割をこなせるようにする。(司会、記録、発表など)	自分の考えを持てるようにする。 役割をこなせるようにする。(司会、記録、発表など)
話し合いのスキル 社会的スキル	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・隣に聞こえる声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す)	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・班の中に聞こえるぐらゐの声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す) ・画像や記録、ノート等を活用して伝える ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞き、大事な所をメモをする ・班の中に聞こえるぐらゐの声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す) ・画像や記録、ノート等を活用して伝える ・ホワイトボードを使って班の考えを整理できる ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる。また、よりよい意見を作り出すことができる。

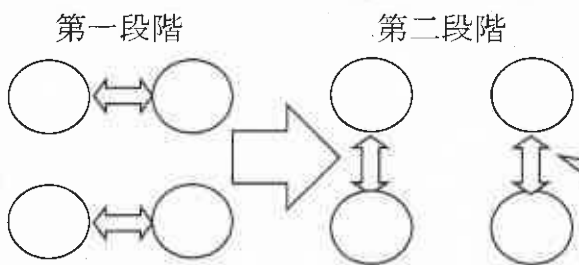
(2) 話し合いの方法

- ① ラウンド…順に発表していく。
- ② ミラーリング…前にいった人のことを簡単にまとめ、自分の考えを述べる。
ラウンドだけではなく、ミラーリングができるとうい。

例「Aさんは、〇〇でしたが、私は…」
「Bさんと同じで、私も…」

前の人の意見をまとめることができない児童には、「私も・・・」なのか「私は・・・」なのかを言えるようにする。

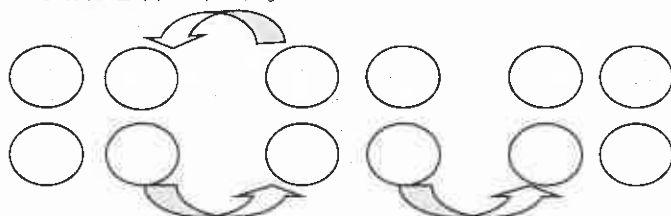
- ③ 雪だるま…4人グループであっても、2人での情報交換を2回繰り返します。
第一段階・・・隣同士で情報交換します。
第二段階・・・前にの人に隣の人の分までも伝える情報交換を行います。



このことでグループ4人分の情報を集めることができる。常に1対1で「聞く」「話す」が行われるので、対面作用は強まる。

④ 派遣

2人のメンバーが他のグループの結論を聞きに回る。残った2人のメンバーは違うグループのメンバーが聞きに来たら、自分のグループの解決策を説明する。派遣の時間が終わったら、派遣が集めてきた情報を基に自分たちのグループの解決策を練り直す。



(3) 「ペア・グループ学習のしかた」の活用

ペア・グループ学習が効果的に、また、円滑に進むよう「ペア・グループ学習のしかた」を全校共通としてまとめた。その際、児童が活用しやすいよう内容項目や文例もできるだけシンプルにした。これを全児童のノートに添付し必要などきに使いわせるようにした。

ペア学習・グループ学習のしかた
川越第一小学校

1 あいさつで始まり あいさつで終わる
これからグループ学習を始めます。よろしくお願いします。
お返事は、よく聞いてお返しをお願いします。
これからグループ学習を始めます。ありがとうございます。

2 グループ内で聞こえる声で話す
声の大きさは「おお」の「お」の音で聞かせよう。
自分の考えも一かき相手に伝えます。できれば、シートを見ながら説明できると、すばらしいね。

3 名前を呼ぶ
○○さんのお名前を呼んでください。

4 ていねいな あたがいの言葉を使う
「お願いします。ありがとうございます。いぬい言葉で。聞く側も、あなたがいぬい言葉を使って聞かせよう。」

5 うなずきながら聞く
相手の話をよく聞いて、うなずきながら聞く。
聞きながら、友達と自分の考えを比べてみよう。同じなら、おもしろい。違うなら、いいね。

6 わからないときは わかるとまで質問する
わからないときは、もっとよく聞いて聞かせよう。わからないときは、質問しよう。そのときは、自分の言葉でいぬい言葉で聞かせよう。

(4) 練り上げ構想図

事前に練り上げ方を研究し、活用しやすいよう構想図にして整理し、学ブロックごとに検討したり、実際に模擬授業をしたりして意見交換をした。


第 学年 単元名	
1 学習問題・学習課題	
2 本時で取り上げる児童の考え (取り上げる順序と考え方の題名も入れる)	
C1	C2
C3	C4
3 練り上げ構想 [練り上げの型に○をつける → 並列 結合 序列]	
中心となる発問 (○) と 留意点 (※)	予想される児童の反応 (G)
まとめ	

(5) ペア・グループ学習の検証と改善

算数の研究授業でどの学年もペア・グループ学習を意図的に取り入れ、研究協議等で検証していった。話し合いの方法として、「伝え合い」「ラウンド」「ミラーリング」「雪だるま」「派遣」等を実践したが、その中から話し合いを精選したり、話し合いの方法を変形したりして、より効果的なものに改善していった。以下が、その実践の一例である。


伝え合い（1年ペア学習）

- ①隣同士で、自分の考えを伝え合う。
- ②視点提示（似ているところ、違うところ等）時に、隣同士で話し合い、答えを見つける。



ノート交換（6年ペア学習）

- ①ノートを交換し、相手の考えを黙読する。
- ②相手の考えを本人に説明確認する。相手のノート説明の分かりやすさを評価する。



変形雪だるま（4年ペア学習→グループ学習）

- ①隣同士で、自分の考えを説明し、聞き手は分かるまで質問し相手の考えを明確に理解する。
- ②4人グループとなり、理解した相手の考えを説明し合う。説明が不十分のときは考えた本人が説明を補足していく。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 全児童に配布した「ペア・グループ学習のしかた」を取り入れたことで、聞き方、話し方を意識して対話的な学習を進めることができた。
- ② 少人数の対話的な学習から、自分の考えを洗練したり、別の説明の仕方を身に付けたりすることができた児童が増えた。
- ③ 相手の考えを聞く・評価する・説明できるようにすることで、児童は新たな考えを手に入れることができた。
- ④ この話し合い活動から自分の考えに自信を持ち積極的に発表する児童も増えてきた。

(2) 課題

- ① 学力差がある児童間での話し合い活動の仕方を確立する必要がある。
- ② 活性化した話し合い活動を引き出すための文例（起因となる文）、お互いの考えに対しての正誤の判断力、相手の説明に対しての明確な評価規準等を考える。

研究主題

「豊かなかかわり合いを通して、今を見据え明日（あす）に雄飛する児童の育成」

～3つの『学び』の授業づくり～

学校名 川越市立川越小学校

研究のポイント

○「豊かなかかわり合いを通して、今を見据え明日（あす）に雄飛する児童の育成」の主題に基づき、3つの視点（主体的な学び・協働的な学び・学びの実感）を重点化し生きる力につなぐ教育課程の工夫改善を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「生きる力」を育むことを目指し、特色ある教育活動を展開していく中で、基礎的基本的な知識技能の習得、思考力・表現力・判断力の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成、個性を生かす教育の充実が求められている。

本校では、『豊かなかかわり合いを通して、今を見据え明日（あす）に雄飛する児童の育成』を研究主題として、子どもが主体的に学習活動に取り組み、協働的な学びを通して学んだことを実践活用しながら、自己の学びを実感し、学んだことを使って、社会・世界と関わり、現在および未来の自己の生き方につなげていく教育課程の工夫改善の研究を進めてきた。

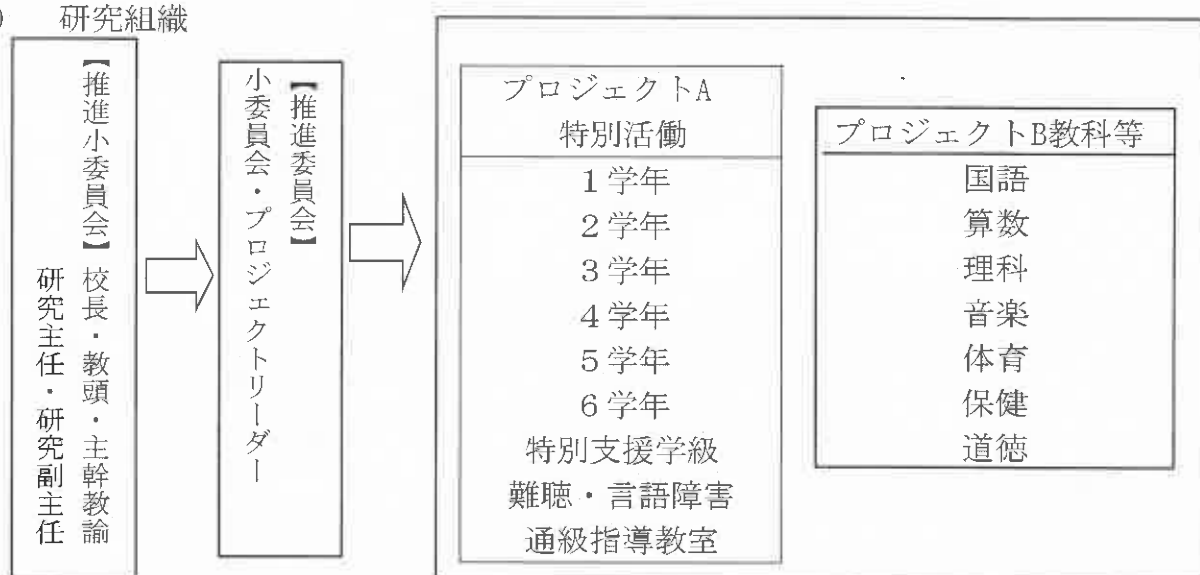
(川越小学校研究構想図)



(2) 研究主題設定理由

『豊かなかかわり合いを通して、今を見据え明日（あす）に雄飛する児童』を研究テーマとし、基礎的基本的な知識や技能を習得し、それらを活用しながら、「学んだことが役に立った。」「学んだことが使える。」など有用性を実感させたいと考えた。また、他者とのかかわり合いを通して「なるほど。」「そうだったのか。」など見方を広げ、考えを深め、主体的に学習に取り組んでいく姿を見たいと考えている。さらに、学んだことを自分と結び付けて、「よりよい自分に変わることができた。」「自分にとってみんなにとってもよりよい社会を作りたい。」と、自己の成長や変容を自覚していくものとし、今までの本校の研究を礎とし、研究を深めていこうと考えた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 3つの『学び』の授業づくり

「豊かなかかわり合いを通して、今を見据え明日（あす）に雄飛する児童の育成」のテーマに基づき、生きる力につなぐ教育課程の工夫改善に向けて、3つの視点を重点化していく。

○主体的な学び

基礎的基本的な知識技能習得とそれらを活用する思考力・判断力・表現力とを相互に関連させる学習過程を充実させ、子どもの主体的な学びを通して確かな学力を育成する。

○協働的な学び

自分の考えを表現する活動や他者とのかかわり合い、協働して学ぶ活動の充実により、自分の考えを発展させていく。各教科等において、思考ツールを活用した学びを可視化する活動を充実させ、他者と相互にかかわることを通して、学び合う活動の充実を図っていく。

○学びの実感

学びと生活の中を結び付け、学んだことを意味付けて、価値化していく。身近な生活や社会の出来事につながりや他教科と関連を図りながら、学習活動をとらえ直す活動を通して、学びを実感させていく。

(2) 目指す子どもの姿

研究サブテーマ「3つの『学び』の授業づくり」の具現化に向け、学力の3つの要素をもとに本研究で目指す子どもの姿を設定する。

- ・基礎的、基本的な知識・技能を習得している具体的な子どもの姿
「自分が生きていくために必要な知識、技能を身に付けている子ども」とした。
- ・他者と相互にかかわる中で思考を深めていく具体的な子どもの姿
「他者とのかかわりの中で柔軟に思考し、学んだことを使える子ども」とした。
- ・学んだことを自己と結び付けて、達成感や成就感から、自信や意欲が高まって自分のよさを感じている具体的な子どもの姿
「他者、自然とのかかわり、よりよい自分への変容を目指す子ども」とした

↓

目指す子どもの姿
他者とのかかわりの中で、自分を高める子

3 実践事例

3つの『学び』の授業づくりの手立ての設定

(1) 各教科等の特質と役割

各教科等プロジェクトのテーマおよび目指す子どもの姿を集約、整理し、各教科等の役割を具体的に示すことで、生きる力をより計画的に育むことができるようにする。

(2) 授業づくりの要素

各教科等プロジェクトの理論と実践（授業づくり）のつながり、接点を具体的に示すことで生きる力をより意図的に・効果的に育むことができるようにする。

プロジェクト	テーマ	3つの学びの姿	工夫
特別活動	自分からそして自分たちで活動する子ども	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを持ち、自分から取り組む姿 ○友達の考えを生かそうとする姿 ○よりよい自分への変容をめざす姿 	<ul style="list-style-type: none"> ア実践までの見通しを持ち、主体的に活動する工夫 イ子どもの思考を可視化する工夫 ウ自他の成長に気付き、次への活動へ生かそうとする工夫
道徳	自己の生き方を考える子ども	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを持ち、道徳的諸価値を理解しようとする姿 ○友達の考えから学ぼうとする姿 ○自己の生き方へ学びを生かそうとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ア道徳的諸価値にせまる発問の工夫 イ自己の生き方を多面的・多角的に考える工夫 ウ道徳性の育成につながる評価の工夫
国語科	自分の言葉で表現することで学び合い、さらに思慮を深める子ども	<ul style="list-style-type: none"> ○根拠を明確にして思考・表現する姿 ○批判的な思考で、意見を伝え合う姿 ○養った力を日常生活に活用しようとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ア子どもが自ら学ぶ意欲を高める工夫 イ自分の意見を明確化できる言語活動の充実 ウ課題解決できた喜びを次の学習につなげる工夫

算数科	数学的な見方や考え方ができる子ども	○既存の知識を生かし自力で解決していく姿 ○より良い解決法を考え実行していく姿 ○算数の学びを活用していく工夫	ア多様な考え方を引き出す工夫 イ数理的なよさに迫る工夫 ウ学びを還元する工夫
理科	科学的な見方や考え方ができる子ども	○観察・実験を通して結論を導いていく姿 ○自信をもって自分の考えを表現できる姿 ○理科のよさや有用性を見つけ出す姿	ア多面的な見方で仮説を検証する工夫 イ考察を共有化させる言語活動の充実 ウ自分の考えを顕在化させる工夫
体育科	技能・人間関係力・体力を高める子ども	○運動の技能を発揮する姿 ○動きの感じを言葉や動作で他者に伝える姿 ○運動の楽しさを味わい運動に進んで取り組む姿	ア技能を確実に身に付ける工夫 イ教え合い・学び合いの工夫 ウ日常生活で主体的に運動に取り組む工夫
保健	自他の健康保持のために協力できる子ども	○自己の成長を肯定的にとらえる姿 ○より良い解決法を考え実行していく姿 ○生活行動をよりよく改善する姿	ア客観的に健康課題をとらえる工夫 イより良い解決法を考え実行していく姿 ウ学びを生活場面と関連付ける工夫
音楽科	思いや意図をもって表現する子ども	○音楽のおもしろさや楽しさを感じられる姿 ○音楽のおもしろさや楽しさを表現できる姿 ○思いや意図をもって活動できる姿	ア音楽を感受し活動の見通しがもてる工夫 イ音楽表現における言語活動の充実 ウ自分たちらしく高め合える活動の工夫
ことばきこえ	肯定的な自己意識をもつ	○吃音にとらわれず楽しく表現できる姿 ○自分にとって楽な話し方で、考えを表現できる姿 ○自己肯定感が高まり、意欲的に生活できる姿	ア環境調整や活動内容の工夫 イグループ学習を通しての多様な経験 ウことばの教室と保護者・在籍校との連携

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・これまでの研究の成果を生かし、意見の出し合いではなく充実した話し合いが行われ、子ども同士の話をつなげることができてきた。
- ・自分の考えを表現し、自分の力で自力解決したことが「できた」という学びの実感につながった。
- ・自分とは違う視点から考えを深めた友達と意見を交流することで、新しい考え方に気づき、さらに自分の考えを広げることができた。

(2) 課題

- ・対話的活動におけるねらいをより明確化することで、学習の深まりがさらに感じられる。今後さらに研究を重ねていく必要がある。また、話し合いの方法や視点を絞り、協働的な学びの充実を図っていくことが大切である。

研究主題

「一人一人が主体的に学ぶ児童の育成」

川越市立新宿小学校

研究のポイント

- 授業において単元にふさわしい言語活動を構成する。
- 児童が、伝え合い深めることができるよう、効果的に新グループ学習を取り入れる。
- いろいろな単元を通して児童が、
 - ①自分の思いを持つ、②目的や相手を意識して、③目的や相手を自覚して言語活動に取り組むこと（主体的）。また、④考えを比べて認める、⑤考えを比べ合い、まとめる⑥考えを広げたり、深めることができる。（協働的）な学習が行えるよう授業研究を通して研究を行う。

1 研究の概要

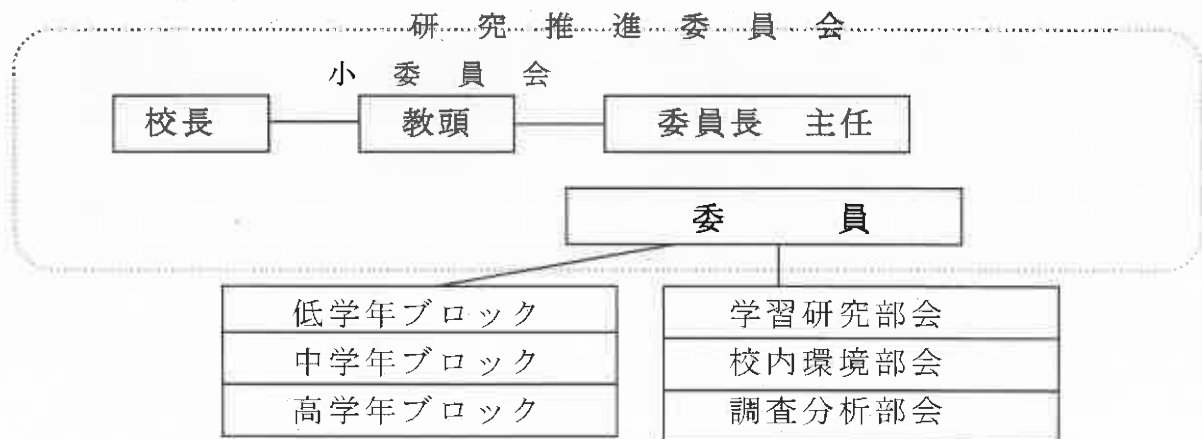
(1) 研究のねらい

子どもたちが主体的に学習できるように、単元構成を工夫する。また、効果的なグループ学習を取り入れることにより、児童一人一人が伝え合い深めることができるようにする。

(2) 研究主題設定の理由

本校の児童は、今までの研究で、①自分の考えをもつ、②自分の考えを書く、③自分の考えをグループで交流する、などできるようになってきている。しかし、主体的に学習に取り組んだり学習したことを生かし、考えを広げたり、深めたりすることについてはまだまだ出来ていない児童も多い。そこでこのような主題を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容

(1) 研究の主な手立て

「一人一人が主体的に学ぶ児童の育成」

目指す児童像

ブロック	観点	目指す児童像
低学年	主体的	自分の思いを持って、言語活動に取り組む。
	協働的	考えを比べて認めることができる。
中学年	主体的	目的や相手を意識して、言語活動に取り組むことができる。
	協働的	考えを比べ合い、まとめることができる。
高学年	主体的	目的や相手を自覚して、言語活動に取り組む。
	協働的	考えを広げたり、まとめたり、深めたりすることができる。

仮説1

単元を貫く言語活動より推進していくことで、児童は主体的に活動するようになるであろう。

視点

- ① 「できたこと」「わかったこと」の振り返り
- ② 既習事項を活用する学習

仮説2

自らの考えを、他者との交流や関わりを持つことで深めることができるであろう。

視点

- ① 思考ツールの活用
- ② グループ学習における視点とゴールの設定

(2) 研究授業の実施

① 低学年ブロック

日時 平成28年11月10日（木）第5校時

学年 第1学年

教材名 「いろいろなふね」

日時 平成28年11月10日（木）第6校時

学年 第2学年

教材名 「ビーバーの大工事」

② 中学年ブロック

日時 平成28年12月9日（金）第5校時

学年 第3学年

教材名 「もうどう犬の訓練」

日時 平成28年12月12日（月）第5校時

学年 第4学年

教材名 「世界一美しいぼくの村」

③ 高学年ブロック

日時 平成28年12月8日（木）第6校時

学年 第6学年

教材名 「ヒロシマのうた」

日時 平成28年12月8日（木）第5校時

学年 第5学年

教材名 「手塚治虫」

(3) 校内研修の実施

日時 平成28年9月26日（月）

講師 十文字学園女子大学 教授 富山哲也 氏

演題 「主体的・協働的な学びと国語科の授業づくり」

3 実践事例

(1) 指導案の本時の展開で、学校研究の視点をどのように位置付けているか意識化・可視化する。

（3）展開

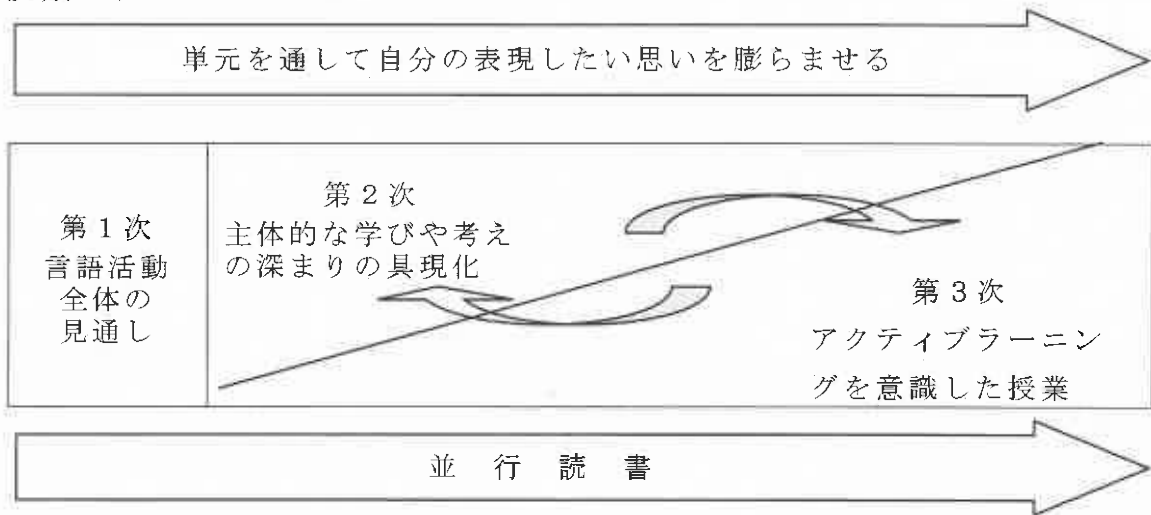
学習活動 （授業案が実践の場を表現する場）	学習内容	○指導・援助と評価の工夫	時間
1 前時の学習を振り返る。		○この場面までのワタルを振り返る。	7分
2 本時の学習課題を確認する。	○学習課題の確認		1分
ワタルの気持ちの変化を読み取る。			
3 4の場面のワタルの気持ちを表現している言葉を探す。 ・目をぱちぱちさせた。 ・「君たち、だれた。」 ・「せったいくるからな。」 ・せなかか、ほくほくあったかかった。 ・のぼりほじめた太陽のうたで、ワタルのかたをぼんとたたいた。	○心情を表す言葉のさがし方。	○様子を表す言葉に着目させる。 ○本文の叙述から主人公の姿や情景をつかませる。	10分
4 4の場面のワタルの気持ちについて自分の考えをもつ。		○ホワイトボードの活用	
5 ワタルがどのように変容したのか、自分の考えを持ち、グループで交流する。	○グループでの考えの交流の仕方	○グループのメンバー全員がしっかりと自分の考えを交流できるように司会は「司会カード」を使用するなど話し合いの仕方を示す。 ○自分の考えが記述できていないグループを中心に机間支援する。 ○自分の考えが必ずしも交流によって変わらな	10分

例では、ここに場の設定をしています。（グループ学習）

視点をどのように単元の中で位置付けていくのかを意識化・可視化することが必要ではないでしょうか。

(2) 単元を貫く言語活動を位置付けた授業を意識する。

授業モデル



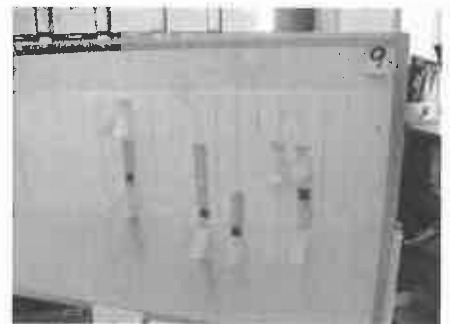
(3) グループ学習を充実する。

① ジョンソン&ジョンソンの5つの原則を意識し、グループ学習を行う。

- ・相互協力関係
- ・対面的積極的相互作用
- ・個人の責任
- ・社会的スキル
- ・グループ改善の手続き

② 場を工夫する。

- ・グループに1つずつミニホワイトボードを用意する。
- ・友だちと交流する場面では、思考ツールや付箋を活用する。



4 研究の成果と課題

【成果】

- ・研修を通じて、どの教師も言語活動を構成した国語の授業を実践できるようになりつつある。
- ・単元にふさわしい言語活動を構成した授業により、児童が主体的に学ぼうとする様子が見られた。
- ・並行読書の継続により、作者の作品の中にある言葉の美しさや魅力に触れ、読書量が増え、読書生活を豊かにするきっかけとなった。
- ・グループ活動を活発に行われることにより、友だちと意見の交流でき、自分の意見に自信を持ち発表する様子が見られた。

【課題】

- ・学習環境の整備
- ・研修の充実によるさらなる授業改善及び評価の工夫
- ・主体的な学び及び学習の深まりのとらえ方

「活力あふれる樗っ子の育成」

～体育科の授業と体育的活動を通して～

川越市立大東東小学校

研究のポイント

- 「運動学習量」を十分に確保した授業展開の工夫
- 運動の経験を豊かにし、運動の生活化を図る環境の整備
- 家庭と連携した生活習慣の確立

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 「運動学習量」を十分に確保した授業展開の実践を通して、コツコツと体をきたえる樗っ子の育成を図る。
 - ア 児童に運動の基礎・基本の習得を保障する。
 - イ 多様な動きを取り入れ、運動量を30分以上確保する。
 - ウ 学び合いの機会を保障し、適切な学習量と運動量を確保する。
 - エ 自己の能力に応じた多様な場を設定し、選択できる授業を実践する。
- ② 授業や休み時間に仲間と一緒に学習したり活動したりすることで運動好きにさせ、いろいろな運動に進んで取り組む樗っ子の育成を図る。
- ③ 生活習慣を改善し、健康な心と体づくりに取り組む樗っ子の育成を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校では、新体力テスト結果の数値が県や市の平均値を下回り、ここ数年来の課題として挙げられていた。また、休み時間等に外遊びをする子としない子の二極化傾向の現状や、ぎこちない体の動かし方をする子や、思わぬ怪我をしてしまう子が多いこと等から、今年度より体力の向上に目を向け、研究に取り組むこととした。

単に体力の向上だけを目指すのではなく、「体育授業の充実を図ることができれば、児童は運動が好きになり、その結果、体力や活力が向上し、学力の向上や生活習慣の改善にも良い影響を与えられるのではないか。」という大胆なテーマを掲げ、体育科の授業と体育的活動の充実を通して、これらの課題を解決すべく、本研究主題を設定し2年間の研究に取り組んでいる。

(3) 研究組織



2 研究内容

平成28年度 体育科研究全体構想図



3 実践事例

(1) 体育科授業の充実部

① アンケート調査による実態把握

教師及び児童の体育科の授業に対する実態把握のために、それぞれにアンケート調査をし、その中から課題として挙げられたものに対しての手立てや方策を講じた。

② 年間指導計画の修正・体育館集中利用の使用割り振り

効果的に体育授業を進めていくために、年間指導計画や体育館集中利用の割り振りに取り組んだ。

③ 体育授業の進め方

体育授業の基礎・基本を押さえた「大東東小の体育の流れ」を確認した。

④ 指導案の形式の統一

本年度より体育科指導案が改訂されたのを受け、本校での指導案の形式の統一（新体力テストの結果、単元に関わる児童の意識調査、仮説と手立て）を図った。

⑤ 学習カードや学習資料

授業実践を通して、学習カードや資料の効果的な活用について検証を行った。

⑥ 授業の見方

授業場面の観察法を用いて、運動量や教師の言葉がけなど数値的に見られる形をとり、効果的な授業の進め方について検討した。

(2) 多様な運動経験部

あらゆる機会や場所を有効に活用し、運動に対する興味・関心・意欲を引き出し様々な運動経験を積ませることをめざし、以下の取組を行った。

① 体力向上チーム

- ・新体力テストの意欲や記録の向上に向けて、目標値（県平均）の設定と掲示物の作成。
- ・新体力テスト後、校内上位者掲示の作成。学年内上位者掲示の作成。



【廊下の体感コーナー】

② けやきチャレンジチーム

- ・けやきチャレンジカップ（校内での体力比べ記録会）の設定。
→ 1か月に1回の記録会を開催。（毎月初旬に種目を発表し、月末に開催） 優勝者には賞状を作成し、表彰した。



【年間予定表】

③ 掲示物作成チーム

- ・掲示板の作製。けやきチャレンジカップお知らせ掲示物の作成。
- ・道具の整理・整備。遊具を活用した運動の場づくり。



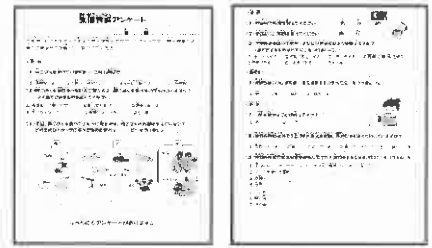
【体育コーナー】

(3) 健康な心と体づくり部

生活習慣の乱れは心身の健康に大きな影響を与える。本校にも、生活習慣の乱れによって心身の不調を起こしている児童が少なくない。そこで、毎日元気に過ごすための基礎である「規則正しい生活習慣の確立」を目指し、活力ある樺っ子の育成に取り組んだ。

① 生活習慣アンケートの実施

- ・本校児童の生活習慣についての実態把握をし、調査結果から児童・家庭へのアプローチの方法について検討した。



② 生活習慣（朝食、睡眠）の保健指導案作成

- ・22時以降の就寝児童が低学年に多いことや、朝食をバランスよく食べている児童が少ないことが課題として挙げられた。家庭と連携できるような授業内容を盛り込んで、低・中・高学年用の保健指導案を作成した。

③ 生活習慣確立に向けたコラム作成

- ・「すくすくけやつき子通信」と題し、家庭との連携及び啓発活動の一環として、月1回の割合で発行した。内容は、課題であるバランスの取れた朝食を摂取してもらうために、簡単に作れる朝食メニューを掲載した。

④ 歯科指導の実施

- ・本校は齲歯保有児童が多いことが課題に挙げられる。また、アンケート結果からも歯磨きの回数が少ないことが分かった。歯磨き指導は、児童が自身の歯を見て学べる「生きた教材」として、基本的な生活習慣確立のためには非常に有効であるため、各学級で歯磨き指導を実施した。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 授業場面観察法を用いることで、45分間の授業中でのマネジメントや学習運動量の割合を把握することができ、教師一人一人の課題を見つけることができた。
- ② パワーアップタイム（補強運動）を取り入れ、年間続けたことで新体力テスト課題項目の強化に繋げることができた。
- ③ 新体力テストの「種目別チャンピオン」や「けやきチャレンジカップ」の記録上位者の掲示を見て、「悔しい。」「もう一度挑戦したい。」の声が聞こえる等、記録向上への意欲が高まった。
- ④ 生活習慣調査から児童の健康課題が多く見つかったことと、解決に向けての教師の意識が高まった。
- ⑤ 通信や校内掲示を通して本校の体育科授業や体育的活動の様子を伝えることができた。また、睡眠や食事に関する生活習慣の改善や啓発を図ることができた。

(2) 課題

1年目の研究は、一人1回指導案作成のもとに授業公開し、体育の授業の進め方を理解することに重点を置いて取り組んできた。その中で、指導法や授業の組み立て、言葉がけや資料の活用、さらには、生活の中での自主的な運動や保健指導等、見えてきた課題解決に向けて次年度、さらなる研究に取り組んでいきたい。

研究主題

「運動の楽しさを味わい、進んで体を動かす南っ子の育成」

～「わかる」「できる」体づくり運動の授業づくりと、学びを生かす運動環境づくりを目指して～

川越市立霞ヶ関南小学校

研究のポイント

- 体づくり運動の指導方法を明らかにし、運動に親しむ資質や能力を高める。
- 運動の生活化を図るための環境を整備し、運動に親しむ資質や能力を高める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ・体づくり運動の指導方法の研究
- ・運動の生活化を図るための環境整備

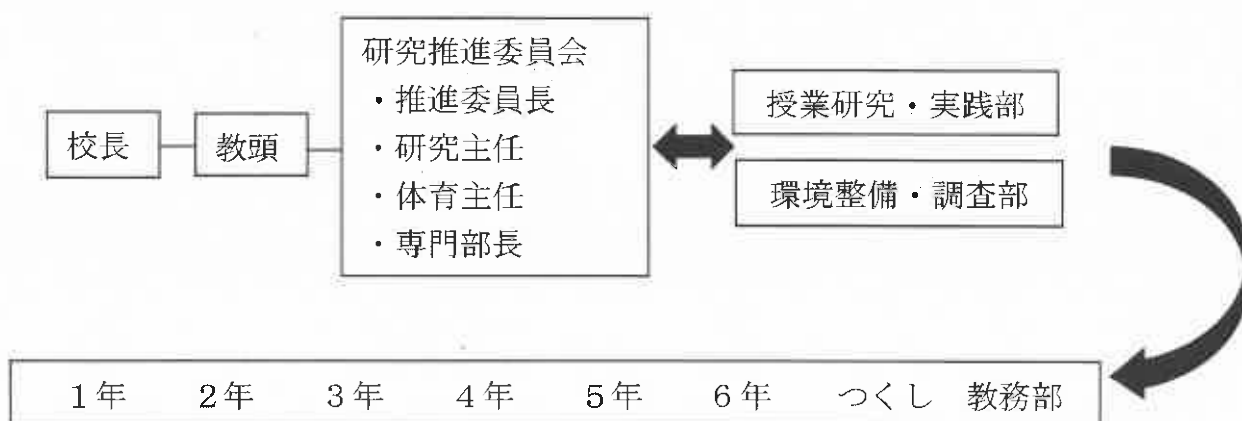
(2) 研究主題設定理由

やる気「知」、思いやり「徳」、げん気「体」を学校教育目標に掲げる本校の教育活動において、「体」力の育成は「知」「徳」を支える生活力の源として、特に素地育成を重要視してきた。

しかしながら、子どもたちを取り巻く生活環境は今もなお著しく変化し、本校でも日常的な身体活動の減少傾向や、運動をする子としない子の二極化傾向による影響が懸念されるようになってきた。

そこで、今年度より校内研究の内容を体育科に選定し、限られた学校生活の中で今まで以上に多様な運動経験を積ませ、運動の楽しさを味わわせ、自ら運動に励む児童を育成することを目的として、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

目指す児童像 運動の楽しさを味わい、進んで体を動かす児童
 低学年 仲間と仲よく関わりながら、楽しく運動できる子
 中学年 仲間と協力しながら、進んで運動できる子
 高学年 仲間と認め励まし合いながら、力いっぱい運動できる子

【仮説1】

仲間と豊かに関わりながら多様な動きを身に付ける体づくり運動の指導方法を工夫すれば、子どもたちの運動に親しむ資質や能力を高めることができるであろう。

【仮説2】

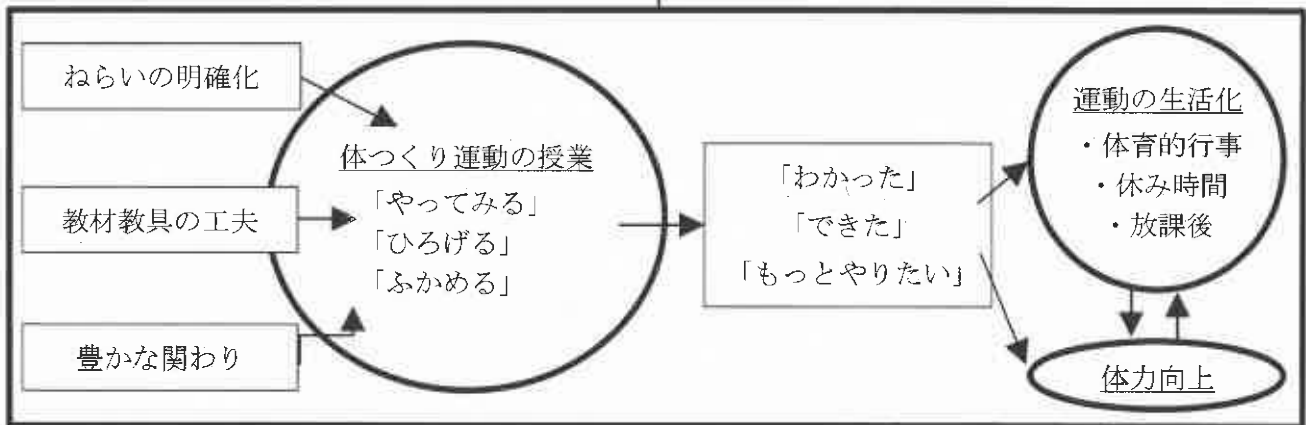
運動の生活化を図るための環境を整備し3間の充実を図れば、子どもたちの運動に親しむ資質や能力を高めることができるであろう。

【手立て】

- ねらいや動きの意図を明確にした指導計画
- 学習意欲や運動の質を高める教材教具の開発
- 豊かな人間関係を育む学習形態の工夫

【手立て】

- スポーツタイム・体育的行事の充実
- 休み時間・放課後運動の充実
- 体づくりルームの充実
- 東京国際大学学生との交流
- 家庭における運動習慣づくりの啓発



3 実践事例

(1) 授業研究・実践部

(ア) 1人1授業の実施



(イ) 各学年の動きの配列表の作成

多様な動きをつくる運動遊び（低学年）

《1年生》（18時間）

学期	1学期	2学期	3学期
時数	第1時～5時	第6時～10時	第11時～13時
内容	オリエンテーション・体ほぐしの運動 体のバランスをとる運動遊び ○回る ○寝転ぶ・起きる	オリエンテーション・体ほぐしの運動 力試しの運動遊び ○人を押す・引く・力比べをする	オリエンテーション・体ほぐしの運動 体を移動する運動遊び
	用具を操作する運動遊び（ボール・輪） ◎つかむ・持つ・降ろす・回す・転がす ○投げる・捕る	用具を操作する運動遊び（ボール・輪・缶ぽっくり） ◎運ぶ ○乗る	用具を操作する運動遊び（長なわ・短なわ） ◎くぐる ○跳ぶ

(ウ) 南小スタイル（学習過程）の作成

習得	やってみる	ねらいとする運動の基本的動きを経験する。
	つかむ 「ポイントやコツ」	ポイントやコツを理解し、基本的動きを身に付ける。 写真や言葉で動きを説明し、動きの習得を支援
活用	ひろげる	条件を変えた場で運動を行い、動きの質を高める。
探究	ふかめる	動きを交換・共有し、そのよさや楽しさを味わう。

《やってみる》
ねらいとする運動の基本的動き

《つかむ》
動きを身に付けるためのポイントやコツ

《ひろげる》 体勢や用具、人数など、条件を変えて動きの質を高めていく。

《ふかめる》 ゲームや競争、ワークショップなど動きを交換・共有。

(エ) 実践ノート of 作成

6年 巧みな動きを高めるための運動
オセロランニング

運動のしかた
人や物の動きに対応してタイミングよく動き、すばやくオセロシートをひっくり返していく運動

用具
オセロシート 100枚

やってみる
3人1組になり、10秒間でできるだけ多くのシートをひっくり返す。運動する人、記録する人、時間を計る人の3役でローテーションして運動する。

つかむ
《ポイントやコツ》
●目標（次の動きを予測） ●姿勢（重心を低く）
●移動（つま先バランス、歩幅は狭く）

ひろげる
《条件の広げ方》
●人数（1チーム6人）
●オセロの枚数（1コート30枚）
●ゲーム化（相手チームとの対抗戦）

《ゲームのルール》
① チーム6人、1回戦につき2名ずつ出場する。
② 1回の時間は30秒間、場に並べられたオセロシートを、自チームの色に変えていく。
③ 時間になったら次の2名と交代する、1人2回出て、6回戦まで行ったら終了、最終戦時にオセロシートの色が多いチームの勝利とする。

(2) 環境整備・調査部

(ア) スポーツタイムの充実

月	日	活動内容	月	日	活動内容			
4	27	集団行動・体力貯金 (体育館)		5				
5	11	ランランタイムの説明・練習	10	12	ロングランランタイム (5分間走)			
	25	学年対抗試合①		19				
6	2	学年対抗試合②		26				
	8	ドッジボール 異学年対抗試合①	11	2		持久走		
	15	異学年対抗試合②		9				
	22	学年対抗試合③		16				
	29	赤白対抗ドッジボール大会		30				
7	6	全校ドッジボール大会	12	7				
9	9	ラジオ体操		14				
	12	入場	1	11			時間とび + 長縄とび	
	13	運 大玉		28				
	14	動 ダンス	25					
	15	会 開会式	2	8	なわとび			
	20	全練		15				
	21	応援		22		長縄とび練習試合		
		28	ロングランランタイム	3		8		赤白対抗長縄とび大会
	1学期9回 2学期19回 3学期7回							

(イ) 校庭遊具の製作



(ウ) 外で遊ぶ意欲を高める

南っ子プロジェクト・・・2年間で30以上のプロジェクトに取り組む。



4 研究の成果と課題

- 成果 ①体づくり運動に関する教材教具の開発及び環境整備を進めることができた。
 ②低・中・高と2学年を見通した運動の系統表を作成することができた。
 ③講演や研修から学んだことを授業実践で検証し、研究の方向性や課題解決に向けた具体的な手立てを冊子にまとめ、次年度へつなげることができた。
- 課題 ①運動場での授業実践。
 ②運動の生活化を図る取組の継続、及び、さらなる3間の充実。

研究主題

「自分のよさを発揮し、心豊かにたくましく生きる子どもを育成する道徳教育」

～自己の生き方についての考えを深める指導法の工夫と改善～

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 道徳科への移行を踏まえ、道徳の授業の質的な向上を図る。
- 問題解決的な学習を取り入れた授業、協働的な話し合いにより、児童が自己の生き方についての考えを深める指導法の工夫と改善を図る。
- 道徳教育における家庭・地域との連携を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- 道徳における「話し合い」の工夫・改善を通して自己の生き方についての考えを深め、自分のよさを発揮し、心豊かにたくましく生きる子どもを育成する。
- 自信をもって道徳の授業を実践できる教員の資質向上を図る。

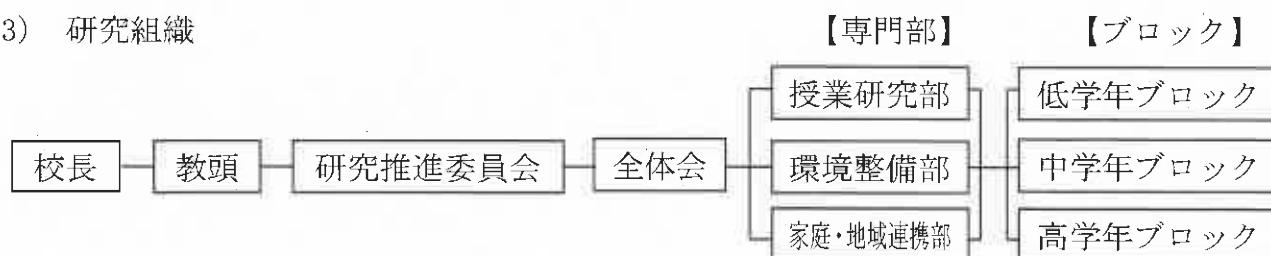
(2) 研究主題設定理由

本校では、学校教育目標「かしこく（あふれる知性）・きよく（豊かな感性）・たくましく（生きる意欲）」を掲げ、「自分のよさ（知性・感性）を発揮し、心豊かにたくましく生きる子ども」の育成を目指している。また、「豊かな心を持ち、喜びと自信に満ちた児童の育成」を道徳の教育目標として掲げ、「書く活動や話し合い活動を通しての自己を振り返る場の設定」「子どもたちの心に響くような資料の開発や指導の工夫・改善」「体験やロールプレイング等を取り入れた指導の工夫」を重点に指導している。

しかしながら、平成27年度2月のアンケートによると、「道徳の授業が好きだ」と回答している児童が38.2%と低いことがわかる。また、道徳の授業の進め方に不安を抱く教員も多い。

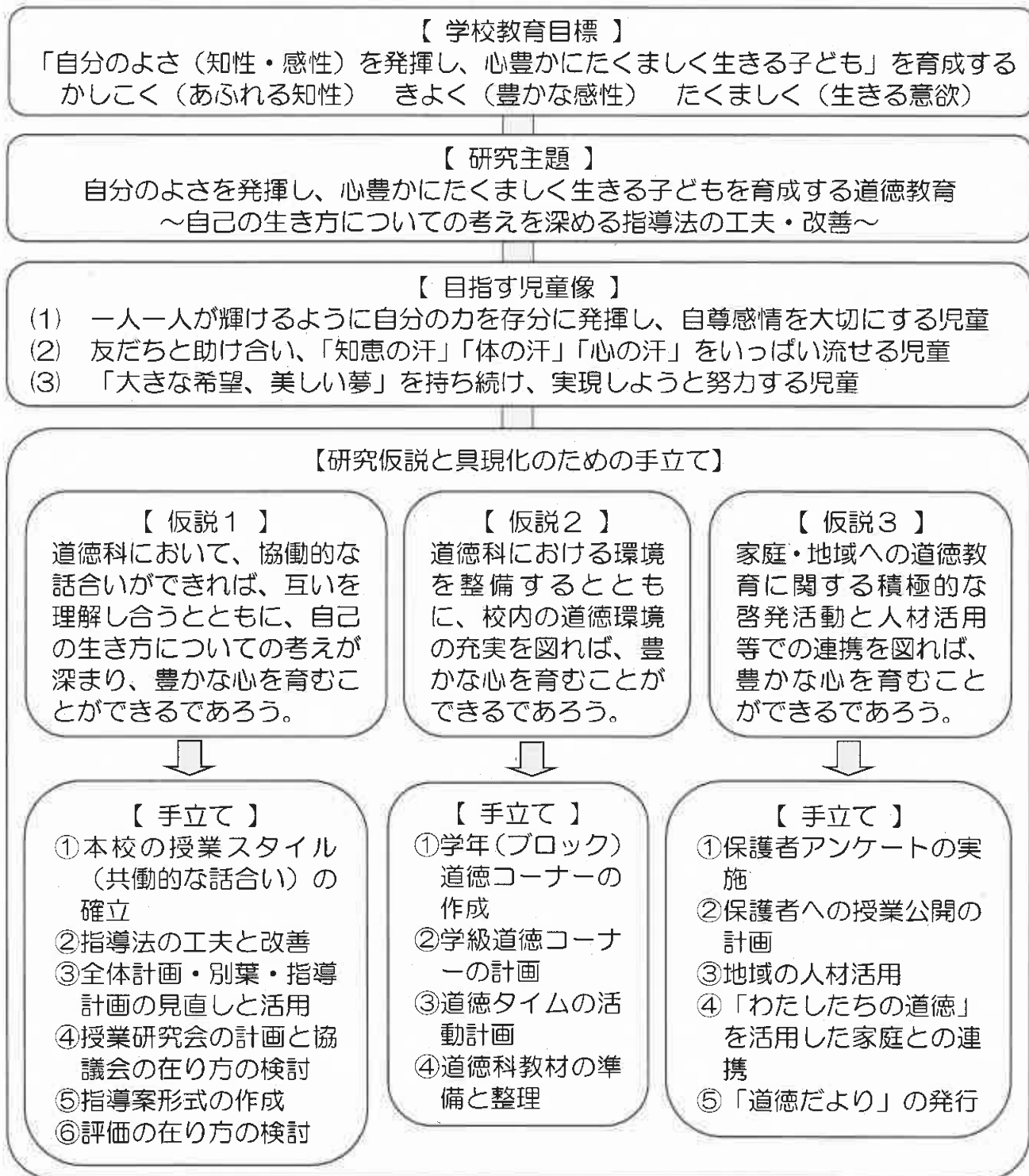
そこで、平成23・24年度の特別活動、平成25・26年度の国語科の学校研究において培ってきた「話し合い」の能力を自己の生き方についての考えを深める手立てとして授業の工夫・改善に努めていくこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想



(2) 専門部の取組

① 授業研究部

研究仮説1「道徳科において、協働的な話合いができれば、互いを理解し合うとともに、自己の生き方についての考えが深まり、豊かな心を育むことができるであろう。」に基づき、授業の質の向上を図る。

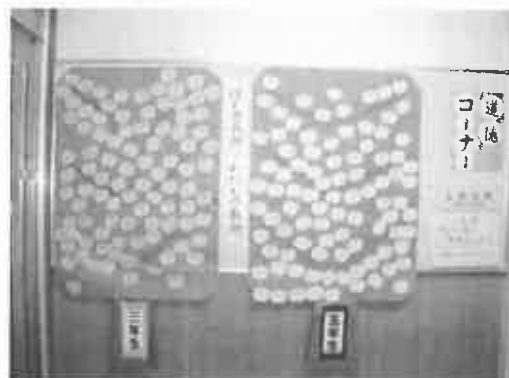
ア 「協働的な話合い」の本校のスタイルの検討

- イ 課題解決的な学習の指導方法の工夫
- ウ 評価方法についての検討

② 環境整備部

普段の学校生活での道徳の意識を高め、意欲を継続できるようにする場や機会の工夫を行うとともに、児童へのアンケート調査を実施し、道徳に関する実態と関心を明らかにする。

- ア 道徳コーナーの整備
- イ 児童アンケートの作成・実施
- ウ 道徳タイムの活動計画



③ 家庭・地域連携部

家庭・地域への道徳教育に関する積極的な啓発活動と人材活用等での連携を図り、豊かな心を育む。

- ア 保護者アンケートの作成・実施
- イ 保護者への道徳授業公開
- ウ 地域人材の活用

3 実践事例（手立ての○内の数字は、仮説1～3を示す）

(1) 実践1（第3学年 主題名：相手を思いやり親切に〔B 親切、思いやり〕）

手立て①—学習課題を設定することで、児童が主体的・協働的に思考し、解決策を話し合いながら自己を見つめることができるようにする。

手立て②—学校行事におけるめあて（低学年に優しくする）の振り返りを確認し、終末で活用することで、自分の生き方を振り返ることができるようにする。

(2) 実践2（第2学年 主題名：思い切って〔A 善悪の判断、自律、自由と責任〕）

手立て①—役割演技により主人公の葛藤や気持ちの変化に共感させることで、道徳的価値のよさや難しさを確かめる。

手立て②—道徳タイムの時間を活用して、「わたしたちの道徳」の読み物を読んだり自分の考えを記入したりして、道徳に対する親しみを感じられるようにするとともに、授業に生かすことができるようにする。

(3) 実践3（第3学年 主題名：命あるものを大切に〔D 生命の尊さ〕）

手立て①—「道徳さいころ」を利用して、話合いの約束を徹底し、何でも安心して話せる環境を整えるとともに、友達のと比べながら話したり、聞いたりできるようにする。

手立て②—学年便りで授業の様子を家庭に知らせるとともに、本時のワークシートを持ち帰り、家の人にメッセージを記入してもらうことで、家庭との連携を図る。

(4) 実践4（第5学年 主題名：目標に向かって〔A 希望と勇気、努力と強い意志〕）

手立て①—ホワイトボードを活用し、友達と小グループで意見を伝え合うことで自

己の生き方を深く考えることができるようにする。

手立て②—教室の道徳コーナーに前時・本時のワークシートや場面絵、課題などを掲示し、学習の振り返りができるようにする。

(5) 実践5 (第1学年 主題名：みんなが使うもの〔C 規則の尊重〕)

手立て①—対話や役割演技など協働的な活動を通し、自己を見つめることができるようにし、道徳的価値を意識させる。

手立て③—「わたしたちの道徳」に記入したものを持ち帰り、家の人と話し合ってもらうことで家庭との連携を図る。

(6) 実践6 (第6学年 主題名：あなたの命は宝物〔D 生命の尊さ〕)

手立て①—事前に資料を読み、自分の意見を持たせることで話し合いを活発にさせ、ねらいとする価値に迫れるようにする。

手立て③—一人一人に保護者からの手紙を読ませることで、思いや願いを感じ取らせ、豊かな心を育む。

(7) 実践7 (第4学年 主題名：思いやる心〔B 親切、思いやり〕)

手立て①—授業の導入にアンケート結果を知らせることで、教材と実生活につながりをもたせ、話し合いを活性化させる。

手立て②—道徳の授業で使った資料を「道徳ファイル」にファイリングすることで、以前の自分の考えを振り返ったり、現在の自分の考え方と比べたりすることができるようにする。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 道徳の時間の確実な実施と環境の整備により、児童の道徳の時間への関心が高まってきた。
- ② 全学年による授業研究会を通して、課題解決的な学習による基本的な指導過程と指導方法が明確になってきた。
- ③ 道徳の授業公開や地域人材を活用した授業の展開により、家庭や地域の道徳教育への関心が高まった。

(2) 課題

- ① 自己の生き方についてしっかりと考えさせる指導過程をさらに研究していくことで、児童が自分の成長に気付きながら自尊感情を高めていけるようにしたい。
- ② 全教育活動を通して道徳教育を推進していくという共通理解のもとに、各教科領域の活動の充実を図りながら、児童の豊かな心を育てていきたい。
- ③ 道徳ファイル(ワークシート)を活用し、児童の成長の様子を理解するとともに、温かいコメントで励ますことで、道徳的実践意欲を高めたい。
- ④ 課題解決的な学習による指導過程や指導方法を共通理解し、確実に授業実践を重ねることで、全教員の授業力の向上を図りたい。
- ⑤ 教員間で協働的な議論を展開できる環境や雰囲気大切にしながら、全員で作りに上げる学校研究としていきたい。

研究主題

「追究する力を育てる社会科学習」 ～主体的・協働的に学ぶ学習の充実（歴史的分野）～

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

- 関東ブロック中学校社会科教育研究大会埼玉大会（以下：関ブロ）の研究と関連付け、単元計画や授業の指導方法等の工夫・改善を行う。
- 川越市立博物館と連携し、地域教材の開発を行い、適切な活用方法について研究する。

1 研究の概要

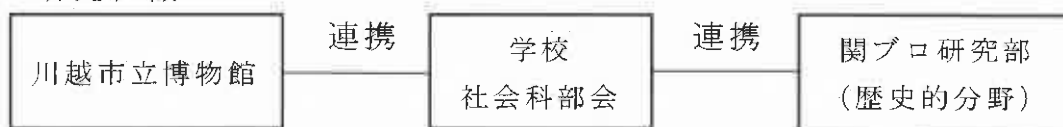
(1) 研究のねらい

社会科学習において追究する力を育てるための方策を、主体的・協働的に学ぶ学習の充実に着目して、授業実践を通して明らかにし、学習指導の工夫改善に資することをねらいとする。

(2) 研究主題設定理由

社会に対する関心を持ち主体的に課題を捉え、社会的な見方・考え方を働かせて、他者と協働して課題解決を図る生徒を育成する。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- 生徒の実態や小学校での社会科学習内容との系統性、中学校社会科で育成すべき資質・能力を踏まえ、指導計画を作成・改善し、学習指導に生かす。
- 身に付けさせたい資質・能力を明確にし、その習得のために主体的・協働的な学習の充実を図る。
- 単元を貫くテーマを設けて、課題解決的な学習を適切に設定し、「追究する力」の育成を図る。

3 実践事例

(1) 単元名「武士の台頭と鎌倉幕府」（1学年）

① 学習課題

「源頼朝はどのように支配を広げたのか、その特徴をとらえよう」

② 指導の手立て

本実践では、「追究する力」を育成するための学習過程のうち、「表現・発信」、「意見交換・討論」を中心的な授業の取組とした。

主体的な学習としては、

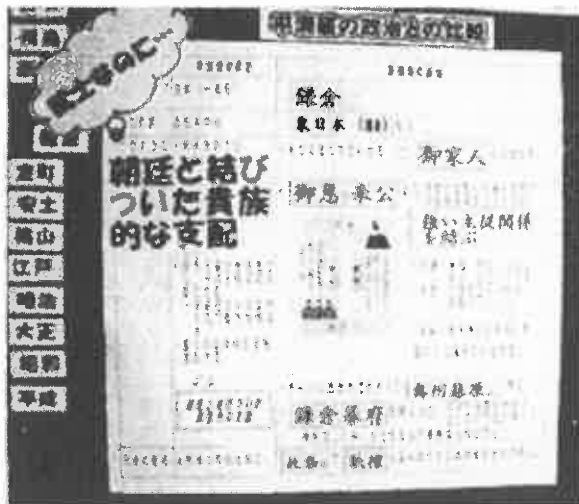
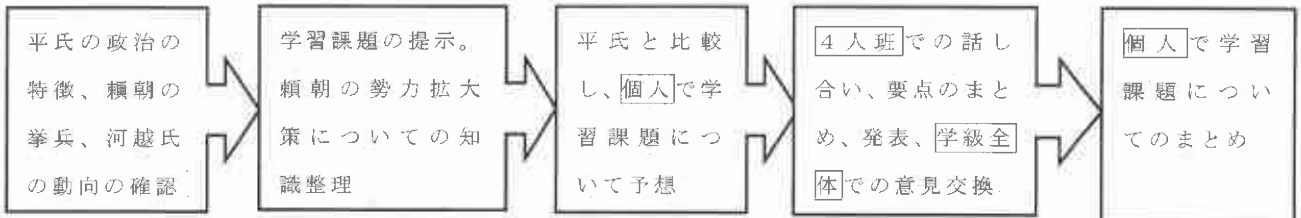
- 川越市立博物館と連携し、現在の川越市を支配していた「河越氏」に関する資料を活用する場面を工夫することにより、生徒の学習意欲を高め、主体的に課題を追究する。

協働的な学習としては、

- 「河越氏」の動向を通し、鎌倉幕府と御家人との間に結ばれた御恩と奉公の関係を具体的に理解させる。
- 平清盛の政治との比較を通して、源頼朝が始めた武家政治はどのような特徴があるのかを、班で話し合っって考えをまとめ、発表する学習場面を設ける。
- 班での話し合いや発表、学級全体での意見交換などを通して思考を深め、学習課題についてのまとめを自分の言葉で適切に表現する。

という具体的な学習活動を設け、単元を貫くテーマの解決を図り、「追究する力」の育成を図った。

③ 授業展開



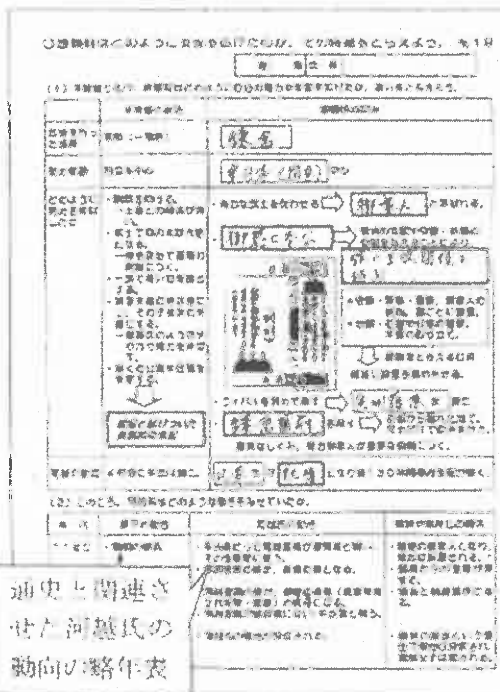
【ワークシートと連動した板書掲示物】



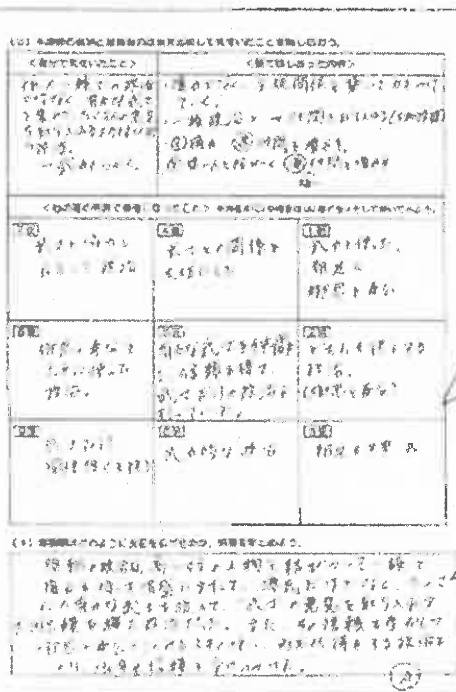
自分の意見を基に、4人グループでの話し合い。班内で活発な意見交換を行うことができた。



ホワイトボードにまとめられた、各班の意見。



通史と関連させた河越氏の動向の略年表



各班の発表を聞きながら、自分や自分の班の意見との共通点や相違点を簡潔にメモする欄。回を重ねるごとに、簡潔に要点を記述できる生徒が増えている。

各班の発表を踏まえ、学習課題についてのまとめを自分の言葉で記述している。

(2) 単元名「武士の台頭と鎌倉幕府」(1学年)

① 学習課題

「承久の乱のときの武士の行動から、鎌倉幕府がどのように支配を広げたのかを考えよう」

② 指導の手立て

本実践では、「追究する力」を育成するための学習過程のうち、「表現・発信」、「意見交換・討論」を中心的な授業の取組とした。

主体的な学習としては、

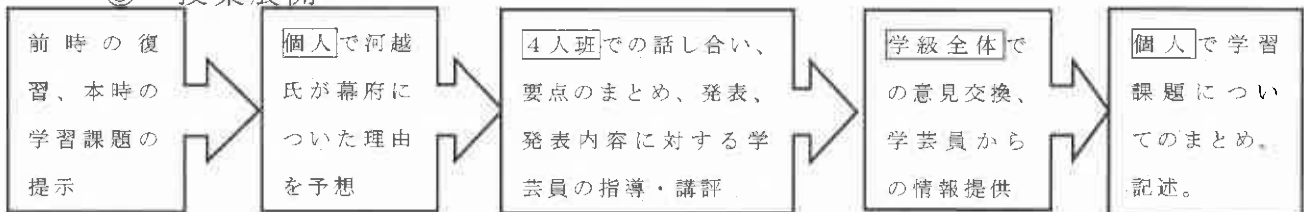
- 川越市立博物館と連携し、現在の川越市を支配していた「河越氏」に関する資料を活用する場面を工夫することにより生徒の学習意欲を高め、主体的に課題を追究する。

協働的な学習としては、

- 「河越氏」の動向を通し、鎌倉幕府と御家人との間に結ばれた御恩と奉公の関係を具体的に理解させる。
- 承久の乱において、幕府側の勝因と、幕府の支配のつながりを考え、個人で考察した内容を4人の班で意見交換し、班としての考えをまとめ、ホワイトボードにまとめて発表する。
- 他者の意見や発表を聞いて思考を深め、学習課題を多面的・多角的にとらえて考えを自分の言葉で文章にまとめる。

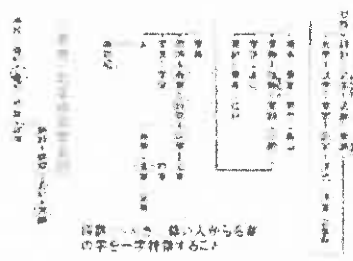
という具体的な学習活動を設け、鎌倉幕府は御家人との関係を強めることで、支配力を強化したことに気付かせ、「追究する力」の育成を図った。

③ 授業展開



【ゲストティーチャーによる解説】

【地域教材の資料化】



秩父平氏・河越氏の系図

(3) 単元名「欧米諸国の進出と日本の開国」(2学年)

① 学習課題

「開国によって日本はどのような影響を受けたのだろうか」

② 指導の手立て

本実践では、「追究する力」を育成するための学習過程のうち、「情報の収集・加工と読み取り」、「表現・発信」を中心的な授業の取組とした。

主体的な学習としては、

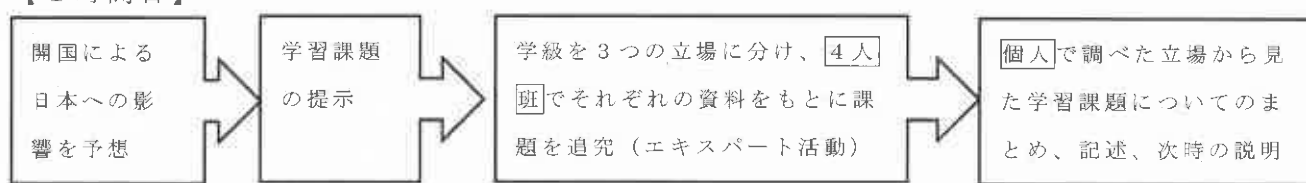
- 川越市立博物館の資料やゲストティーチャーとしての学芸員の活用、身近な地域を教材として取り上げるにより、生徒の学習意欲を高め、主体的に課題を

追究させる。

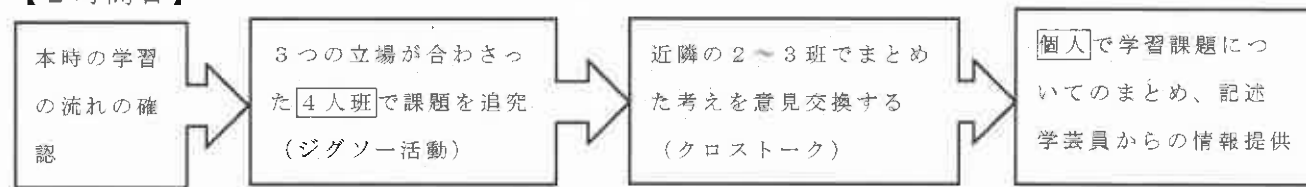
- 知識構成型ジグソー法を取り入れ、エキスパート活動やジグソー活動によって、幕府・川越藩・川越商人がそれぞれの立場で、どのような影響を受けたのかを調べ、その結果を伝え合うことを通し、主体的に学習に取り組む環境を設定する。協働的な学習としては、
 - エキスパート活動の結果を、さらにクロストークでグループごとに意見交換させることで、さらに思考を深め、学習課題を多面的・多角的に捉えて、考えを自分の言葉で文章にまとめさせる。
 - グループでの話し合いや発表、学級全体での意見交換などを通して思考を深め、学習課題についてのまとめを自分の言葉で適切に表現する。
- という具体的な活動を設け、単元を貫くテーマの解決を図り、「追究する力」の育成を図った。

③ 授業展開

【1時間目】



【2時間目】



【エキスパート活動】

【ジグソー活動】

【クロストーク】



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 川越市立博物館との連携をさらに拡充し、通史と関連付けた地域の歴史素材の教材化を授業者と学芸員で協議し、作成した資料を授業で活用した。生徒は郷土の歴史への関心を高め、課題解決に主体的に取り組むことができた。
- グループでの話し合いや意見交換、発表などの協働的な学習活動を通して、生徒が学習成果を共有し、学習課題について多面的・多角的に捉えることができた。

(2) 課題

- 主体的・協働的に学ぶ学習の充実に着目した単元計画の見直しや指導方法の工夫・改善をさらに努めていく。

「追究する力を育てる社会科学習」

～主体的・協働的に学ぶ学習の充実（公民的分野）～

学校名 川越市立富士見中学校

研究のポイント

○教科目標である「公民的な資質・能力の基礎を養う」を踏まえ、社会科学習において追究する力を育てるための方策を、主体的・協働的に学ぶ学習の充実に着目して、学習指導の工夫改善に資する。

1 研究の概要

(1) 診断的な取組

下の表は、以下の項目に関しての県内調査協力校（協力校より各学年1クラス抽出平成27年9月実施3490人回答）と本学級との、肯定的解答のパーセンテージを表したものである。

- ①社会科の学習が好きですか
- ②グループ活動で、協力して資料を調べたり話し合ったりすることは好きですか
- ③社会科の学習で、友達と話し合う中で自分の意見を伝えることができますか
- ④身近な地域をより良くしていくために、自分も役に立ちたいと思いますか

	①	②	③	④
県内調査協力校	72.5%	75%	72.8%	71.7%
本学級	60.6% (公民が好き81.8%)	62.5%	83.9%	87.1%

この比較によると、①から公民学習に対する興味は高く持っている生徒が多いことが分かる。その一方で、②からグループ活動に対して苦手意識を持っている生徒が4割近くいることが分かる。これは、以前のグループ活動時に生徒に対する指示が明確でなかったため、アクティブ・ラーニングの目的を達成できていなかったことが読み取れる。教師の生徒へのサポートを見直し、活動の明確化や机間巡視を細目に行い、生徒の疑問解決に努めたい。その反面、意見の伝達に関しては8割を超える生徒が出来ていると回答しており、日々の授業でも多くの班では話し合いが活発に行われている様子がみられる。しかしながら、4人班での活動では、二人や三人で結論が導かれていることも見受けられ課題が残る。本単元との関わりが深い④では、9割近くの生徒が肯定的に回答しており、地域社会への参画に対する前向きな気持ちが読み取れる。次に、地方自治を学習するにあたり以下の項目に対しても同時に意識調査を行った。数字は、肯定的解答のパーセンテージを表したものである。

⑤川越が好きですか	90.6%
⑥川越が住みよい街だと感じますか	90.6%
⑦大人になっても川越で暮らしたいですか	71.0%

上記の結果から、9割の生徒が川越に対して愛着を持っている様子が分かる。また、将来的にも川越で暮らしたい生徒が7割おり、これは、川越が住民の強い意志と努力によって現在の「小江戸 川越」としての発展を実現したという自負が生徒の中にもある証だと考える。

(2) 重点的な取組・総合的な取組

本単元では、地方公共団体の政治に対する関心を高めるため、市民の川越市に対する要望や課題をアンケート調査から分析し、結果を分類・整理させ、その中から課題を見だし、解決に向けて生徒同士が教え合い、協力し合う協働的学習を組み入れた課題解決的な学習により単元を構成した。単元の中では都市計画の専門家からの説明・助言により、未来のまちづくりに対して多面的・多角的な視点から課題を捉えられるようにし、最終的に「20年後の川越市をよりよいまちにするためのマイマスタープラン」をつくり、提案する単元計画とした。本単元を終えたときに、将来政治に参加する公民としての意欲と態度が育ち、ここで作成したマイマスタープランが、生徒が3年後に有権者となったとき、選挙で投票する際の判断に役立つような学習の取組を行った。

2 研究の内容

- (1) 診断的な取組—生徒の実態や学習状況を把握し、学習指導に生かす。
- (2) 重点的な取組—研究テーマに重点を置いた授業展開を工夫し、学習指導に当たる。
- (3) 総合的な取組—問題解決的な学習を踏まえた単元構成を工夫し、学習指導に当たる。
- (4) 授業研究会の実施—研究のまとめをし、成果と課題を考える。

3 実践事例

授業研究会の実施

関東ブロック中学校社会科教育研究大会埼玉プレ大会として実施

(1) 単元名 地方自治と私たち <公民的分野内容 (3) 私たちと政治>

(2) 単元の目標


地方公共団体の仕事や役割について、川越の事例を具体的に調べることを通し、地方自治への関心を高め、住民の一人として主体的に地域の発展に寄与しようとする自治意識の基礎を育て、これからのよりよい社会の形成に主体的に参画する態度を養う。

(3) 本時の指導

① 本時の目標

- ・多面的多角的な視点で、「20年後のよりよい川越をつくるためのマイマスタープラン」を作成することができる。【思考・判断・表現】
- ・川越のまちづくりについて関心を高め、それを意欲的に追究し、社会へ主体的に参画しようとしている。【関心・意欲・態度】

② 展開

過程	○学習活動 学習内容	・指導上の留意点 ◎評価の観点
導入	<p>○前時までの活動を振り返り、本時の課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>本時の課題</p> <p>分野ごとのマスタープランをもとに、20年後のより良い川越をつくるためのマイマスタープランを完成させよう！</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民の思い、ゲストティーチャーからの説明を思い出させ本時への意識付けをする。
展開	<p>○各班の考えたマスタープランを、分野別班に分かれ検討し、計6つの提案をよりよい川越をつくるために優先して取り組むべき上位3つのプランに絞り込む。(8人班×4)</p> <p>○分野ごとに決まった3つの提案を全体に発表する。(4つの分野×3案で合計12の具体策が提示される。)</p> <p>○分野ごとの発表を踏まえ、各自が12の提案の中から4つの具体策を選び、その理由をレポートにまとめ、マイマスタープランをつくる。</p> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時のゲストティーチャーからの評価を踏まえて「観光、地域コミュニティ、環境、防災・安全」の4分野に分かれ討議させ、プランを3つに絞り込ませる。 ・絞り込めない班には効率や公正の視点から助言を与える。 ・まちづくりの視点や課題、実施できた場合の効果や変化を中心に発表させる。 ・短冊にして見やすいよう掲示する。 <p>◎マイマスタープランを完成させ、政策を選択した明確な理由を述べるができる。【思考・判断・表現】</p> <p>A基準＝マイマスタープランについて、既習内容を活かし効率・公正や公共の福祉など多面的・多角的な視点から作成できている。</p> <p>B基準＝マイマスタープランについて、地域の発展を考え作成できている。</p> <p>基準に達しない生徒への手立て 生徒の思いを聞き出し、そこから判断するよう助言を与える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数名を指名し、マイマスタープランを発表させる。
まとめ	<p>○単元の内容を振り返り、どのような力が高まったと思うか振り返りシートに記入する。</p>	<p>◎川越市のまちづくりに主体的に参加しようとする意欲をもつことができたか。【関心・意欲・態度】</p>



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・生徒が「持続可能」「多様な社会」「少子高齢化社会」を見据えて考えていた。
- ・ドローンを飛ばす等の面白い発想に感心。新しく柔軟な意見から観光地として勢いのある川越への愛着を持って考えられていた。
- ・それぞれがマイマスタープラン作成に向けて政策選びを積極的に行っていた。
- ・4つの具体的な視点が示されたことで、考えをまとめやすい状況がつけられていた。
- ・班→個人になった後も意見を見ながら自分なりの考えている生徒が多かった。堂々と自分の意見を発表することができた。

(2) 課題

- ・話し合いを通して「深い学び」が行われたと感じるが、話し合いの過程や意志決定の場で熟考されたかは課題である。
- ・マスタープランを絞る時に、なんとなく手をあげて決めていた班もあったので、もう少し話をしてから決めても良かった。
- ・二人、もしくは三人での話し合い活動があれば思考の深まりや変化が活性化したかもしれないと感じた。
- ・班によっては多数決で決め、少数意見を聞かずに決めていた。話し合いが活発過ぎ、なかなか意見を決められない班もあった。

今回の研究で得た成果と課題をいかし、今後一層の研究に励み次年度の本発表に臨みたい。

「追究する力を育てる社会科学習」
～主体的・協働的に学ぶ学習の充実（地理的分野）～

学校名 川越市立城南中学校

研究のポイント

- 関東ブロック中学校社会科教育研究大会の研究と関連付け、単元計画や授業の指導方法等の工夫・改善を行う。
- 本研究では地理的分野の学習において「主体的・協働的な学習活動を通して、対話的な学習を取り入れることは、生徒の社会的事象への興味関心を高め、複数の資料を関連付けて考察する力やグラフや表を読み取る力の向上に資する。」という仮説の下、ジグソー学習を展開するなどの指導法の改善に取り組んだ。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究は、主体的・協働的な学習の充実を通して、追究する力を育てることをねらいとしている。そして、その学習指導を通して各分野の目標達成に迫るものである。

本校の研究では、地理的分野において「我が国の国土及び世界の諸地域の地域的特色を追究し、我が国の国土及び世界の諸地域に関する地理的認識を養う」ことを目標として単元計画や授業の指導方法等の工夫・改善を行う。

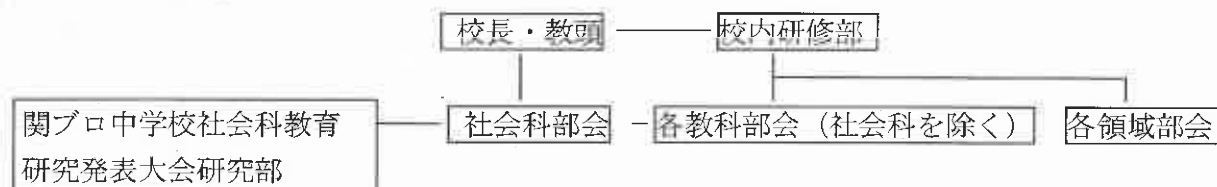
(2) 研究主題設定理由（社会科地理的分野の実践に関わって）

本研究を進めていく過程で、1年生を対象に実施したアンケートでは「統計資料や表・グラフを用いて積極的に調べているか」との問いに、50%の生徒が否定的な回答であった。統計資料、図表の読み取りが課題になっていると考える。また、「調べてから自分の考えをまとめて発表する」ことに対しても、「できる」「まあまあできる」生徒が60%に止まっていることから、個人の努力で考えをまとめることがやや苦手であることがわかる。しかし、「グループで調べて意見交換し発表に向けてまとめていく」ことは、90%近い生徒が「できる」「まあまあできる」となっており、個人よりもグループでの課題解決学習が効果的であると思われる。

また2年生で本研究に係る学力調査問題を実施したところ、表や統計から地理的事象や特色を読み取る問題や複数の資料を関連付けて考える問題の正答率は30%未満であった。アンケート調査でも「グラフや表から地理的事象を読み取ることはできますか」「複数の資料を関連付けて、地理的事象を読み取ることはできますか」という問いに対しても、「はい」「どちらかといえば、はい」と答えた生徒はそれぞれ26%、29%という低さであり、学習意欲はあるものの資料を読み取り考察することを苦手としている生徒が多いということが分かった。そこで、ジグソー法を取り入れ、課題解決的な学習を展開したところ、テストや提出物などで、多くの生徒に学力向上の効果が見られた。

これらの結果から、協働的・対話的な学習をすすめる中で、仲間と教えあい、様々な考え方に触れることで、生徒が苦手意識を抱えている複数の資料を関連付けて考察することやグラフや表の読み取り等を克服することができると考えられ、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

期 日	内 容	対 象
通年 (毎週月曜 1 校時)	社会科教科部会	主に社会科教員
5月 9日 (月)	校内研修 (今年度の学校研究の全体計画について)	城南中全教職員
6月15日 (水)	社会科授業研究会	城南中全教職員
7月 6日 (水)	社会科授業研究会	社会科教員
7月 8日 (金)	社会科授業研究会	城南中全教職員
8月 1日 (月)	関ブロ中学校社会科教育研究発表大会埼玉大会研究部員研修会および実行委員会	社会科教員
8月10日 (水)	社会科研究発表大会	社会科教員
8月23日 (火)	授業力向上研修 (アクティブ・ラーニングに関わる講演) 教科・領域部会 (授業研指導案検討その他)	城南中全教職員
9月～12月	各教科・領域による授業研究会	城南中全教職員
10月 7日 (金)	社会科授業研究会	城南中全教職員
10月27日 (木)	関ブロ中学校社会科教育研究発表大会実行委員会	社会科教員
10月31日 (月)	授業力向上研修 (社会科の関ブロプレ発表に向けて)	城南中全教職員
11月10日 (木)	関ブロプレ発表 (社会科)	城南中全教職員 関東都県からの参加者
11月21日 (月)	ここまでの授業研究に関わる振り返り (社会科の関ブロプレ発表を中心に)	城南中全教職員
12月26日 (月)	関ブロ中学校社会科教育研究発表大会埼玉大会研究部員研修会および実行委員会	社会科教員
2月6日 (月)	今年度の学校研究の振り返り (次年度に向けて、その成果と課題)	城南中全教職員

3 実践事例

(1) 関 正史教諭による実践 (11月10日 (木) 社会科関ブロプレ発表より)

①単元：世界の諸地域 北アメリカ州

②学年・学級：1年2組


③本時の学習

ア 本時の目標

アメリカ合衆国やカナダの農業の特色を多面的・多角的に考察し、その結果を文章で表現することができる。【思考・判断・表現】

イ 展開

過程	学習内容・学習活動	指導上の留意点・評価 (◇)	資料等
導入 3分	1 センターピポットの写真を見て、アメリカ合衆国やカナダの農業の特色について考える。	・第2時で学習した農産物の主要生産国に、アメリカ合衆国やカナダが入っていたことを補足説明して押さえさせる。	・センターピポット (写真) ・掛地図 「北アメリカ州」
課題提示 2分	2 本時の課題を確認し、アメリカやカナダの農業の特色について、自分の予想を書く。	・小学校第6学年の「日本と関係の深い国」での学習を踏まえて考えるよう助言する。	・小学校第6学年の教科書
追究 38分	3 3人でグループを作り、3つの調査項目を分担する。同じ項目を分担する生徒で集まり、教え合いながら資料を読み取り、分かったことをまとめる。(エキスパート活動)	<p>・次の調査項目を設定する。 A…適地適作 B…企業的な農業 C…大企業の進出</p> <p>・適切に資料を読み取れていない生徒に対して、友達の読み取りを参考にしよう助言する。</p>	<p>・ワークシート ・資料</p> <p><input type="checkbox"/>A・農業分布図 気温と降水量分布図</p> <p><input type="checkbox"/>B・日米農業規模の比較 (表)</p> <p><input type="checkbox"/>C・農産物輸出国 (グラフ)</p>
	<p>《予想される生徒の考え》</p> <p>A…アメリカでは広大な土地で、それぞれの気候にあった農産物をまとまって作っているので生産量が多い。</p> <p>B…大型機械や農薬、化学肥料を使い、大規模な農業を行っている。</p> <p>C…大企業が大量の農産物を集め、加工し、全世界に向けて輸出している。</p>		
	4 元のグループに戻り、資料から読み取ったこと、調べたことを伝え合う。(ジグソー活動)	<p>・話し手は、資料を指し示しながらキーワードを押さえるように心掛けて説明するよう指示する。</p> <p>・聞き手は、説明を聞いてからワークシートにまとめるよう指示する。</p>	
	5 グループで、アメリカの農業は他国の農業と比べて、どのような特色があるのか話し合い、その結果を掲示用シートに書き、黒板に張り出す。(クロストーク活動)	<p>・3つの項目を関連付けてアメリカ合衆国やカナダの農業の特色を考えさせる。</p> <p>・他の国との比較については、日本や、アジア州、ヨーロッパ州での農業の様子と比較させるなど、多面的・多</p>	・掲示用シート

		<p>角的に考察するよう助言する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの意見を聞いて、自分の考えを深めさせる。 	
<p>まとめ 7分</p>	<p>6 本時の学習活動を基に、課題に対する自分の考えを文章で記述する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>生徒の記述例</p> <p>アメリカ合衆国やカナダは、広大な土地の自然条件に合った作物を、大規模な農場で大型機械を使って生産している。その規模は、一人当たりの収穫量で見ると、日本の 16 倍になる。大企業により農産物が輸出されていて、世界の食料を生産している地域である。</p> </div> <p>7 自己評価を記入する。</p> <p>8 次時の予告をする。</p>	<p>◇アメリカ合衆国やカナダの農業の特色を多面的・多角的に考察し、その結果を文章で記述している。【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1つの項目から記述していて、多面的・多角的にとらえられていない生徒に対して、グループで伝え合ったことを確認させ、他の項目についても取り上げるよう助言する。 ・3つの項目を取り上げて記述できていない生徒に対して、グループで伝え合ったことを確認させ、それを基にまとめるよう助言する。 <p>・学びの深まりを振り返らせる。</p> <p>・これまで学習してきたことを基に北アメリカ州の特色をまとめることを予告し、次時の学習への関心を持たせる。</p>	<p>・ワークシート</p> <p>・ワークシート</p>

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ジグソー学習の理論や方法について学び、実践に活かすことができた。また、生徒もグループでの話し合い学習を中心とした学習形態に慣れ、積極的に学び合う姿が見られた。
- ・全教科全領域でアクティブラーニングの授業実践に取り組むことで、社会科のみならず全教職員の授業力向上に係る意識の向上が図れた。

(2) 課題

- ・実践に関わり、評価及び学力向上の計測を何を用いてどのように行っていくかを明確にする。
- ・授業改革、授業力向上が全教職員にとっての課題であるという共通理解の下、アクティブラーニングに係る授業実践力の更なる向上を図る。

「学力の向上を図る教育活動の充実」

～授業の質の向上を目指して～

川越市立霞ヶ関中学校

研究のポイント

- 総合的な学力向上策に全校で取り組む中で、特に「か・す・み ラーニング」を主軸にして授業改善を推進する。
- 指導法改善P T（コアチーム）が随時必要に応じてT F T（タスクフォースチーム）を編成し、研究を進める。その編成は、全教職員が研究に参画するために、教職員個々のキャリア段階や分掌、特質を活かす。
- 各教科領域で指導内容の継続性、教育課程の接続を明確にするための小中協働教科部会と協働授業を実施する。
- 学校評価アンケートやT F Tの調査から、生徒・保護者・教員の実態を把握して課題ごとにビジョン（達成目標）を立て、P D C Aサイクルの下で研究に取り組む。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

①授業の改善

ア 「か・す・み ラーニング」を主軸に授業を改善する。

（確実に基礎基本をおさえる授業、進んで学びたくなる授業、みんなで伸びる授業）

イ 生徒の実態をもとに各教科領域で目標と仮説をたて、授業研究を行う。

ウ 毎月一回授業を見直し、P D C Aサイクルの下で授業研究を行う。

エ 自己評価シートとリンクさせてO J Tを推進する。

②学びの積み上げ（小中による指導の連続性）

ア 全教職員が小中協働教科部会・協働授業を行う。

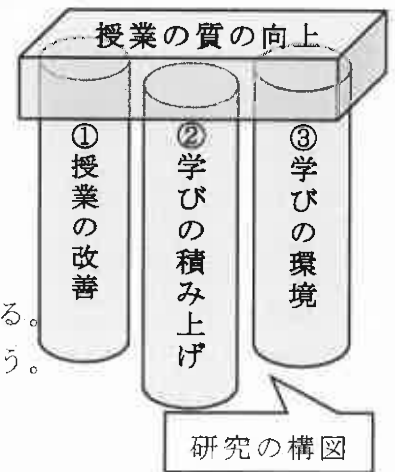
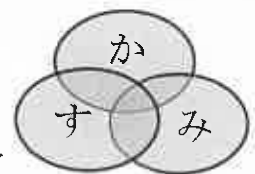
イ 補習教室（Kゼミ）による学習支援を行う。

③学びの環境づくり

ア 授業規律の指導を徹底する。

イ 学習掲示を充実させ基礎基本の定着や意欲の喚起を図る。

ウ 自主学習ノートへの指導によって家庭学習の指導を行う。

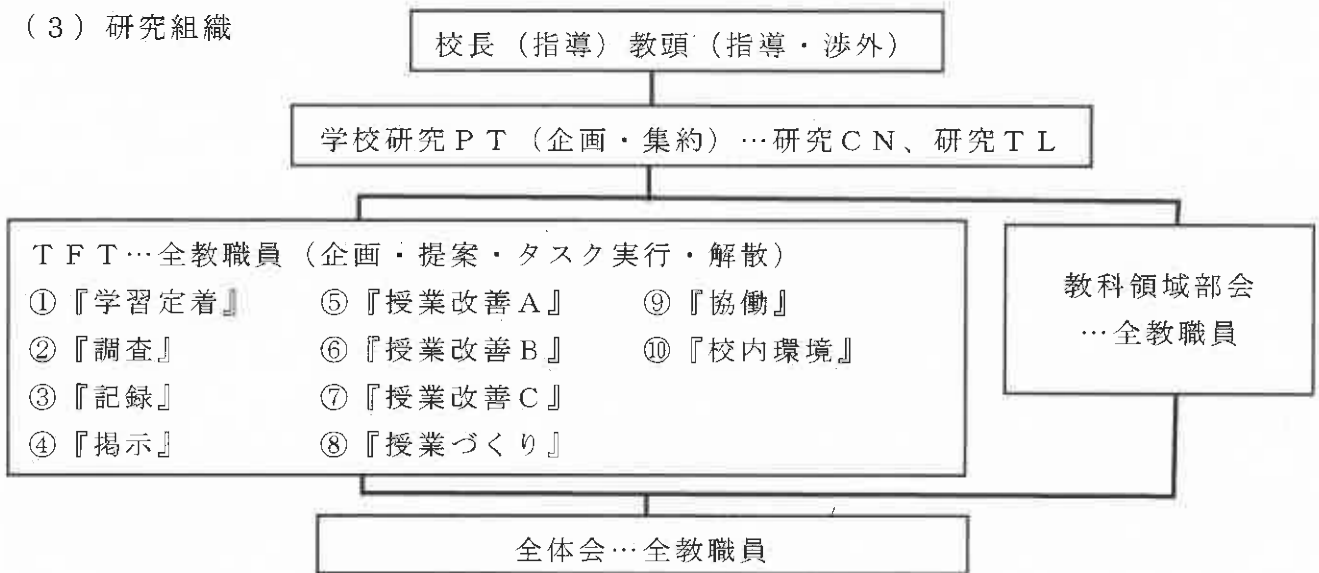


(2) 研究主題設定理由

本校は、学校評価アンケートから、学習意欲・学習習慣の定着・基礎学力の定着について課題があることがわかった。また、保護者は「授業のわかりやすさ」に課題を感じていることもわかった。

本校の全教職員は、学校教育目標「自主の誇りをもち、未来を拓く力をもった生徒の育成」の具現化に向けて、校長の掲げる「Kasumi Plan 28」の3つの基本姿勢によって総力を挙げて邁進している。そのため研究方針を、校長の学校経営方針である「生徒の思いや願いを実現するために、全教職員の創意工夫を生かして信頼と総力を結集した能動的で活力ある学校・学年・学級経営を推進する」に基づき、全員参画型のチーム編成とした。そして、「生徒・保護者・地域・教職員が誇れる大好きな学校」、「自分の子どもを通わせたいと思う学校」を目指すこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 学校研究PTが、組織、研究の方針・重点・計画を検討して立案する。
- (2) 各教科領域部会で、実態把握・研究テーマと仮説・具体策を検討し、「か・す・み ラーニング」を実行する。
- (3) PDCAサイクルによる途中評価から、成果と課題を抽出し、改善策を検討する。
- (4) 各TF Tによる検討と提案を受け、実行する。
- (5) 小中協働教科部会・授業を実施し、9年間の学びの積み重ねにおける課題を抽出する。
- (6) 本年度のまとめと次年度につなげるTF Tの編成と実行を行う。

3 実践内容

- (1) 「か・す・み ラーニング」に基づく各教科領域での目標・仮説・具体策・実践
 →10/20学校指導訪問にて指導を受ける →成果と課題の抽出 →改善案を実践

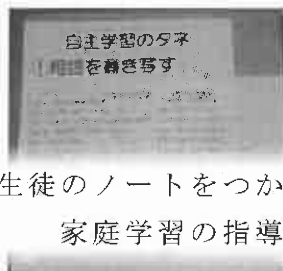
教科等	10/20授業者 (①～③は授業実施学年)	指導者
国語	①田中京子、②小川綾、③小堀義和	教育指導課主幹 早川美彦先生
社会	①関向潤、②高柳叡人、③細川健	教育指導課主幹 矢部智史先生
数学	①三浦陽介、②吉澤一彦、②花岡拓哉	教育センター主幹 馬場雅史先生
理科	①宮崎理子、②田中直哉	教育センター指導主事 墨谷悦史先生
音楽	③蛭谷真弓	教育センター主幹 浅見久江先生
特活	③佐々木孝	
美術	②赤地桜	美術館主幹 谷平絵美子先生
総合	③松元一晃	
保体	①前田収、①中村令子	教育指導課指導主事 白根彰人先生
道徳	③早川敦子	
技家	①下山寿、①本橋裕子	教育センター指導主事 高柳健二先生
英語	①野口恭宏、②大塚智子	西部教育事務所指導主事 田邊玲先生
特支	設楽美由紀、秋野真理、齊藤均、平本真理子	リベラー主幹 肥留間智子先生
		リベラー副主幹 浅見浩子先生

(2) 校内掲示の取組

「やる気を引き出す学習環境づくり」をねらいとし、①校内に写真や絵画を展示した校内美化による落ち着いた環境づくり、②生徒の目をくぎ付けにしてもっと学習したくなる教科掲示板の作成、を行った。



全教科の教科掲示板による発信



生徒のノートをつかった
家庭学習の指導



階段・通路に暗記用語



生徒が活動を振り返られる・心の居場所づくり

生徒の興味を引き出す工夫
生徒の足を止める工夫



(3) 「授業の約束」の取組

授業の充実をねらいとし、生徒に「授業の約束（みんなでやろう）」、教員に「授業の進め方（やるべし）」を立て全校で同一指導・努力を行った。

(4) 生徒の授業達成感と評価についての取組

生徒自身が学びの実感と成長の喜びを感じることをねらいとし、「か・す・み ラーニング」の各視点で授業の振り返りをし、全教職員の指導力改善に活用した。また、教科を横断して互いの授業を見直すことができるように、実施したシートをもとに全体研修で改善を行なった。

(5) 教員の授業評価についての取組

授業改善をねらいとし、毎月末に①授業の展開の工夫、②わかりやすい授業への手立て、③自己決定の場を与えるための手立て、④自己存在感を与えるための手立て、⑤共感的人間関係を育成するための手立て、の視点で教員が自らの授業を振り返った。また、経過を数値化して分析し、課題の抽出や具体的な改善への視点を明確にした。

(6) 研究授業の実施

指導力向上をねらいとし、学校指導訪問では全教員が公開授業を行うとともに、その他全19回の研究授業を実施し、積極的な研究授業を実施した。



(7) データを生かした指導力向上

各TFTの実施内容や、板書写真や指導案などを「共有データ」としてまとめ、各教員が授業研究の時に自主研修に役立てられるようにした。



道徳



教科

(8) 学習定着への取組

①補習教室“Kゼミ”

わかる喜びや具体的な学習方法の指導をねらいとし、全学年で補習教室を開いた。Cと判断される生徒には個々に声をかけて、参加意欲を引き出した。

②家庭学習への指導“自主学習ノート”

自己肯定感や学習意欲の向上をねらいとし、全学年で「家庭学習の仕方」を指導した上で実施した。良い取組のノートを掲示や学級通信で提示するなどの啓発や、自主学習努力賞の表彰などを行って意欲の喚起をおこなった。また、学級通信や保護者会を活用して保護者へも指導の協力を求めている。

(9) 小中協働教科部会・協働授業

全教職員が霞ヶ関小学校と小中協働教科部会・授業を行い、「9年間の学びの積み重ね」における課題点の抽出を行った。その実施内容を全体研修で発表し、共有し合った。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 積極的な校内研修の実施によって、教職員一人ひとりの意識が向上した。(全19回実施)
- ② 校内掲示を試験前に見に行く生徒の姿や、掲示物が話題になることが増えた。
- ③ 授業の約束については教師が共通理解を図り、同一歩調で指導ができるようになった。
- ④ 自己評価をさせたことで、生徒は達成感を感じ、教師は授業の見直しに役立てられた。
- ⑤ 教職員自身の授業評価を通して、良い授業への具体的な視点が明確になった。また、数値変化を通して、授業(指導)を厳しく自己評価する眼を持てるようになってきたことが捉えられた。

(2) 課題

①諸調査から、本校の課題は以下の点が挙げられる。

生徒	将来や夢や目標を持っている	76.8%	教師	満足いく授業ができた	48.0%
生徒	登校や学校生活が楽しみ	78.4%	教師	生徒を惹きつける工夫	56.5%
保護者	基礎学力がついている	63.8%	教師	道徳・特活の実施と工夫	58.7%
保護者	わかりやすい授業の改善	78.2%	(他… 不登校生徒数 7名)		

生徒が学習意欲を持ち、学びの喜びを感じ取るためには、生徒にとって学校が「安心できる心の居場所」であることが大前提である。そのためには、集団を構成している個々の「生きる意欲に裏づけされた自己指導能力」が欠かせない。今後は、学級活動と道徳を充実させ、生徒一人ひとりが安心して意欲的主体的に学べる学級づくりをベースにした学力向上に向けた取組と授業改善を行う。

- ② 掲示箇所を拡大し、更新の動きを継続する必要がある。また、生徒が学校に愛着や落ち着きを感じる「生徒の心の居場所」になる環境づくりを一層推進する。
- ③ 「授業の受け方8か条」の徹底指導と、「授業の進め方4か条」を軸とした授業研究が不十分である。小中協働の教科部会や、複数教科から構成される拡大教科部会などにより、「か・す・み ラーニング」を定着させる授業に改善していく。

研究主題

「志高く、共に学び合い、鍛え合い、高め合う、魅力あふれる学年・学級づくりの推進」
～他者とのかかわりを通して、自己有用感を育み、生き生きと活動する児童の育成～

川越市立武蔵野小学校

研究のポイント

- オールマイティーチャー活用に係る少人数学級の効果の検証
- 仲間と豊かにかかわり、自己有用感を高める指導の工夫
- 学校行事や体験活動をとおした豊かな心の育成

1 研究の概要

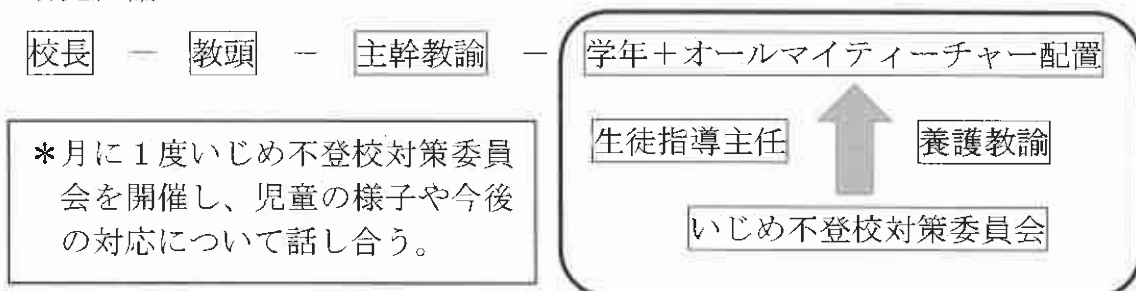
(1) 研究のねらい

少子高齢化、家族構成の小規模化、情報ネットワークの進化など、近年の児童を取り巻く環境は劇的に変化し、友達・家族・地域とのかかわりは以前に比べて薄くなってきている。そのため、人間関係の希薄さから様々なトラブルが生じている。本校では不登校児童の割合が多いことが学校課題の一つとしてあげられる。本研究をとおして、不登校児童の改善を図ること、「知・徳・体」の調和の取れた児童の育成を目指し、本研究を推進する。

(2) 研究主題設定の理由

本学年は不登校、不登校傾向の児童が他の学年よりも多く、昨年度は喧嘩やけがなど生徒指導上の問題も多かった。また、学力にも課題があり、学力テスト等では市内の平均を大きく下回る結果となった。そこで、今年度よりオールマイティーチャーの配置により第5学年において少人数学級が実現した。昨年まで3学級で40人学級だったが、4学級になり児童数も1学級30人となった。そのことを受け、少人数学級になったことで児童同士・教師と児童のかかわりをより強固なものとし、よりよい人間関係を築き、魅力あふれる学年・学級となることを目指し、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

少人数学級の実現により、落ち着いた学校生活を送ること、仲間と豊かにかかわり合うこと、学力が向上することを期待し、以下のような取組を行ってきた。また、各取組をとおして児童が魅力を感じ、安心して学校に通えるようにしていきたいと考えた。

(1) 授業における取組

- ① 体育授業では、仲間とかかわり合う場面を意図的に設定し、運動の魅力や特性を十分味わわせ、仲間と共にできた喜びを分かち合えるような授業展開を目指した。
- ② できた・伸びた喜びを感じられるように算数の授業の始めに、計算力アッププリント（20問のわり算問題）を継続して行うことで、基礎学力の向上を目指した。
- ③ 算数では習熟度別少人数指導を行い、個に応じた指導をすることで学力の向上を目指した。2学年以上の遅れがある児童がいるため、できるだけ人数を減らした。

(2) 体験的な活動における取組

- ① 総合的な学習の時間における体験的な活動の充実を図った。「人にやさしい町づくり」（福祉）の学習において、グループホームの訪問や車椅子・アイマスク体験、パラリンピック選手の講演会など様々な活動をした。
- ② 食に関する指導の一環として、地域の名人を招いて「うどん作り」を行った。地産の小麦粉を使用し、こねて、のばして、切る工程を一通り体験した。

(3) 学校・学年行事での取組

- ① 学年集会を定期的に行い、今月の重点目標の確認や生徒指導等の全体指導をすることで学年のまとまりを強めた。
- ② 学校・学年行事と併せて実行委員を決めることで、児童が主体的に行事に参加できるようにした。（林間学校実行委員・サッカー大会実行委員など）

3 実践事例

(1) 授業における取組

- ① 体育授業（ハードル走の授業実践：5年1組 長廻教諭）

武蔵野小の体育授業における目指す児童像

仲間と進んでかかわり、できた喜びを分かち合える運動好きな児童



【モデリング】

本時の目指す動きについて、できている児童を取り上げ、全体で動きのポイントやコツを共有することで、技能向上を目指した。



【ローテーション】

「見る・待つ・行う」のローテーションの徹底をすることで、役割が明確になり、教え合いが活発に行われるようになった。



【チームのかかわり】

チーム対抗戦では、チームの作戦やよいところを認め合いながら円陣を組ませ、士気を高めるとともに、チームの団結力を高めた。

(2) 体験的な活動における取組

① 総合的な学習の時間における体験的な活動

単元名「人にやさしい町づくり」(福祉)

様々な体験を通して、色々な人の立場になって考えられるようになり、よりよい地域を目指して自分たちにできることを実践しようとする心が育った。

- ・認知症サポート講座
- ・グループホームみずほ訪問(認知症利用者)
- ・車椅子体験
- ・アイマスク体験
- ・特別支援学校理解授業
- ・パラリンピック選手講演会(陸上:高桑早生選手)



② 食に関する指導「うどん作り」



地域のうどん作りの名人に生地伸ばし方や切り方を教わり、実際に体験した。



(3) 学校・学年行事での取組



【林間学校】
グループ活動を通して集団生活を学んだ。

【サッカー大会】各クラスの旗を2枚ずつ作り、両会場へ持って行き応援した。



【運動会】
今年度初挑戦のマスゲーム。全員の気持ちを合わせた。



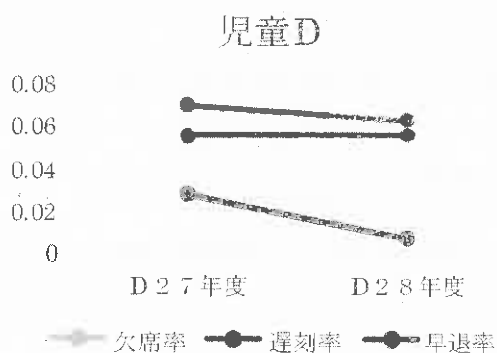
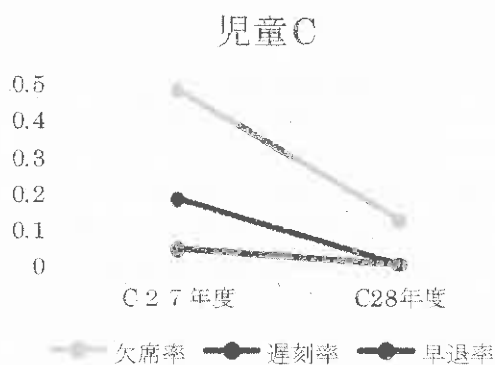
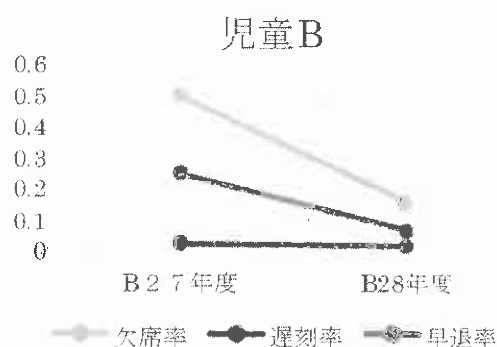
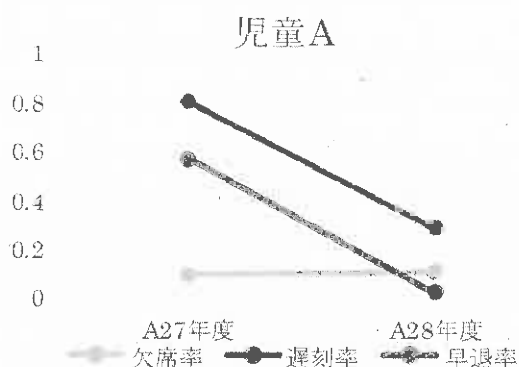
4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・4学級になったことで、学習指導、生徒指導ともに個に応じたきめ細かな指導をすることで落ち着いた生活を送ることができるようになった。
- ・学級編制の際に不登校傾向児童や課題のある児童をバランスよく編制することで、良好な人間関係が築くことができ、大幅に不登校の改善につながった。(資料1参照)

<資料 1 >

		欠席率	遅刻率	早退率
児 A	昨年度	9%	80%	57%
	今年度	10%	28%	2%
児 B	昨年度	50%	25%	2%
	今年度	15%	6%	1%
児 C	昨年度	48%	18%	4%
	今年度	12%	0%	0%
児 D	昨年度	7%	6%	3%
	今年度	6%	6%	0%



*どの児童も欠席率・遅刻率・早退率をみると大幅な減少が見られる。児童Aについては、欠席率は変わらないものの遅刻・早退が50%以上減少した。児童B・Cについては欠席率が30%以上減少した。児童Dについては数値としてはあまり変化が見られないが、教室への適応率を考えると、昨年度は別室登校をしていたため、ほぼ教室には入れなかった。今年度については9割を学級で過ごせるようになった。

(2) 課題

- ・学力の差が大きく、さらに個に応じた指導が必要である。
- ・さらに学年の取組を工夫して主体的に活動できるようにする必要がある。
- ・欠席数は大幅に減ったが、不登校傾向の児童は心が不安定であり、個に応じて継続した見守りが必要である。

研究主題

「規律ある態度を育成し、学力向上を図る教科指導と学級経営に関する研究」

川越市立古谷小学校

研究のポイント

- 担任と連携した算数少人数指導と生徒指導の実施により、学力の向上と生徒指導の充実を図る。
- 6年生90名を習熟度別4グループに分け、学力レベルに合わせた指導で学力の向上を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

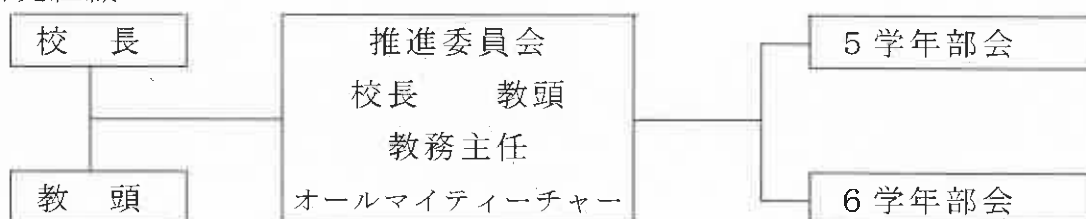
- ア 第5学年の算数科では、学級ごとのコース別指導により低学力の児童の学習規律の定着と学力向上を図る。
- イ 第6学年の算数科では、学年コース別指導を通して学力のレベルに合わせた指導で、学力向上を図る。
- ウ 第5学年、第6学年児童の担任と連携した生徒指導の充実を図る。

(2) 研究主題設定理由

現6学年は、昨年度同様30人ずつ3クラス編制で新学期をスタートさせた。しかし、どのクラスにも昨年度から生徒指導上の課題を抱える児童が多数在籍しており、落ち着いた学習時間の確保が課題であった。また、現5学年も、6学年同様生徒指導上の課題を抱える児童が多数在籍している。昨年度より、オールマイティーチャーターの活用により、学習時における規律ある態度の育成と学力向上を図った。その成果として、落ち着きのある授業が展開されるようになり、算数科の学習に意欲的に取り組む児童が増えつつあった。また、発展的な学習に自ら取り組む意欲的な児童も見られるようになってきた点も成果である。

今年度も引き続き、オールマイティーチャーター配置事業を活用し、算数科での少人数指導を推進しすることとし、事前・事後の情報交換を生かした、きめ細かな指導の実施により、学力向上を図ることとする。合わせて学校全体で組織的な生徒指導体制の意識を高め、規律ある態度のさらなる育成を図る。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 高学年児童の算数科におけるコース別学習を通して、個々の学力のレベルに合わせた指導を行い、学力向上を図る。
- (2) 第5学年、第6学年児童の担任とオールマイティーチャーが連携し合い、授業場面を通じた生徒指導の充実を図る。
- (3) 担任とオールマイティーチャーの連携により、効率的な学習準備と情報交換を通して学力向上を図る。

3 実践事例

第6学年 算数科学習指導案（ぐんぐんコース）

平成28年10月3日(月)第4校時 算数学習室 児童数男子6名 女子9名 計15名

1 単元名 拡大図と縮図 (2)縮図の利用

2 単元について

(1) 題材や教材観

本単元では、拡大図や縮図の意味や性質が分かり、既習の合同な三角形のかき方を活用して拡大図や縮図やを書くことができるようにする。また、縮尺について理解させ、縮図から実際の長さを求めることができるようにする。また、建物の高さなど直接はかれない長さも、縮図を利用して計算することにより実際の長さが求められることに気づかせる。生活日常生活の中にも縮図が用いられている場面があることに気づかせ、縮図を活用することのよさを味わわせていく。

(2) 児童観

本コースは、能力の中程度の児童で編成されている。比較的、学習意欲はあるが、課題解決に詰まると意欲が薄れやすい子たちである。自分の考えを友達に伝えたり発表したりすることに苦手意識を持っている子も多い。

(3) 指導観

本コースでは、児童一人一人にじっくり考えさせることを大切にしたい。自分なりの考えを持たせ、それを友達と交流することにより、多様な考え方に触れさせたい。また日常生活の様々な場面で拡大図・縮図の考え方が活かされていることに気づかせ、進んで生活に活かそうとする態度を育てたい。

3 単元の目標

拡大図や縮図の観察やかくことを通して、拡大図、縮図の意味や性質について理解し、図形の理解を深め、図形に対する感覚を豊かにする。

4 指導計画(10時間扱い)

- (1) 拡大図と縮図 5時間
- (2) 縮図の利用 3時間・・・本時 8 / 10

(3) まとめ

2時間

5 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】・・・拡大図や縮図を用いることよき気づき、拡大図や縮図をかいたり、測定などに用いようとしている。

【数学的な考え方】・・・合同の意味や比の考え方を基に、拡大図、縮図の意味や性質、作図の仕方について考え、表現することができる。

【技能】・・・対応する辺の長さや角の大きさを求めたり、拡大図、縮図を書いたりすることができる。

【知識・理解】・・・拡大図、縮図の意味や性質を理解する。

6 本時の学習指導 (8 / 10時)

(1) 本時の目標

・縮図をかいて、実際の長さを求めることができる。

(2) 本時の評価規準

・直接はかれない長さを求めるには、縮図を用いればよいことに気づき、用いようとしている。 【関心・意欲・態度】

・直接はかることのできない長さを、縮図をかいてもとめることができる。 【技能】

(3) 展開

学習活動	主な発問(○)と予想される児童の反応(・)	指導上の留意点(・)支援(☆)評価(□)
1 問題を知る。	<p>ともこさんが校舎から10mはなれたところに立って、校舎の上はしAを見上げているようすを表したものです。</p> <p>校舎の実際の高さは何mですか。</p> <p>○どうやって求めますか。</p> <p>・屋上にのぼる。</p> <p>・三角形をかく→縮図から。</p> <p>○絵の中に三角形をかきましょう。</p> <p>・三角形ABC</p> <p>・Aと地面を結んだ三角形</p> <p>・見上げているから目の位置が頂点になる。</p>	<p>・屋上にのぼり、実際に高さを測ることは困難であることをつかませる。</p> <p>・今までに学習した内容を使って学習することを想起させる。</p> <p>・はるかさんの目、校舎、見上げている上はしを結ぶと三角形になることをとらえさせる。</p>
2 課題をとらえる。	<p>直接はかることのできない長さを、縮図をかいて求める方法を考えよう。</p>	
3 見通しを立てる。	<p>○三角形ABCをかくのに必要な辺の長さや角の大きさは。</p> <p>・辺BC ・角B ・角C</p> <p>○直角三角形ABCの1/200の縮図のかきかたはどうしますか。</p> <p>①実際のBCの長さをはかり、</p>	<p>・課題を書かせ、本時の課題をとらえさせる。</p> <p>・合同な三角形の決定条件を想起させる。</p> <p>・教科書104ページにある、</p>

4 自力解決をする	<p>1/200の長さを求め、対応する辺をかく。</p> <p>②実際の角Bの大きさをはかって(今回は50°)かく。</p> <p>○では、直角三角形ABCの1/200の縮図をかいて校舎の実際の高さを求めましょう。</p>	<p>角Bの大きさの測り方について触れ、見上げるときの角度の測り方にふれさせる。</p> <p>・縮図が正しくかけたか確かめてから計算に入るよう指示する。</p> <p>☆作図の個別支援</p>
5 発表をする。	<p>縮図上で辺ACの長さは約6cm</p> $6 \times 200 = 1200$ $1200 \text{ cm} = 12\text{m}$ $12 + 1.4 = 13.4$ <p style="text-align: center;">答え約13.4m</p>	<p>☆ひらめきコーナーの活用</p> <p>・発表カードを活用して発表させる。</p>
6 学習のまとめをする。	<p>直角三角形ABCの、辺BCの長さや角Bの大きさがわかっているならば、縮図をかいて辺ACの実際の長さを求めることができる。</p>	
7 次時の予告を聞く。	<p>○次回は拡大図と縮図のまとめをします。</p>	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- * 具体的な指導計画をオールマイティーチャーが作成し、それを担任が活用することで、それぞれが学期末までの見通しを持って指導できるようになった。また、常に進度を意識し歩調を揃えて学習できるようになった。
- * テストの採点や評価等をオールマイティーチャーが主になって行うことにより、学級担任を支援する体制ができ、学級担任は学級経営により大きな力を注ぐことができた。
- * 児童の学習状況について、授業後や放課後、オールマイティーチャーと担任とで情報交換を行った。情報交換で出た情報を次時の授業時に生かし、個々の児童に応じた指導を心がけながら学習指導することができた。
- * 授業規律が確立し、落ち着いて学習する態度が定着しつつある。今後も学校全体で組織的に生徒指導体制を整え、授業場面を通じた積極的な生徒指導を継続していくことがさらなる学力向上につながると言える。

(2) 課題

- * 多忙な校務をぬって、オールマイティーチャーと担任とで情報交換を行う時間の安定的確保が課題となる。

「アクティブ・ラーニングを視野に入れた授業改善」

川越市立寺尾小学校

研究のポイント

- 思考ツールやICTを効果的に活用することで、アクティブ・ラーニングの実現を図る。
- 思考の可視化により、一人一人が主体的に学習に取り組めるようにする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の児童は、穏やかで与えられたことはきちんとできるが、自尊感情が低く、苦手と思ったことはあきらめてしまう傾向にある。昨年度1年間アクティブ・ラーニングに取り組んできて自分の考えをしっかりとって発表したり、苦手な児童も進んで発言したりするようになってきた。また、グループでの話し合いをもつことで、意見の交流があり、考えが広がったり、深まったりしてきている。

このような背景の中、アクティブ・ラーニングを視野に入れた授業改善を推進することで、主体的・協働的に学ぶ児童の育成を目指し、本研究を推進する。

(2) 研究主題設定理由

教育で大切にしていかななくてはならないことの一つとして、「子どもの能力を引き出す」ことがある。能力を引き出すためには、学ぶ意欲を高めるとともに、子ども同士が積極的に話し合い、協働的に学ぶ機会を充実させることが必要である。子どもの能力を引き出すために、一人一人が主体的、協働的に学習に取り組むことを主眼におき、授業改善に取り組んでいく。授業改善として、「アクティブ・ラーニング」を視野に入れた研究を推進することは価値あることであると考えます。

(3) 研究組織



【専門部】 A 思考ツール研究部 B ICT活用研究部

【活動内容】

- ① 授業で使える場面を洗い出す。
- ② ①の実践例を紹介する。
- ③ それぞれのツールにおける系統性を考え、表にまとめる。
- ④ 活用や学習の手引きを作成する。

2 研究の内容

1年次の研究を踏まえ、思考の可視化、ICTの活用、小黒板・ホワイトボードの活用、の3点に絞り、研究を推進する。

① 思考を可視化することにより、課題を見出したり、課題を整理したりできるようにする。

人が何を考えているかは、目に見えない。しかし、それを可視化することにより、ほかと考えを共有することが可能になる。

その際、共通点や相違点を明らかにしたり、可視化された思考を分類したりすることにより課題を見出すとともに、一人一人の見方や考え方を深めることが可能になり、主体的・協働的な学習が実現する。

② ICTを活用することにより、効果的な振り返りができるようにする。

タブレットPCなどを活用することにより、写真やビデオを見ながらの話し合いがしやすくなる。ICTの活用により、これまで不可能だったことが可能になる。

タブレットPCなどを媒介にして話し合うことにより、効果的に振り返ることが可能になり、主体的・協働的な学習が実現する。

③ 小黒板やホワイトボードなどを活用することにより、グループで考えを共有できるようにする。

授業中、グループで話し合う場面がある。話し合った内容は、各自がメモしたりワークシートに書き込んだりして残し、その後の学習に活用する。

一方で、グループで共有する学習の足跡を残し、振り返ることも必要である。その際、小黒板やホワイトボードをグループごとに用意し活用を工夫することにより、主体的・協働的な学習が実現する。

3 実践事例

「ICTを活用し、課題解決を図る協働的な授業展開の工夫」

理科 第3学年「電気で明かりをつけよう」

(1) 実践の概要

本単元では身の回りで使われている色々な明かりに興味をもち、豆電球、乾電池、導線をつなぐ活動を通して、豆電球に明かりがついたつなぎ方と、つかないつなぎ方を比較しながら調べていく。その結果「回路」ができると電気が通り明かりがつくことを捉えることができるようにする。児童が、より視覚的にわかりやすいように情報機器を用いて授業を実践した。また、タブレット端末を教師が意図的に活用することで話し合いの活発化を図った。

そこで、以下の3点の視点とその手立てを考え、実践した。

視点1 思考を可視化することにより、課題を見出したり、課題を整理したりできるようにする。

- ・分析表を用いて、それぞれの情報や考えを整理、分析し、全体で共有することで、単元の見通しを持つ。(手立て①)
- ・実物KJ法を用いて、児童が調べた電気を通すもの、通さないものをグループで話し合いながら分類する。(手立て②)

視点2 ICTを活用することにより、効果的な振り返りをできるようにする。

- ・ iPadを用いて、電気がつく様子を静止画や、動画で記録しておく事で、イメージ図を書いた後、振り返ることができるようにする。(手立て③)

視点3 小黒板やホワイトボードなどを活用することにより、グループで考えを共有できるようにする。

- ・ 明かりをつける方法を、ホワイトボードにイメージ図を書いて説明し、全体で共有する。(手立て④)

(2) 単元の指導計画

次	時	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	評価規準
第一 次	1	○身の回りで電気の明かりが使われている場面 を思い出したり、豆電球に明かりがつくもの に出会ったりし、豆電球に明かりがつく懐中電 灯等を観察する。 ・身の回りには電気の明かりがたくさん使わ れている。 ・電気の明かりをつけるためには電池が必要 なのではないだろうか。 ○観察から、気づいたこと・考えたこと・不 思議に思ったことを視点ごとに分類、整理す る。 (手立て①) ・どうして、豆電球に明かりがついたり消え たりするのだろう。 ・豆電球に明かりをつけるためにはどうした らいいのだろう。	【関・意】身の回りの電気を利用した物に興味・関心をもち、 進んで調べようとしている。
	2 ・ 3 4 【本 時】	○豆電球（ソケット有り）に明かりがつくのは、 どんなつなぎ方のときだろうか。(手立て③ ④) ・乾電池の色がついている部分に導線をつけ るとつかない。 ・全体が大きな輪のようになる時に明かりが つく。 ・プラス極とマイナス極につけるといいよ。 ○豆電球（ソケット無し）に明かりがつくのは、 どんなつなぎ方のときだろうか。(手立て③④) ・導線1本でも、明かりがつけられたよ。 ・豆電球のねじ山の部分は、どこにつけても 明かりがつく。	【思・表】豆電球が点灯するときとしないときを比較して、予 想や仮説をもち、表現している。 【技能】乾電池と豆電球をつか って回路を作っている。 【知・理】電気を通すつなぎ方 と通さないつなぎ方があるこ とを理解している。

以下略

(3) 本時の学習指導 (本時 4/7時)

① 目標

- 【思・表】豆電球が点灯するときとしないときを比較して、予想や仮説をもち、イメージ図に表現している。
- 【技能】乾電池と豆電球をつかって回路を作ることができる。
- 【知・理】電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があることを理解している。

② 指導の実際

(ア) 視点1 (手立て②) KJ法による学び合い

- ・どんなものが電気を通し、どんなものが電気を通さないのかをグループで分類・整理する。グループで話し合ったり、交流したりすることで、協同的に学び合うことができる。
- ・実物を分けるKJ法をすることで、言語化するよりも、一目でどのように分類されているのかがわかり、課題に迫りやすくなった。

(イ) 視点2 (手立て①) ICTの活用

- ・ソケットを使わずに導線と豆電球だけで電気をつける方法を考える時に、豆電球は、小さな部品なので、言葉だけで説明するのではなく、実物投影機で拡大した。

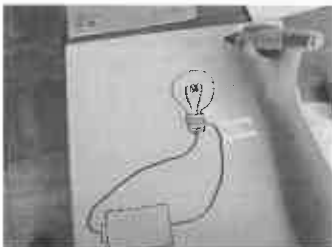


授業中、実験方法を映し出しておくことで、児童がいつでも振り返りができるようにした。

- ・どのようにすると電気がつくのかをワークシートに記入した後、教師がiPadに撮影しておき、授業のまとめに使用することで、実際の様子を再確認することができ、自分がやっていない方法も容易に行うことができた。

(ウ) 視点3 (手立て④) ホワイトボードの活用

- ・グループで、電気がつくつなぎ方をホワイトボードに記入することで、自然と話し合いが生まれた。何度も修正ができるので、意欲的に書き込むことができた。今回は、時間が無かったので、豆電球と電池の図をあらかじめ用意しておいた。



児童の発表を聞きながら、電気がつく、つかないを容易に分類することができる。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・iPadを教師が持ち、意図的に撮影することで、授業のポイントとなる部分を落とすことなくまとめることができた。

(2) 課題

- ・作業する時間を十分に確保することができず、グループでの協同的な場面で自分の作業から離れられない児童がいた。
- ・児童にiPadを持たせて何を撮影させるのか、また、教師が撮影したものをどう活用するのかを見極めた上で活用する必要がある。

研究主題

「コミュニケーション能力を高め、よりよい人間関係を築く子供の育成」 ～道徳の指導法の研究～

川越市立山田小学校

研究のポイント

- 教師自身の指導力・指導技術の向上
- ユニバーサルデザインを取り入れ、全ての児童にわかりやすい授業の展開
- 「考え、議論する道徳」という道徳教育の今日的なテーマの積極的な実践
- 内容項目B「主として人との関わりに関すること」に絞った研究の推進

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

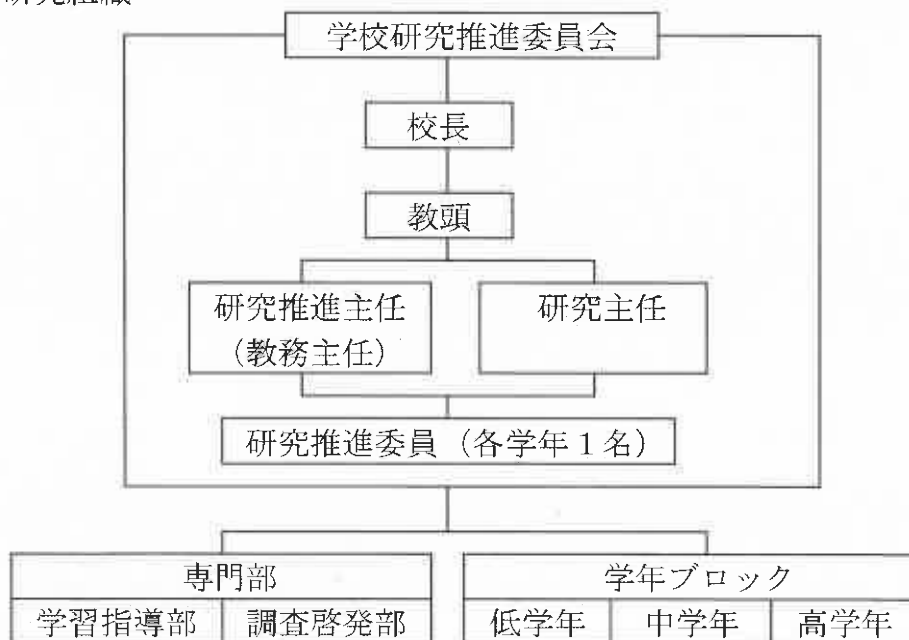
教師の指導力・指導技術の向上を目指し、授業を通じてどの子にもコミュニケーション能力を身に付けさせたい。さらに、ユニバーサルデザインを取り入れ、全ての児童にわかりやすい授業を展開し、よりよい人間関係の構築、円滑な学校生活が送れるようにさせたいということが研究のねらいである。また、「考え、議論する道徳」という道徳教育の今日的なテーマについても、積極的に実践していきたい。なお、研究主題の趣旨を鑑み、内容項目B「主として人との関わりに関すること」に絞って研究を進めていくことにした。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は全体的に穏やかで優しく、男女の仲もよい。その一方で、入学以前の幼稚園・保育園等の段階から互いのことを知っている児童が多いため、集団の中における人間関係が固定化されやすく、コミュニケーション能力を伸ばし、自分自身の課題に向き合って人間関係を改善していこうとする意欲に欠ける傾向が見られる。さらに、発達障害の可能性のある児童もトラブルを生じやすい。

そこで、児童のコミュニケーション能力が育ち、言葉で自分の気持ちや考えを伝え合うことができるようになれば日常の様々なトラブルは回避できるようになるであろうということが研究主題設定の理由である。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 仮説と手立て

- ① <仮説1> 思いや考えを伝え合う言語活動を充実させれば、コミュニケーション能力が高まるであろう。

手立て1 話し合いを活性化するための効果的な形態や方法の工夫

手立て2 意識の変容を追うことができるワークシートの工夫と活用

手立て3 自分の心情を表すことができる教材教具の工夫

- ② <仮説2> 授業の展開を工夫し、道徳的価値の自覚を深めれば、よりよい人間関係を築けるであろう。

手立て1 授業の構造化（パターン化）

手立て2 授業の視覚化（ビジュアル化）

手立て3 授業の焦点化

手立て4 共有化（シェアリング）

(2) 専門部の取組

① 学習指導部

ア 仮説1について 言語活動の充実

「自由交流」「ペア・グループでの話し合い」「シンプルなワークシート」

「2色の学年帽子」「名札の活用」「表情カードの活用」

イ 仮説2について 授業展開の工夫

「導入の工夫 アンケートの活用 資料提示の工夫」

「展開の工夫 主発問と補助発問の用意 本質的な問いへの追込み」

「終末の工夫 説話の用意 感想の記入 発表」

「板書や具体物の充実」「資料分析表の作成と活用」「行動の二項対立」「切り返しの発問から本質的な問いへ」

「役割演技」「アンケートの振り返り」

② 調査啓発部

ア 道徳の授業についての教師用アンケート実施

イ 児童アンケートの実施

3 実践事例

各学年とも全学級の研究授業実践を進め、ブロック別公開、全体公開の研究授業を進めた。ここでは紙面の関係で第6学年の実践事例を示す。詳しくは、『平成28年度学校研究 川越市立山田小学校』を参照。

(1) 第6学年○組 道徳学習指導案

- ① 主題名 友達と理解し合う B-(10) 友情・信頼

資料名 ばかじゃん! (出典 道徳6年 明日をめざして 東京書籍)

- ② 主題設定の理由 (略)

- ③ ねらい 互いに理解し、信頼し合って、真の友情を育てていこうとする心情を育てる。

④ 他の教育活動等との関連（略）

⑤ 指導過程

段階	学習活動	児童の反応	・留意点 ■支援 ☆評価
導入	1 友達がいてよかったですと思ったときの経験を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・保健室に連れて行ってくれた。 ・旗づくりを手伝ってくれた。 ・遊びに誘ってくれた。 ・バスケを教えてくれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とのトラブルのを中心に描かれた資料なので、導入は「友達のよさ」について振り返り、温かい気持ちで考えることができるようにする。
展開	<p>2 登場人物を知る。</p> <p>3 資料の範読を聞き、場面毎に整理しながら以下の項目を話し合う。</p> <p>(1) 恵理菜が「ばかじゃん！」と言われた時の気持ちを考える。</p> <p>(2) 自分だったら、かおりに声をかけたでしょうか。それとも、かけなかったかでしょうか。理由も考えましょう。</p>	<p>○登場人物を確認する。</p> <p>仮説2 手立て② 場面絵の効果的な提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私のこと嫌いなのかな。 ・なんでばかなんだろ。 ・きのちゃんは、いやな子なのかもしれない。 ・声をかけた。 ・声をかけなかった。 ・前は仲よかったのに、なぜ急に意地悪をするようになったのかな。 <p>仮説1 手立て② 自分の考えを明確にしやすいワークシート</p> <p>仮説1 手立て① 自由交流</p> <p>仮説1 手立て③ 帽子で相手の意見を判断 ネームプレートで意思表示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を提示しながら、登場人物を捉えさせる。 ■掲示物で視覚的にわかるようにする。 ・人物の絵を提示し、場面毎の気持ちを確かめながら整理していく。 ・主人公の立場になって簡潔に考えさせる。 ・声をかけたか、かけなかったかを選び、ワークシートに理由を記入する。立場を明確にした上で、自由に席を立ち、交流する。できるだけ多くの意見が聞けるようにする。ワークシートを見せ合いながら交流してもよい。 ■書く活動を通して、自分の考えを明確にする。 ■帽子を活用し、自分の立場を視覚的にわかるようにす



			<p>る。また、ネームプレートを活用し、黒板にも示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流後に意見が変わってもよい。全体で確認する。 ・交流後、帽子とネームプレートをはずす。
	(中略)		
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p> <p>5 自分自身を振り返る。</p>	<p>仮説2 手立て④ 道徳的価値を深める説話を用意する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・価値に関わる体験談により、余韻をもって授業を終えることができるようにする。 ・自分の意見や感想をまとめてワークシートに記入させる。 <p>☆自分の友達観について、振り返って考えることができたか。</p> <p>【発言・ワークシート】</p>

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①自由交流の経験を積んだことで、短い時間で多くの意見を知ることができた。さらに児童が主体的に友達と関わることができ、児童のコミュニケーション能力の向上、よりよい人間関係を築くことに繋げることができた。
- ②黒板にネームプレートを貼ったり、帽子を被ったりしたことで、児童の意見の変容がわかり、指導に生かすことができた。
- ③各学年とも学級毎の研究授業を通して表出した課題を練り上げて最終学級の研究授業に生かしたため、授業力の向上に繋がった。
- ④教師の体験に基づく説話を行ったことで、より切実感のある終末にすることができた。
- ⑤授業の構造化、視覚化を進めたことで、「考え、議論する道徳」という道徳教育の今日的なテーマの指導方法の理解が進んだ。

(2) 課題

- ①自由交流で意見を伝え合った後の切り返しの言葉、中心発問に迫るための補助発問や児童の考えを深める切り返しの発問を工夫する必要がある。
- ②道徳の授業以外の学習や教育活動で、交流の場をさらに日常的に設定する必要がある。
- ③学習内容や身に付けさせたい価値を明確にした授業の組み立てを今後も継続して研究していく必要がある。

研究主題

「生徒一人一人に対するきめ細かな指導の育成」 ～オールマイティーチャーを活用した指導の実践～

川越市立初雁中学校

研究のポイント

- 不登校生徒や課題を抱えた生徒、配慮を要する生徒に対する学力保障をとおして、該当生徒との間に信頼関係を再構築し、該当生徒のよりよい成長を促す。
- 英語の学力向上に向け、TTを含む少人数指導を実施し、きめ細かな指導の徹底に努める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「学習」に対する躓きから授業に積極的に参加できず、支援を必要とする生徒はどの教科においても存在する。特に積み重ねの教科は、基礎の段階で躓くと理解するのが困難である。学習の不適応から生徒指導の問題に派生することもあるのが現状である。今回、本校では昨年度からの課題である生徒指導面及び学習面において解決すべく、オールマイティーチャー配置事業を生かした生徒指導の再構築と学力向上に向けた取組を実践してきた。本校の学校教育目標である「学びあい豊かな心で未来をひらく生徒」の具現化を図るべく、本研究を推進する。

(2) 研究主題設定理由

中学生にとって、毎日の授業が「わかる」ということは大きな意味をなす。日々の授業の積み重ねが学校生活を形成していく。生徒の学習に対する成就感、達成感は落ち着いた学校生活に欠かせない。また、不登校生徒や課題を抱えた生徒、配慮を要する生徒に対する学力保障をとおして、該当生徒との間に教師との信頼関係を再構築し、生徒の成就感を生み出すとともに該当生徒のよりよい成長を促していく。

今年度は、オールマイティーチャー配置事業を生かし、入学時に初めて学習する英語に焦点を当て、初歩の躓きをなくし、生徒の学力向上に向け、TTを含む少人数指導を実施し、きめ細かな指導の徹底に努めていく。

(3) 研究組織

校長 — 教頭 — 主幹教諭（校内研修主任） —

英語科

2 研究の内容

(1) 研究の流れ

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
4月1日	・企画会においてオールマイティーチャーの活用方針策定	校長室	企画委員 全職員
4月2日	・職員会議にて周知 ・教科部会実施① 指標策定	会議室 教育相談室	英語科 英語科
5月	・英語部会実施② 第1回アンケート実施、集計	教育相談室	全教員
6月	・授業研究(1)	教室	英語科
7月 ～8月	・英語部会実施③ 1学期振り返り及び 2学期に向けて ・英語部会実施④ 各研修報告	教育相談室 教育相談室	英語科 英語科
9月	・授業研究(2)	教室	全職員
10月	・英語部会⑤ 授業研究の比較検討	教育相談室	英語科
11月	・英語部会実施⑥ 2学期振り返り及び3	教育相談室	英語科
12月 ～1月	学期に向けて 第2回アンケート実施		英語科
1月 ～2月	集計 ・成果と課題についてまとめ、報告	教育相談室	英語科

(2) 指導形態の工夫等

○パターン A

オールマイティーチャーが不登校生徒や課題を抱えた生徒、配慮を要する生徒に対し、相談室等を利用した学習支援を行い、該当生徒との間に信頼関係を再構築し、該当生徒のよりよい成長を促す。

○パターン B

オールマイティーチャーがJTEやAETとともに、TTを含む少人数指導を実施し、きめ細かな指導の徹底に努める。英語の授業においては、オールマイティーチャーやAETを交えたコミュニケーション活動や、全体の中で個に応じた指導を行う。

3 実践事例



(1) 内容理解

単元の中には会話文・電話のやり取り等実際の生活場面を想定した内容が多く含まれている。オールマイティーチャーやJTE、AETが各ペアに対し個々に読みの指導に当たることができた。発表の場面では、実際手元に教科書の本文がなくてもジェスチャーを入れながら発表することができている。

(2) 単語の習得

これまで学習した内容を確認するワークシートを利用し、既習語の習得を目指す。オールマイティーチャーやJTE、AETが個々に綴りに課題を抱えている生徒へ直接指導に当たることができた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 不登校生徒や課題を抱えた生徒、相談室登校の生徒への個に応じた指導を深めることができた。入試を控えた3年生にとって、学習はとても大切な場である。英語は、初歩からの躓きからなかなか定着を図ることができない教科の1つである。オールマイティーチャーが相談室等で該当生徒へ個に応じた指導を行うことによって、英語の基礎を学ぶ機会を得ることができ、生徒は自信を持つことができるようになった。該当生徒はほぼ毎日学校に登校することができるようになり、学習に取り組むことができた。教諭と生徒との信頼関係を再構築することにつながり、該当生徒のよりよい成長を促すことができた。
- 学力向上の視点から、TTを含む少人数指導を実施し、きめ細かな指導の徹底に努めることができた。英語の授業においては、オールマイティーチャーやAETを交えたコミュニケーション活動や、全体の中で個に応じた指導の充実を図ることができた。
(次項、写真参照)

研究主題

「国語科における表現力を高める言語活動の工夫」 ～オールマイティーチャーを活用した学力向上の取組～

川越市立福原中学校

研究のポイント

- 単元の内容に合わせた言語活動を取り入れることによる表現力の向上。
- 国語科のオールマイティーチャーを活用した学力向上の取組。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は明るく素直な生徒が多く、国語科の授業においても積極的に取り組んでいる。しかし、答えが一つとわかっている問いには挙手できる生徒が多いが、「自分の考えを、根拠を明確にして述べよ。」という問いになると、とたんに挙手をする生徒が激減するという課題が見受けられる。そこで、オールマイティーチャーを活用し、国語科における表現力を高める言語活動の工夫について研究することとした。

(2) 研究主題設定理由

2学年の国語科では、話し合い活動になると、生徒が自分の考えを組み立てることができず、自分の意見に対して根拠を説明できない生徒が多かった。それぞれの単元ごとに言語活動の内容を工夫することによって、生徒の表現力を高め、根拠を持って自分の意見を発表できる生徒を育成することを研究の主題に設定した。

(3) 研究組織

研究推進委員

校長—教頭— 教務主任 国語科主任 オールマイティーチャー

2 研究の内容

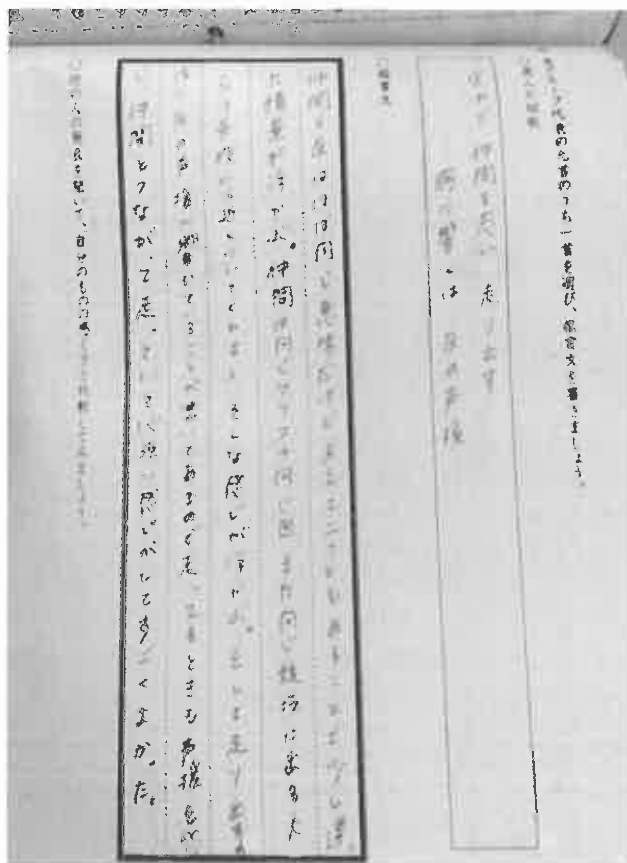
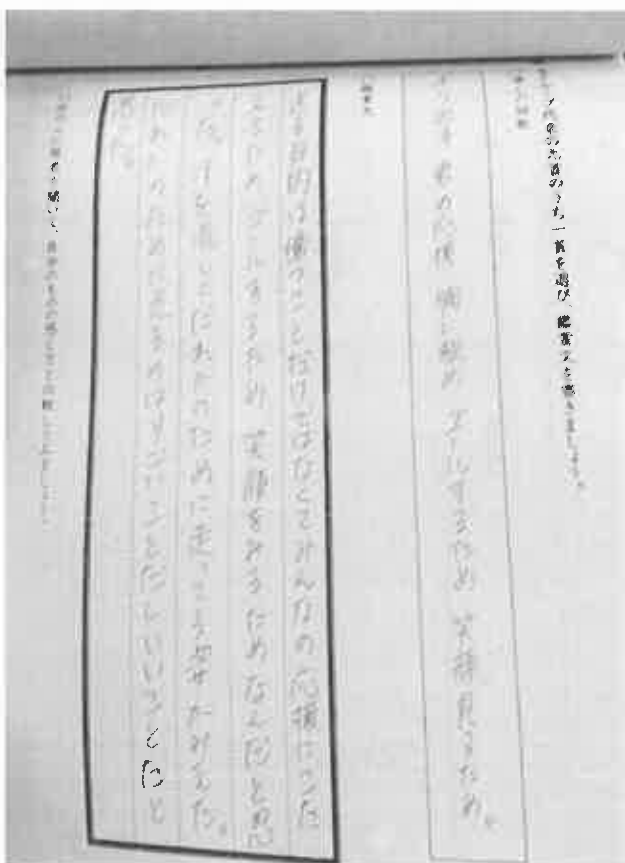
期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
5月	研究計画検討委員会 校内研修会（研修計画の共通理解）	校長室 会議室	推進委員 全教員
6月	指導案検討委員会	会議室	推進委員
7月	第1回授業研究会（第2学年国語科）	2年1組	全教員
10月	指導案検討委員会	会議室	推進委員
11月	第2回授業研究会（第2学年国語科）	2年1組	全教員
12月	効果の検証（第2学年国語科）		
1月	研究のまとめ		

3 実践事例

(1) 表現力の向上をねらいとした授業実践

『新しい短歌のために』（光村図書 国語2）の言語活動として、生徒自身に短歌を作らせ、お互いの短歌をよみ合い、表現の工夫について話し合う授業を行った。

俵万智の「サラダ記念日」の短歌への返歌や、「体育祭」をテーマにした短歌をつくらせた。その後、①作者の思いが伝わるか。②言葉、表現は工夫されているか。の観点でお互いの短歌を鑑賞し合い、良いところを互いに見つける活動を実施した。少人数のグループで短歌を発表し合い、グループ代表の短歌を選出、クラス全体で鑑賞をし、グループ代表の短歌のうちの1首について鑑賞文を書かせた。



(指導案)

	学習活動・内容	指導上の留意点	評価規準
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の目標、活動内容を確認する。 ・グループ内での鑑賞、発表をし、代表の短歌を決定する。 ・代表の短歌から1首を選び、鑑賞文を書く。 ・鑑賞文を発表しあい、他者の感じ方に触れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○鑑賞のポイントを確認。 ・作者の思いが伝わるか。 ・言葉、表現は工夫されているか。 ○良いところを互いに見つける活動であることを確認。 	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の活動内容を、興味を持って聞いている。

展 開 ①	○グループ内で短歌を発表する。 ・工夫したところを意識して読む。 ・鑑賞しあい、グループ代表の短歌を選ぶ。 ・鑑賞のポイントを意識し、良いと感じたところを探し、発表者に伝える。	○工夫した点や、苦労した点を積極的に交流。 ○良いと感じた点、おもしろいと感じた点を積極的に交流。	○積極的に工夫した点、苦労した点を伝えている。 ○発表者の話をよく聞いて、メモを取ったりしている。
展 開 ②	○グループ代表の短歌の中から1首を選び、鑑賞文を書く。 ○選んだ短歌の良かったところを発表。 ○その短歌を詠んだ生徒に感想を発表させ、詠み手の思い、表現の意図を考えさせる。	○選んだ短歌の良かった点 おもしろいと感じた点。 ○自分の感じ方と比べるように指示。	○選んだ短歌の良かった点、おもしろいと感じた点を積極的に書き出している。
ま と め	○本時のまとめ ・様々な表現や意見に触れ、言葉について、どのような新しい発見や考えの深まりがあったかをまとめ、発表する。	○自己の活動の振り返り。 ・短歌を詠む活動を通して感じたこと、感想。	○まとまった感想を書いている。 ○短歌を詠む活動を通し、言葉や表現の奥深さに気づいている。

(2) 学力向上をねらいとした取り組み

○定期的な漢字テストの実施

漢字の定着のために、授業時間内の最初に漢字練習の時間を設け、定期的に読み書きの漢字テスト(20問)を実施した。また、テストで間違えた漢字の直しについても、必ず提出させた。

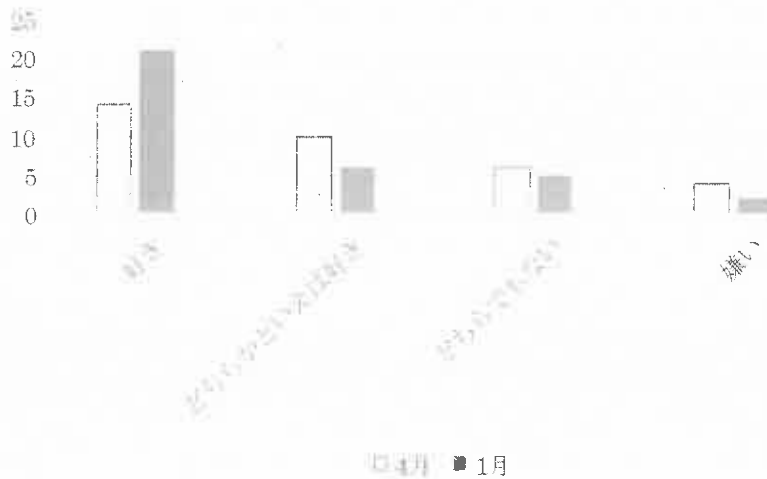
4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

○表現力の向上

実践事例として挙げた授業の際に生徒が書いた感想の中に、「ひとつの言葉を手がかりに、その短歌を詠んだ人の気持ちや状況が想像できて楽しかった。また、グループでの話し合いでは、自分とは違う考えをいろいろと聞くことができ、参考になった。」というものがあつた。「思考力・判断力・表現力」を高める学習活動を取り入れていくなかで、生徒の学習意欲の高まりや思考の高まりを感じられるようになってきた。

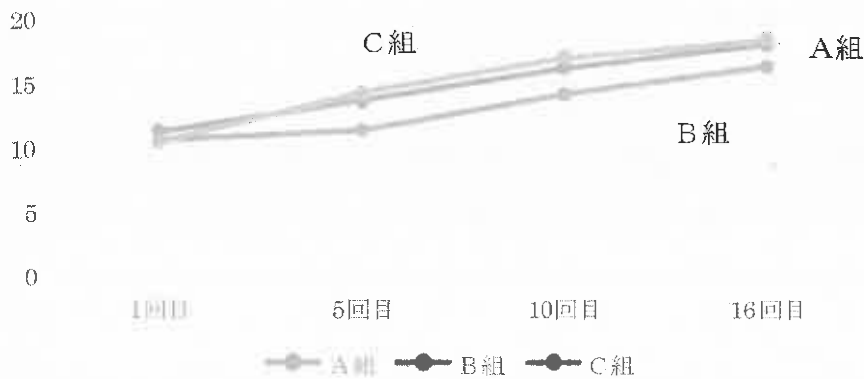
話し合いが好きである



○学力向上

担当した3クラスにおける、生徒のテスト平均点の推移が以下に示す結果となった。

漢字テスト平均点の推移



上記のグラフからわかるように、どのクラスの平均点も、回を重ねるごとに上昇している。漢字の学習において、継続的に学習を続けられるような取り組みを実施したことにより、漢字学習の習慣が定着したという成果が得られる結果となった。

(2) 今後の課題

話し合いや意見を伝えあうことに対する意欲は高まってきているが、話し合いの技能についての指導をより明確にし、段階的に指導をしていく必要がある。特定の生徒だけではなく、誰が司会をしても話し合いができるような指導の工夫を行っていききたい。

また、「書く」ことを苦手と感じる生徒はまだ多い。「書くこと」の領域における取り組みをさらに充実させていくことも今後の課題のひとつといえる。新聞の社説の要約等、継続的に生徒の書く力を高める取組の実施についても、工夫・改善を行っていききたい。

「関連教科・領域を通じたオリンピック教育の推進」

川越市立霞ヶ関東中学校

研究のポイント

- 2020年の東京オリンピックにおける本市の取組を踏まえ、本校生徒に「オリンピック」への興味・関心を高める。
- 「オリンピック教室」を実施し、オリンピック出場経験者の講義や体験型学習を通して、「エクセレンス」や「フェアプレー」「他者への敬意」といったオリンピックの価値及びオリンピック精神を学習する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

中学校学習指導要領「保健体育 体育分野 H 体育理論」において、「オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること」とオリンピックの意義が明示されている。これを受けて、日本オリンピック委員会（JOC）は「ハローオリピズム事業」のひとつとして「オリンピック教室」を実施している。

川越市は、2020年の東京オリンピックにおいて、会場となることが確定している。身近な地域で世界の祭典が開催されることは、本校生徒一人一人の記憶に深く刻まれる「貴重な経験」となるに違いない。そこで、オリンピック出場経験者の講義や体験型学習を通して、「エクセレンス」や「フェアプレー」「他者への敬意」といったオリンピックの価値及びオリンピック精神を学習する「オリンピック教室」を実施した。

本校の生徒が「オリンピック教室」の学習を通して、スポーツ基本法の前文に記されている「スポーツは、世界共通の人類の文化であり、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすもの」であることを理解するとともに、実践的な行動力を身に付けることを研究のねらいとした。

(2) 研究主題設定理由

4年後に開催される東京オリンピックにおいて、本市がオリンピック会場になることは、歴史の1ページを身近に感じることができる重要な機会である。そこで、本校の第1学年を対象にした社会科の授業（地理的分野におけるオリンピック開催国の調査）や、全学年を対象にした保健体育の授業（陸上競技や水泳における基本的知識の習得）等で、オリンピックに関連した学習を展開した。また、9月に開催された「オリ

ピック教室」での学習を踏まえ、他者を尊重しこれと協同する精神や、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を育む一助とするために本研究の主題を設定した。

(3) 研究組織

校長 — 教頭 — 教務主任・研究主任
 教科主任及び教科担当（社会科・保健体育）
 生徒会担当
 第2学年職員
 上記を除く教職員

2 研究の内容

期日	事業内容	場所	対象
5月	校内組織の結成と計画検討	校長室	関係職員
6月	社会：地理的分野（管理職による授業参観） 過去のオリンピック開催国の調査を通して、参加国に対する理解を深める。	教室	1学年
7月	保健体育（学校指導訪問とリンク） 陸上競技や水泳に係る基本的知識を確認する。	教室等	全学年
8月	校内研修 進捗状況と今後の計画を再確認する。	会議室	全職員
9月	オリンピック教室の開催 ※下記の「3 実践事例」を参照	体育館 各教室	2学年
2月	研究のまとめ 成果と課題の確認および来年度の検討	校長室	関係職員

3 実践事例（上記の研究内容から「オリンピック教室」のみ掲載）

日 時 平成28年9月20日（火）

1組：第1～2校時 3組：第3～4校時 2組：第5～6校時

対 象 第2学年全学級

場 所 運動の時間（体育館） 座学の時間（各教室）

講 師 石野枝里子先生、荻原健司先生

オリンピック教室を開催するにあたり、JOCオリンピックムーブメント事務局および川越市役所総合政策部オリンピック大会室から御協力をいただき、当日の運営や事前準備など円滑に実施することができた。

当日は2学年の全学級が、学級毎にオリンピック出場経験者（スピードスケート 石野枝里子先生、スキー・ノルディック複合 荻原健司先生）か

ら体験活動と講義を受けた。

体験活動（運動の時間）では、講師の先生から専門競技の技術指導ではなく、運動が苦手な生徒も参加できるように工夫された活動が展開された。具体的には、体育館で1校時目に1組の生徒が、石野先生と一緒に「8の字跳び」や「大縄とび」を行った。3校時目には3組の生徒が、5校時目には2組の生徒が、荻野先生と一緒に「そりリレー」を行った。

講義では、国際オリンピック委員会（I O C）が推進する「オリンピックの価値」等を、講師の先生が御自身の経験を踏まえて、わかりやすく説明していた。具体的には、各教室で実物資料や画像、パネルなどを効果的に活用して、オリンピックの歴史や価値について学習を展開した。

授業の流れは以下の通りである。

【運動の時間（1時間）】

- (1) 講師の自己紹介
- (2) 本授業の目的、ねらいの確認
- (3) 準備運動
- (4) 石野先生：チーム対抗8の字跳び + 学級全員での大縄跳び
荻原先生：チーム対抗そりリレー
- (5) 本授業の振り返り

【座学の時間（1時間）】

- (1) 本授業の目的、ねらいの確認
- (2) 石野先生：「オリンピックの価値」について、個人や小集団で話し合わせた後、代表者による発表で共有化を図った。
荻野先生：「オリンピックの価値」について、スライドの活用やクイズを通して理解を深めた。
- (3) まとめ

【石野先生による授業】



「体育館での体験学習の様子」



「教室での講義の様子」

【荻野先生による授業】



「体育館での体験学習の様子」



「教室での講義の様子」

4 研究の成果と課題

(1) 体験活動と座学を取り入れた学習の重要性

「エクセレンス」、「フェアプレー」、「他者への敬意」といったオリンピックの価値及びオリンピック精神や、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度、克己心を培い実践的な思考力、判断力を育成するためには、単に一方的に教え込んだり、個々に学習させたりするだけでは十分ではなく、生徒が自ら主体的に他の生徒たちとともに学習し、協力的に活動し体験することが重要であることがわかった。

今回の「オリンピック教室」を通して、本校の全教職員に体験活動と座学を組み合わせた学習の必要性を再確認させることができ、個々の指導力向上の大きな一歩を踏み出すことができた。来年度は、本研究の成果を踏まえて、年間指導計画の見直しを図り、体験活動と座学の学習が実施可能な箇所を教科部会で検討していきたい。

(2) 本研究を終えての成果と課題

【成果】

本研究を通して、第2学年を中心にオリンピックを身近に感じさせることができただけでなく「フェアプレー」や「フレンドシップ」等、オリンピック精神を身に付けさせる一助にすることができた。4年後に本市でも開催されるオリンピックにおいて、本市民や県民はもとより、世界各国の方々に対して本研究の成果を十分に発揮することを期待したい。

【課題】

今後は、本研究で得た組織的な取組の手立てを、来年度の校内研修等で生かし、チーム学校の具現化を推進し、本校のさらなる飛躍に努めていきたい。

研究主題

「自己を高め、心豊かで主体的に生きる生徒の育成」 ～スポーツを通して人権意識を高め、生き方を学ぶ～

川越市立霞ヶ関西中学校

研究のポイント

- 2020年東京オリンピックの会場となる本校周辺地域の準備進行に併せ、地域の士気を高めることに積極的に参画するための取り組みの工夫。
- 校地周辺の環境についての調べ学習。
- 障がい者スポーツを通して、障がいへの理解と共生、生き方を学ぶ取り組みとして「あすチャレ！スクール」の実施。
- 人権教育推進校として、人権意識を高める道徳教材を選定し、全学級で授業実施とともに、人権教育推進事業の一環として授業公開の実施。
- 人権教育の一環として、障がいの理解について学ぶ「理解教育」、外国の地域や文化に触れる国際理解教育の授業の実施。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

2020年東京オリンピックに向け、本市も一部会場となり、諸々の計画がすすめられている。地域を挙げて士気を高めていくことに、学校として積極的に参画できることを模索する。また人権教育推進校として、人権意識を高め道徳授業や大きなイベントを通し、この機を有効に活用し主体的に地域に貢献できる生徒の育成をめざしていく。

(2) 研究主題設定理由

人権教育推進校の指定を受け、全校挙げて人権教育に取り組むと共に4年後には青年期を迎える在校生徒が、オリンピック開催準備の進行の中で、自分たちにできることを積極的に考え、地域に貢献できる生徒の育成をめざす。その具現化として、人権をテーマとした道徳の授業を充実と、障がい者スポーツを通して、障がいへの理解を深め、共に生きる人権意識の高揚を図り、心豊かで主体的に生きる生徒を育成することを本研究の主題と設定した。

(3) 研究組織

環境研究部：1学年教員

道徳研究部：道徳部、人権担当を中心に全教員

国際理解研究部：2学年教員

福祉教育研究部：3学年教員

あすチャレスクール：体育科、生徒会

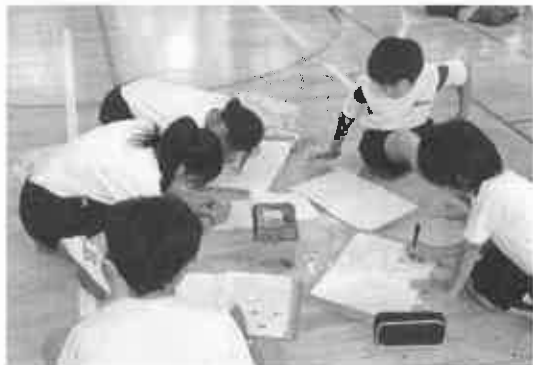
2 研究の内容

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
6 月	1 年総合的な学習の時間 『自分たちの暮らしと環境を見つめよう』 ・ 県政出前講座の活用 ・ 川の生き物、植生などを調べる。(採集) ・ 環境保全について考える。 ・ 学校周辺環境整備⇒何ができるか考え実行 * 花植え、除草、ごみ拾い等々	校地周辺 南小畔川	環境研究部 1 年生徒
8 月	校内研修 「人権意識を高め、心豊かで主体的に生きる 生徒の育成」 ・ 障がいについての正しい知識と理解を深める 資料の選定 ・ 学年ごとの道徳の資料分析、指導案作成	図書室他	道徳研究部 全教員
9 月	道徳授業の実施 ・ 全学年、全学級実施 ・ 本発表の先行授業含む	教室 体育館	全学級 担任、生徒
1 1 月	人権教育推進事業の研究授業(市内公開) ・ 2 年 3 組 佐々木教諭 「自然な手、自然な言葉」	教室	2 年 3 組 生徒
1 1 月	「あすチャレ! スクール」開催 ・ 日本パラリンピック協会主催の出前講座 ・ 車椅子バスケットボールの体験(ゲーム) ・ パラアスリートの体験と生き方の講義 ・ 障がいへの正しい理解と人権意識の高揚	体育館	全校生徒
1 1 月	理解教育 ・ 古侯教諭(特別支援学級担任)による出前授 業(1 年 1, 2, 3 組 各 1 時間) ・ 「障がいについての理解と共生」をテーマ に、通常学級の生徒に授業を実施 ・ かがやき学級の活動内容や仲間の様子等を提 示し、共に生きる意識の高揚	各教室	1 年生徒
2 月	福祉教育 社会福祉協議会より指導者招聘 ・ 高齢者疑似体験(高齢者に起こりやすい視野 狭窄や関節の動きにくさを装具で再現し、実 施に装着して歩行するなどの体験)	体育館	3 年生徒
2 月	国際理解教育 『外国から学ぼう』 ・ 学習院女子大学研究グループによる「ラオ ス」についての講義 ・ 東京国際大学留学生(多国籍)による、伝統 文化の紹介 ・ 世界の国を一つ選択し、国についての調べ学 習	2 年教室	2 年生徒

3 実践事例

(1) 第1学年 『自分たちの暮らしと環境を見つめよう』

南小畔川の水や生きものを採集し、グループで観察、スケッチをした



- ・実施日 平成28年6月28日(火)
- ・県政出前講座の活用(講師依頼)
環境科学国際センター自然環境担当主任
- ・地域人材の活用 「南小畔川を守る会」
- ・学校、南小畔川周辺の植生の観察
- ・自然環境の維持、向上、環境整備等の取組みへの意欲付けにつなげる。

(2) 人権教育及び道徳授業

- ・1学年：1校時 学活 「新ちゃんが泣いた」を視聴し、感想文を書く
- 2校時 道徳 差別や偏見のない共生社会の実現
- 3校時 道徳 「僕の社会体験」
- ・2学年：1校時 社会 部落差別の起こりと現状
- 2校時 総合 部落差別についての講演会
- 3校時 道徳 「自然な手、自然な言葉」
- ・3学年：1校時 学活 「めぐみ」を視聴し、ワークシートを記入
- 2校時 学活 「奪われている権利(子供の権利条約)」
- 3校時 道徳 「オリンピックから見る人権問題」
- ・かがやき学級 ～仲間と気持ちよくすごすために～
- 1校時 学活 掲示物作成 ありがとうの木 幸せの木
- 2校時 自立活動 S S I すごろく①ルールを覚えよう
- 3校時 自立活動 S S I すごろく②実際に挑戦しよう

(3) 『あすチャレ! スクール』の実施

- ①目的
 - ・川越市人権教育推進校の指定を受け、「相互の生き方を認め合い、共に生きていこうとする態度」を養い、「人権意識の育成」に努める。
 - ・地域における障害者スポーツの振興や学校におけるオリ・パラリンピック教育の充実に取り組む。
 - ・パラリンピックアスリートと接することや体験することを通じ、障害についての学習および気づきの機会を提供する。
- ②日時 平成28年11月17日(木) 90分間
- ③参加者 全校生徒、全教員、保護者、地域の方
- ④内容
 - ・車椅子バスケットボールのゲームの体験。
 - ・全校生徒で選手を応援する。
 - ・パラアスリートの体験と生き方の講義により、障がいへの正しい理解と人権意識を高める。



車椅子バスケットボールの体験

(4) 国際理解教育『外国から学ぼう』 第2学年

①ねらい

- ・外国人講師の講演や体験から、自国の文化や風習との違いを実感する。
- ・日本や世界の国々の文化や伝統に関心を持ち、自ら課題を設定し調査・研究・分析・発表をする力を養う。
- ・異国との違いを学び、視野を広げ国際貢献も含めた生き方を考える機会とする。

②日 時 平成29年2月3日(金) 第5、6校時

③講 師 東京国際大学の留学生 6名

(中国、韓国、モンゴル、タイ、ナイジェリア、ドイツ)

【生徒配布用資料一部抜粋】

・・・そこで2年生では、「外国から学ぼう」というテーマを自分の生き方を考える最後のテーマとしました。国際社会に生きる君たちは、日本人としての自覚を持ち、広い視野に立って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きる資質や能力を身につける必要があります。さらに、君たちには将来、日本はもちろんのこと、世界の人々が平和で豊かに暮らせる社会を創造できる人材に成長していくことが期待されているのです。。。。。

4 研究の成果と課題

今年度は「人権意識の高揚」「障がいの理解と共生」「オリ・パラスポーツ」の3つのキーワードを意識し、研究内容を模索しながら、学校の現状に合った内容を組み込むことができた。主に、「あすチャレ!スクール」の実施と全学級での道徳授業の実施、公開で、生徒の人権意識に変容がみられたこと、環境や、国際理解も含め、多方面からのアプローチで生徒の興味関心や活動意欲の高揚につながったことは大きな成果である。また、学年での道徳の資料分析や公開授業は教員にとって貴重な研修の場面となり、教員のチームワークの向上にも非常に有効であった。来年度も計画の工夫、見直しをし、今年度の取組を更に深めていく。

研究主題

「自らの意思と能力で自らの道を切り拓く生徒の育成」 ～スポーツを通して生き方を学ぶ～

川越市立川越西中学校

研究のポイント

- 2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた「JOCオリンピック教室」におけるオリンピックの授業を通じた学習
- 校内研修を利用した生徒理解のための各種研修
- 小中連絡会を利用した道徳教育の研究
- 総合的な学習の時間での「生き方を学ぶ」学習

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

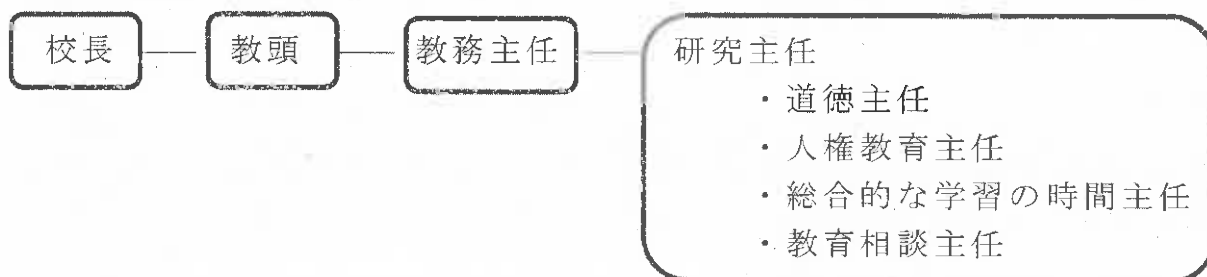
2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて本市は、ゴルフ競技での会場となっている。全市をあげて開催に向けた諸事業が進められているところである。霞ヶ関地区に隣接した本校においてもオリンピック事業に合わせて学校全体で様々な視点からの参画を目指し、スポーツを通しての生徒の健全育成、地域へ貢献できる生徒の育成を目指していく。

特に「道徳教育」「総合的な学習の時間」に視点を当てることで、スポーツを通して「生き方を学ぶ」研究を学校全体で取り組むとともに校内研修を利用した各種研修を実施する。

(2) 研究主題設定理由

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催時には、本校生徒は、10代後半の青年期にあたる。将来に向けて自らの意思と能力で自らの道を切り拓くことができる生徒を育成するため、特に「スポーツを通して生き方を学ぶ」ことに視点をあてることとした。また、あわせて、道徳教育や総合的な学習の時間、更に小中連携の授業研究を通して生徒の健全育成、地域へ貢献できる生徒の育成を目指していく。

(3) 研究組織



2 研究の内容

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
6月16日	小中連絡会 各学年道徳授業実施 「生き方を学ぶ」	川越西中学校	各学年1クラス
7月～ 11月	2年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶ①」	川越西中学校	2年生
8月22日	校内研修「人権教育」 「摂食障害について」 ～理解と援助～	川越西中学校	全教員
8月23日	視覚障害の理解のための研修 霞ヶ関5校合同研修会 「道徳教育の研究」 ・学年ごとの道徳の教材研究、 資料分析	塙保己一学園 霞ヶ関北公民館	全教員 全教員
9月～ 3月	1年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶ②」	川越西中学校	1年生
10月～ 1月	3年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶ③」	川越西中学校	3年生
10月31日	小中連絡会 小学校の授業参観 道徳を含む授業の実施	川越西小学校 霞ヶ関北小学校	全学年、全学級
11月29日	メダリストによる出前講座 (学級指導、実技)	本校教室、体育館 川越西中学校	2年生
1月～ 2月	3年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶ④」		3年生

3 実践事例

(1) 人権学習 ～夏休みの研修 今後の計画～

① 1学年

- ・5月に「めぐみ」のビデオを視聴した。北朝鮮の問題がよくわかっておらず、拉致という言葉自体難しかったようで、あまり生徒に伝わらない部分があった。もう少し、わかりやすい身近なテーマから始めた方がよかったという反省があがった。
- ・人権作文を書く課題では、身近ないじめ問題や高齢者に親切にした経験や障がい者と触れ合う機会を持った体験などを書いている生徒が多かった。
- ・2学期中に改めてビデオ視聴して人権意識をさらに高めていく。また日常的に、道徳の時間や朝や帰りの会で生徒に話をしたり、休み時間などに生徒の話を聞いたり、交換ノートを活用したりすることで生徒の心を

耕していく活動が大切だということを確認した。

② 2 学年

- ・ 1 年次にいじめ問題、障がい者（福祉学習）を勉強した。
- ・ 2 年次では、「めぐみ」を視聴し、さらに国際的な人権問題に触れる機会を作っていきたい。
- ・ 3 年次では、社会の授業で、アイヌの学習やハンセン病の学習内容に合わせてハンセン病などの差別について学ぶ。
- ・ 学校全体で、その学年にやるべきことを決めておく計画を進める。また社会での指導を考慮しながら、内容を設定し、ビデオやプリントを用意していく。

③ 3 学年

- ・ 1 学期に人権学習として「こんにちは金泰九さんハンセン病問題から学んだこと」を視聴した。
- ・ 本校では生徒会が中心となっていじめ撲滅キャンペーンを行っているので、生徒主体で人権問題を考えさせる取組を行っていく。
- ・ 3 年次で、自分の進路を見つめる時期に、よりよい社会を作っていく一員になるためにはどうしたらよいか、考えさせる機会を持ちたい。

(2) オリンピック教室 平成28年11月29日（火）第2学年実施

サッカー シドニーオリンピック出場 酒井友之氏

水泳 北京オリンピック出場 内田 翔氏

「オリンピック教室」の授業は、教師役のオリンピックが、オリンピック大会出場に至るまで、あるいは、実際にオリンピック大会に出場して得た貴重な経験等を通して、「エクセレンス」、「フレンドシップ」、「リスペクト」、「努力から得られる喜び」、「フェアプレー」、「他者への敬意」といったオリンピックの価値（バリュー）及びオリンピック精神の価値等を伝えてくださった。この価値がオリンピックに出場した選手だけのものではなく、多くの人が共有し日常生活にも活かすことのできるものであること、さらに、こうした考え方があるからこそオリンピックに価値があることを学習できた2時間となった。



《生徒の感想》

実技として体育館でやったことが、教室でやる座学につながっていて、座学でやったことを深く理解することができました。また、あきらめないで努力することなど、実際に経験した方から話をきくことで、より大事なこととして心に残りました。

オリンピックのマークの色や形に意味があって驚きました。実際に体験されたことを話してくれ、内容もとても分かりやすかったし、遠くに感じていたオリンピックを身近に感じることができました。

オリンピックに出た人だから、話もおもしろかったし「努力」「あきらめない気持ち」という言葉にも説得力があった。2020年の東京オリンピックが楽しみになった。

(3) 総合的な学習の時間 平成28年11月 第3学年実施

①目的 世界に目を向け、開発途上国の暮らしや文化を学び、今の生活や将来自分ができていることを考える。

②学習内容

- ・ガイダンス 「これから学ぶもの」
- ・講座1 「カンボジアの暮らし・文化」
留学生交流協会講師
- ・講座2 「海外ボランティアの体験談と日本の支援・援助の課題」
JICA講師 3名



「講座2」は、海外青年協力隊の隊員として、カンボジア、ラオスへ行った方の体験を踏まえた講義を実施していただいた。「現地の人のことを知る（生活習慣・考え方等）ことが大切」という言葉をから3学年の生徒にとって、進路選択を控えたこの時期に、貴重な機会となった。

4 研究の成果と課題

「JOCオリンピック教室」、生徒理解のための各種研修、総合的な学習の時間での学習をとおして、「自らの意思と能力で自らの道を切り拓く生徒の育成」に向けて研究を進めた。各学年がそれぞれのテーマに沿って研究を進めることで年次進行の川西中スタイルが形になりつつある。

来年度に向け、本校生徒の実態の分析を更に進めることで計画的、効果的な指導を進め、興味関心や活動意欲の高揚につなげていきたい。